

大阪狭山市文化財報告書10

ひ つ 池 西 窯

— 陶邑窯跡群の調査 —

1993.3

大阪狭山市教育委員会

ひ つ 池 西 窯

— 陶邑窯跡群の調査 —

1993.3

大阪狭山市教育委員会

序 文

大阪狭山市内には、府の史跡名勝に指定されております狭山池をはじめとして、多くの文化財があります。とくに、本市域は陶邑窯跡群の一角に位置するため、市内のいたるところに古墳時代の須恵器の窯跡がのこされています。

こうした窯跡のひとつとして、ひつ池西窯が知られておりました。

ひつ池は、その西岸を護岸するために、コンクリート擁壁を施すこととなりましたが、それに先立って実施された発掘調査によって、須恵器窯と多くの遺物を確認することができました。

先に発掘調査を行なった、太満池南窯・北窯、狭山池2号窯・3号窯・池尻新池南窯などに加えて、今回の発掘調査の成果も非常に貴重なものとなりました。本書は、このひつ池西窯の発掘調査結果を記録し、その報告を行なったものです。本書が、考古学研究の一助となり、その責を果たすことができれば、まさに望外の喜びです。

また、本調査に際しまして数々のご指導とご協力をいただきました各位には心からお礼申し上げます。

本市教育委員会としましては、今後とも、文化財の保護・調査・活用に努めていく所存であります。皆様方の温かいご理解とご支援を、よろしくお願ひ申し上げます。

平成5年3月

大阪狭山市教育委員会

教育長 上 谷 三 郎

例　　言

1. 本書は、大阪狭山市金剛二丁目9-1に所在する農業用溜池である、ひとつ池の西岸部において実施した、須恵器窯跡発掘調査の成果を報告するものである。
2. 調査は、ひとつ池西岸護岸改修工事に伴うものである。範囲確認調査は平成3年（1991年）2月14日に開始し、同年2月21日に終了した。本調査は平成3年11月18日に開始し、平成4年（1992年）1月14日に現地における全作業を完了した。その後、整理作業と報告書作成作業を、平成5年（1993年）3月まで実施した。
3. 現地調査は、範囲確認調査を大阪狭山市教育委員会社会教育課主事 市川秀之が担当し、本調査を同主事 植田隆司が担当した。調査補助員として、津野忠之・井上恭輔・橋本幸男・大塚貴幸の参加協力があり、調査作業員として桜渕繁太郎・高林正男の参加を得た。また、遺物整理と報告書作成には、調査参加者のほか、若宮美佐・植山てる江・五福實幸・中尾美津江・飯田和子・伊月みどり・今谷満里子・田中妙子・森本豊久子・浦孝子がこれにあたり、吉本和美・安有美子・山崎和子・笹岡裕里子・塔本真知子・井上昌代・鬼塚里子・マウリシオ タム コンタレラス・アレハンドラ ベナの参加協力があった。
4. 製図は、遺構・遺物を吉本と安と笹岡が、考察のグラフを山崎が担当した。
5. 現地における写真撮影は植山が担当した。出土遺物の写真撮影は阿南写真工房に業務委託し、阿南辰秀氏・伊藤慎司氏が行なった。航空写真撮影は株式会社エジニアリングの協力を得た。
6. 本書の執筆・編集は植田が行なった。
7. 本文中の註記は、各章末に記した。
8. 出土遺物実測図の縮尺率はすべて1/3に統一した。写真図版における遺物の縮尺率は不統一である。なお、遺物実測図と遺物写真の照合は、遺物観察表を参照されたい。
9. 第1図～第3図の方位は座標方眼北を指すが、第4図の方位および本文中における方位は磁北を用いている。レベル高はT.P.（東京湾標準潮位）値による。
10. なお、この調査で出土した遺物と記録図面・写真是本市教育委員会の埋蔵文化財資料整理室にて収蔵・保管している。ご活用されたい。

本文目次

(頁)

序文 大阪狭山市教育委員会教育長 上谷三郎・

例 言

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1

第2章 調査の契機と経過	10
--------------	----

第3章 遺 構

第1節 調査の概要	12
第2節 灰原の広がりと層序	13

第4章 遺 物

第1節 上部上層灰原出土遺物 [HTW-A 2]	17
第2節 上部下層灰原出土遺物 [HTW-A 1]	17
第3節 下部上層灰原出土遺物 [HTW-B 2]	18
第4節 下部下層灰原出土遺物 [HTW-B 1]	19
第5節 試掘溝内出土遺物	19

第5章 考 察 —ひつ池西窯出土須恵器の編年の位置付け—

第1節 窯跡資料に基づく編年の補強作業方法	50
第2節 蓋身逆転期の窯跡資料の比較	52
(1) HTWの杯身法量とたちあがり	52
(2) HI 1の杯身法量とたちあがり	55
(3) TG10-Iの杯身法量とたちあがり	55
(4) TG32の杯身法量とたちあがり	56
(5) TG11-IIの杯身法量とたちあがり	57
(6) TG206の杯身法量とたちあがり	61
(7) TG61の杯身法量とたちあがり	61
第3節 ま と め	62
調査と整理を終えて	66

挿 図 目 次

(頁)

第1図	大阪狭山市内埋蔵文化財分布図	2
第2図	大阪狭山市内地形分類図	3
第3図	調査地位置図	9
第4図	ひつ池西窯〔HTW〕灰原平面図	14
第5図	ひつ池西窯〔HTW〕灰原土層断面図	15
第6図	ひつ池西窯灰原出土遺物(1)	20
第7図	ひつ池西窯灰原出土遺物(2)	21
第8図	ひつ池西窯灰原出土遺物(3)	22
第9図	ひつ池西窯灰原出土遺物(4)	23
第10図	ひつ池西窯灰原出土遺物(5)	24
第11図	ひつ池西窯灰原出土遺物(6)	25
第12図	ひつ池西窯灰原出土遺物(7)	26
第13図	ひつ池西窯灰原出土遺物(8)	27
第14図	ひつ池西窯〔HTW〕出土の杯身の法量	53
第15図	ひつ池西窯〔HTW〕出土の杯身のたちあがり	53
第16図	東池尻1号窯〔H11〕出土の杯身の法量	54
第17図	東池尻1号窯〔H11〕出土の杯身のたちあがり	54
第18図	TG10-I号窯出土の杯身の法量	56
第19図	TG10-I号窯出土の杯身のたちあがり	56
第20図	TG32号窯出土の杯身の法量	57
第21図	TG32号窯出土の杯身のたちあがり	57
第22図	TG11-II号窯出土の杯身の法量	58
第23図	TG11-II号窯出土の杯身のたちあがり	58
第24図	TG206号窯出土の杯身の法量	59
第25図	TG206号窯出土の杯身のたちあがり	59
第26図	TG61号窯出土の杯身の法量	60
第27図	TG61号窯出土の杯身のたちあがり	60

表 目 次

(頁)

第1表	ひつ池西窯上部上層灰原出土遺物観察表 (HTW-A 2).....	28
第2表	ひつ池西窯上部下層灰原出土遺物観察表 (HTW-A 1).....	31
第3表	ひつ池西窯下部上層灰原出土遺物観察表 (HTW-B 2).....	42
第4表	ひつ池西窯下部下層灰原出土遺物観察表 (HTW-B 1).....	43
第5表	ひつ池西窯灰原試掘溝内出土遺物観察表	47
第6表	大阪狭山市域の須恵器窯跡略号対照表 (既調査分)	51
第7表	蓋身逆転期の窯跡資料分類表	65
第8表	報告書抄録	67

図 版 目 次

図版1	上空よりのぞむひつ池 (航空写真)
図版2	a. 調査区全景 b. 範囲確認調査
図版3	a. 灰原の広がり b. 下部下層灰原掘削状況
図版4	a. 上部灰原と崩土の堆積 b. 上部灰原上面検出状況 (半掘)
図版5	a. 灰原堆積以前の地形 (東から) b. 灰原堆積以前の地形 (南東から)
図版6	a. 灰原堆積以前の地形 (北東から) b. 溝1・溝2
図版7	ひつ池西窯上部上層灰原 [HTW-A 2] 出土遺物
図版8	ひつ池西窯上部下層灰原 [HTW-A 1] 出土遺物(1)
図版9	ひつ池西窯上部下層灰原 [HTW-A 1] 出土遺物(2)
図版10	ひつ池西窯上部下層灰原 [HTW-A 1] 出土遺物(3)
図版11	ひつ池西窯上部下層灰原 [HTW-A 1] 出土遺物(4)
図版12	ひつ池西窯下部灰原 [HTW-B] 出土遺物
図版13	ひつ池西窯灰原試掘溝内出土遺物

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

泉北丘陵と羽曳野丘陵に挟まれた地に位置する大阪狭山市は、旧天野川の氾濫原である狭山池主谷がその市域の南北を貫いている。その狭山池主谷の東西に中位段丘が占地し、さらにその外側に前述の丘陵およびそれに連なる高位段丘がつづく（第2図）。

この主谷からは多くの支谷が分岐している。かつて、旧天野川に合していた三屋川（今熊川）は、現在では狭山池にその水をそそぎこんでいる。この三屋川に沿って走る支谷は狭山池主谷から分岐する支谷のひとつである。

現在、天野川（西除川）と三屋川の水は狭山池に流れ込んだ後に西除川と東除川となり中位段丘上を北上している。これは、近世に支谷を利用して人工的に水路を固定したことによるものであり、それ以前は旧天野川が主谷の沖積低地をそのまま北上していた。

また、狭山池主谷東側の中位段丘では旧天野川と水系を異にする幾条かの河川によって開析が進んだようであり、その箇所では細かな谷筋が形成され、低位段丘および沖積低地となっている。このうちの最も西側の谷筋が、ほぼ現在の富田林市と本市との市境となっている。この谷は、富田林市の廿山方面から流れ下る川が段丘面を穿った結果、形成されたと考えられる。現在、この川は狭山池東除からの放流と合流しており、その合流点よりも上流側も同じく東除川と呼称されている。今回発掘調査を実施した、ひつ池西窓は、この水系の左岸の段丘崖に立地している。

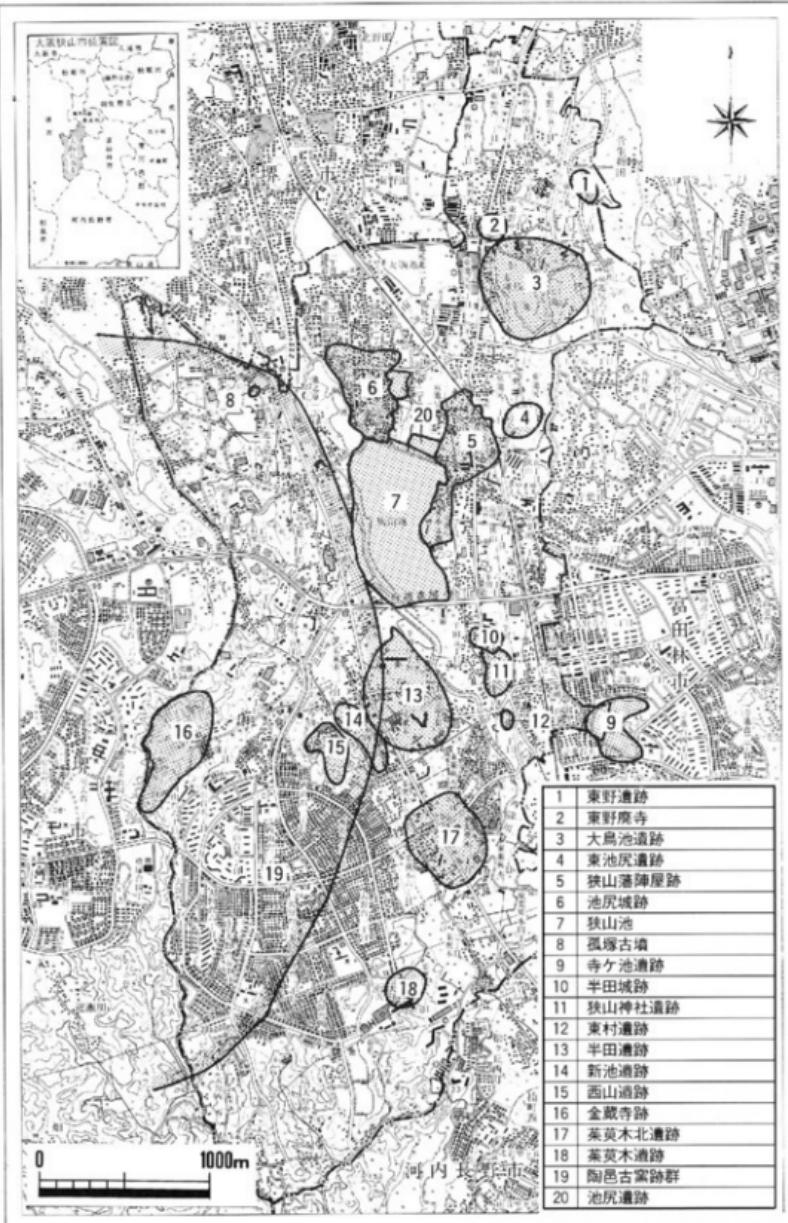
これらのような中位段丘崖や中位段丘が開析されたために形成された崖面の他に、現在堺市との市境をなしている、泉北丘陵東端の陶器山丘陵とその北側に連なる高位段丘にも細かな支谷があり、至る所に斜面や崖面が形成されている。

こうした多くの斜面・崖面などの段差をもった特徴ある地形が、この地に関わる人々の活動を特色付けてきたのである。

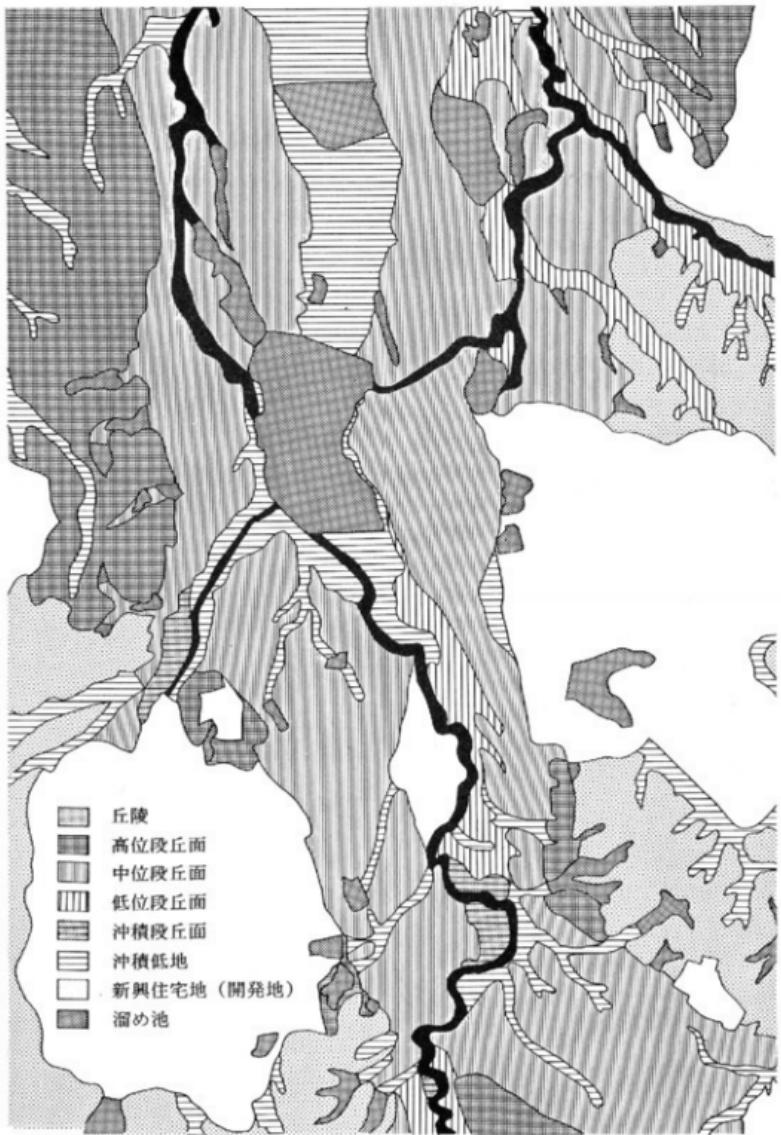
第2節 歴史的環境

旧石器時代・縄文時代の本市域内における先人の足跡は、現段階においてはその遺構を確認するに至っておらず、採集された資料から推し量るより他はない。故西野良政氏・上野正和氏・西岡勝彦氏の諸氏は、昭和30年代後半以降、本市域の各所において石器の採集および分布調査等の活動をされてきた。これより以後において、石器が検出されたことはごく稀であり、諸氏の残した成果¹⁾は非常に貴重なものである。

旧石器時代の遺物としては、晩期旧石器時代の有舌尖頭器が寺ヶ池遺跡にて採集されて



第1図 大阪狭山市内埋蔵文化財分布図



第2図 大阪狭山市内地形分類図（豊田兼典氏原図）

いる。また、東野遺跡・池之原地区・ひつ池の各所から採取されたナイフ型石器も、この時代の遺物となりうる可能性がある²⁾。

縄文時代の石器は、寺ヶ池遺跡・東村遺跡・大鳥池遺跡・へど池・狹山池・ひつ池・上明池・池之原地区などで石鏃・石匙等が採取されている³⁾。

弥生時代の遺跡としては、茱萸木遺跡⁴⁾がこの時代の遺跡となりうる可能性を有するのみであり、その他では、狹山池底などの旧天野川沿いの各所において土器片が散見されることと、池尻新池で茎のある柳葉形石鏃が採集されていることを挙げうる程度である。

古墳時代以後の本市域内における人々の活動の痕跡は、近年の新たな調査成果によってほぼ明確に認識しうるものとなりつつある。

旧天野川流域の沖積低地に立地する池尻遺跡では、溝・土坑・焼土坑など住居跡となる可能性がある遺構とともに、庄内式の甕が検出された⁵⁾。この庄内期の遺構の上層では、水田跡が検出され、さらにその上層ではTK43型式の須恵器がその埋土中に含まれる溝・柱穴等の遺構が検出されている。この調査区の最上層の遺構面では、TK217型式の須恵器を埋土中に包含する畳ないしは水田となりうる遺構が検出されており、狹山池が築造される以前から、その下流にあたるこの地では、本市域内の他の地域に先駆けてある程度の規模を有した集落が成立していたといえよう。

古墳時代中期以降、泉北丘陵を中心とした地域で須恵器生産が盛んに行われ、陶邑窯跡群が形成された。5世紀代から6世紀前葉までの窯の造営は、本市域内においては陶器山丘陵およびその北方に連続する高位段丘のみに限定されるようである。発掘調査が行われたものとしては、TK47型式～MT15型式の須恵器を生産したMT252号窯（山本1号窯）⁶⁾がある。また、その南南東約800mの地点には、MT15号窯⁷⁾がある。

TK10型式の須恵器を第1次焼成時に生産した須恵器窯は、今までのところ発掘調査が行われておらず、分布調査によってもTK10型式の採集資料は少ないため、6世紀中葉頃の本市域内における窯跡の分布範囲は明らかではない。

増大した需要に対応して、6世紀代の陶邑窯跡群の生産活動はより活発なものとなり、窯体の構築場所と燃料の薪をあらたに確保するために、陶器山地区の窯の造営は、丘陵および高位段丘から東方の中位段丘へとその分布域を拡大する。TK43型式～TK209型式の須恵器を生産する、こうした中位段丘の崖面に築かれた窯跡には、太満池北窯（TMN）⁸⁾・太満池南窯（TMS）⁹⁾・狹山池2号窯（S12）¹⁰⁾・狹山池3号窯（S13）¹¹⁾・池尻新池南窯（ISS）¹²⁾・今熊1号窯（IK1）¹³⁾ひつ池東窯（HTE）等がある。なお、当該期の窯の造営は東除川水系の中位段丘崖より以西で行われ、この谷筋が陶邑窯跡群の東端となっている。

旧天野川の水を堰き止めてダムとする狹山池は、狹山池主谷を横断するその堰き止め箇所である北堤の構築時期をもって池の築造時期とするのが、現在のところほぼ妥当であると考えられる。池築造のための盛土である、この北堤の北斜面を利用して、TK217型式

の須恵器を産出した狹山池北堤窯（S I N）¹⁴⁾が築かれていた。また、北堤北側の沖積低地では、池尻遺跡の水田跡が検出され¹⁵⁾、この遺構面は北境盛土直下へと続いており、遺構面のベース層直下は泥湿地状の堆積土、さらにその下層には河川堆積による川砂層が検出される。この川砂層およびその上層からは、長頸壺・横瓶¹⁶⁾などが出土しており、これらはTK 209型式を遡行するものではない。よって、狹山池北堤構築の時期はTK 209型式からTK 217型式の間に求められ、狹山池築造の時期は6世紀末～7世紀前葉として考えるのが、現在のところ最も妥当であるといえよう³⁵⁾。

なお、TK 217型式の須恵器を産出する窯にはS I Nの他に、狹山池北堤東端が接する中位段丘崖に東池尻1号窯（H I 1）¹⁷⁾があり、東除川水系の段丘崖には本報告書にて報告を行う、ひとつ池西窯（HTW）がある。

7世紀後葉から8世紀初頭に至ると、東野廃寺が旧天野川水系右岸の中位段丘上に建立される。

奈良時代には、天平3年（731）以後、僧行基が狹山池の改修等を行なったと『行基年譜』等に記されているが、それに関連する遺構・遺物は現在のところ出土していない。

平安時代の遺跡としては、狹山神社遺跡があげられる。狹山神社の参道部分では9世紀の遺物をともなう遺構面が確認されている¹⁸⁾。

鎌倉時代には、僧重源による狹山池改修が行われた。狹山池中樋遺構¹⁹⁾からは、この時の石樋（いしひ）として転用されていたと考えられる、古墳時代後期以降の削抜式家形石棺の身と蓋が9個体出土した。狹山池の大正時代の改修の際に、末永雅雄博士により保護された削抜式家形石棺の3点の蓋と4点の身は、それと同様に僧重源によって石樋として伏せられていたものと考察されている²⁰⁾。

また、この中樋遺構からは石棺転用の石樋とともに僧重源の狹山池改修を記した石碑が出土した。この石碑の碑文には、僧行基が天平3年（731）に堤を築き樋を伏せたものの現在は水が漏れて毀破しており、摂津・河内・和泉の三箇國の流末50余郷の人民の請願によって、重源が行年82歳の時、建仁2年（1202）の春に修復を企て、2月7日から土を掘り始め、4月8日から石樋を伏せ始め、同24日に終功するとの改修工事の経過が記され、その間、道俗男女沙弥少児まで同地の人々が手で自ら石を引き、堤を築いたとあり、この結縁をもって一佛平等の利益を願うとの願文がある。

その後には「大勸進造東大寺大和尚 南無阿弥陀佛」の重源を示す名が刻まれ、続いて「少勸進阿闍梨（パン）阿弥陀佛」・「淨阿弥陀佛」・「順阿弥陀佛」の重源の弟子達の名が刻まれていた。さらにその後に、「番匠廿人之内 造東大寺大工伊勢守物部為里」・「唐人三人之内大工守保」の工人の名も記されていた。これらの人名は、東大寺南大門の金剛力士像の解体修理の際に検出された胎内経巻²¹⁾に記された結縁交名の中に確認することができるため、石碑の碑文はきわめて同時代性の高い史料であると考えられている。

ところで、狹山池北堤から北方約400mの地に池尻遺跡²²⁾が13世紀前半には営まれてお

り、水田跡や屋敷跡などの遺構が検出された。

また、この池尻遺跡を見下ろすことのできる旧天野川左岸の中位段丘上に、鎌倉時代末期には単郭の居館状遺構である池尻城²³⁾が構えられた。南北朝が分裂してから2年に満たない延元3年(1338)には、池尻半山の地で幕府方の細川頼氏と和泉・河内の土豪とが戦闘を行っている。また、正平2年(貞和3年・1347)には、幕府軍の籠もる池尻城を楠木正行の軍が攻撃した池尻合戦があった。この頃に用いられていたと考えられる太刀の柄頭の金具である冑金が発掘調査²⁴⁾で出土している。ちなみに、この冑金には近江源氏の佐々木氏の紋である三目結の文様が彫り込まれている。池尻城が、3つの郭が独立した城郭としての機能を有するようになったのは、先の2度の合戦を経て、当該地の占める戦略的重要性が認識された14世紀後半頃のことと考えられている²⁵⁾。

さて、僧重源が改修を行った狭山池は、彼らの願う通りにその役割を果して、下流域を潤していたのであろうか。前述の池尻遺跡の13世紀前半の遺構面は、その上面を60~70cmの厚さの複数回にわたる洪水砂が覆っていた。この地点においては、狭山池北堤の決壊以外にこのような砂層の堆積の原因を想定することは困難である。よって、重源が改修を行ってから数十年後には北堤は決壊し、彼らの願いに反して、狭山池はその機能をほとんど喪失していたと想定されるのである。決壊以降も、改修が行われた形跡はほとんどなく、戦乱の時代に入って下流域の生産能力の安定をはかる努力はなされなかったようである。

慶長13年(1608)、豊臣秀頼の家臣である片桐且元によって狭山池の改修が行われた。この時の改修では中樋と西樋と東樋(鉄樋)の3個所の樋が設置されたと推定される。中樋と西樋は4段の取水口を有する尺八樋と呼称されるもので、これらの樋は、近世以降幾度となく行われた狭山池改修の中で補修が繰り返され、大正の改修によって現在の樋が設置されるまでの約300年間にわたってその使用に耐えてきた。中樋遺構²⁶⁾・西樋遺構²⁷⁾の発掘調査では樋本体とその両側に設置された扇子板と呼ばれる堤体保護のための埠状施設に構造船および準構造船の部材の転用が確認された²⁸⁾。

特に西樋遺構のこの木材は千石級の船の外板などの部材と考えられ、慶長13年以前に使用されていた船であることを考慮に入れるに、近世初期の商用の和船である廻船は500石積以下のものが主体であったとされており²⁹⁾、慶長14年に徳川幕府から安宅船禁止令が下令される以前に用いられていた大安宅船³⁰⁾級の軍船の部材であった可能性は高いといえよう³¹⁾。

一方、中樋遺構の転用材には縫い釘による板材の接合痕は確認しえないが、舟釘の穴の状況や板カスガイによる板材の接合等は船材のそれと同様のものであり、これらの部材が船の外板であるならば千石級の船の一部となる。この中樋遺構の木材は、現段階では船材である確証を得ることはできないものの、近世の和船において用いられている技術が完全に定形化する以前の、まだ解明がなされていない中世の日本の準構造船の一資料となりうる可能性がある。ちなみに、中樋遺構のこの転用材は、年輪年代測定で1566年+10数年の伐採年代が得られており³²⁾、中樋に転用された1608年までの22年間~42年間という、船と

して機能するに充分な年数を有している。

また、中樋遺構の扇子板の各々延長上に、建仁2年（1202）の重源の改修の際に樋管として用いられた家形石棺が、扇子板と同様の目的で2段に積み上げられて、再々利用されていた。これと同様に、重源の改修を記す石碑もこの一部に再利用されていたのである。この石碑の表面に認められる墨の遺存から、重源碑文と文章が概ね同じである田中家文書『狭山池修復記』³³⁾は、慶長の改修でこの石碑が扇子板として転用される際に採拓されて筆写されたものと考えることができる。

狭山池はこの後、小堀遠州の改修をはじめとして大正末期の改修が行われるまでの間、損壊がおこる度に、約50回におよぶ改修が繰り返され、中世の荒れ果てた状態とは異なり近世から近代にかけて充分にその役割を果してきた。

ところで、近世初期には、豊臣秀吉によって小田原城を落とされた戦国大名北条氏の末裔が、狭山池主谷を挟んで池尻城跡をのぞむ中位段丘上に陣屋を構えた。以後、明治維新に至るまでの間、狭山藩の陣屋は一貫してこの地にて営まれていた。最近では、この狭山藩陣屋跡の域内において、個人住宅の建替え等の比較的小規模な開発が増加している。これらに伴う発掘調査では、天明年間の大火灾によって形成された焼土層や灰層を境にしてこの大火以前の下層遺構面と、大火以後から幕末頃までの上層遺構面が存在することが確認され、徐々に狭山藩の陣屋の構成が明らかになりつつある³⁴⁾。

註記

- 1) a : 上野正和「狭山の考古学研究と私」『さやま誌 大阪狭山市文化財紀要』創刊号、1922年
b : 狹山町史編纂委員会『狭山町史』第2巻、史料編、1966年
c : 「大阪狭山市史編」
- 2) 前出註文献1
- 3) 前出註文献1
- 4) 1960年代後半に、近畿大学医学部附属病院用地造成に伴って発掘調査が行われ、現地説明会も実施されたようであるが、詳細は不明である。
- 5) 市川秀之「仮設グラウンド予定地発掘調査」『狭山池調査事務所平成3年度調査報告書』1992年
- 6) 楠仁孝・市川秀之「山本1号窯発掘調査概要報告書」『大阪狭山市文化財報告書』1、1988年
- 7) 田昭三「陶邑古窯址群I」『平安学園考古学クラブ研究論集』10、1968年
- 8) 市川秀之・植田隆司「太満池南窯・北窯発掘調査報告書」『大阪狭山市文化財報告書』5、1991年
- 9) 前出註文献8
- 10) a : 植田隆司「平成2年度調査実施報告 発掘調査(S190-1)」「狭山池調査事務所平成2年度調査報告書」1991年
b : 同「狭山池2号窯・3号窯出土遺物整理報告」『狭山池調査事務所平成4年度調査報告書』1993年
- 11) a : 植田隆司「狭山池3号窯発掘調査報告(S191)」「狭山池調査事務所平成3年度調査報告書」1992年
b : 前出註文献10-b
- 12) 市川秀之・植田隆司「池尻新池南窯発掘調査報告—陶邑窯跡群の調査—」『大阪狭山市文化財報告書』7、1992年
- 13) 植田隆司「陶邑窯跡群 今熊1号窯(1K1号窯)発掘調査報告」「大阪狭山市内遺跡群発掘調査概要報告書4」「大阪狭山市文化財報告書」12、1994年

- 14) a : 市川秀之「池尻遺跡(青少年グラウンド部分)発掘調査報告」「狹山池調査事務所平成4年度調査報告書」1993年
b : 植田隆司「狹山池北堤廬発掘調査」「狹山池調査事務所平成5年度調査報告書」1994年
c : 同「狹山池北堤廬灰原(池尻遺跡水田遺構埋土)出土遺物整理報告」「狹山池調査事務所平成5年度調査報告」1994年
- 15) 前出註文献14-a
- 16) 口頭部を欠損する肩部・体部・底部の破片である。
- 17) a : 植田隆司「東池尻1号窯発掘調査報告」「狹山池調査事務所平成4年度調査報告書」1993年
b : 同「東池尻1号窯出土遺物整理報告」「狹山池調査事務所平成5年度調査報告書」1994年
- 18) 市川秀之「狹山神社遺跡試掘調査報告書2」「大阪狭山市文化財報告書」8、1992年
- 19) a : 狹山池調査事務所「狹山池江戸大改修」(中橋遺構現地説明会資料)1993年
b : 市川秀之「中橋遺構発掘調査」「狹山池調査事務所平成5年度調査報告書」1994年
- 20) 末永雅雄『池の文化』学生社、1972年
- 21) 「東大寺南大門金剛力士像納入文書『一切如來心秘密全身舍利宝筐印陀羅尼經』」は井上一稔「運慶・快慶とその弟子たち」(奈良国立博物館特別展開録)1994年、所収。
- 22) 前出註文献5
- 23) a : 小林義孝「池尻城跡発掘調査概要」1987年、大阪府教育委員会
b : 犀仁孝「池尻城と南北朝の動乱」(狹山町立郷土資料館特別展示図録)1987年
- 24) 大阪府教育委員会1985年調査。前出註文献23-a
- 25) 前出註文献19
なお、中橋遺構の西側には同時期に構築されたと考えられる木製護岸遺構が検出された。
a : 狹山池調査事務所「狹山池遺跡一北堤木製護岸遺構一現地説明会資料」1993年
b : 市川秀之「木組遺構発掘調査」「狹山池調査事務所平成5年度調査報告書」1994年
- 27) 狹山池調査事務所1994年調査
- 28) 同様の構造船の部材は、韓国の新安で引き揚げられた13世紀の沈没船などにみることができる。
金在璽「新安海底遺物」総合編、1988年、大韓民国文化公報部・文化財管理局
- 29) 石井謙治「図説和船史話」「図説日本海事史話叢書」1、至誠堂、1983年
同「船」復元日本大観、4、世界文化社、1988年
- 30) 藏田信長が元亀4年(1573)に建造した大安寺船や、朝鮮戦役用に九鬼嘉隆が文禄元年(1592)に建造した日本丸、毛利輝元が文禄2年(1593)に建造したとされる船、朝鮮戦役後に九鬼嘉隆や本多忠政らが建造した三国丸、太一丸などが知られており、その形態は「肥前名護屋城図屏風」(佐賀県立博物館蔵)等の絵図によって推定しうる。
前出註文献28
- 31) 石井謙治氏・松木哲氏・出口晶子氏のご教示による。
- 32) 奈良国立文化財研究所光谷祐実氏の鑑定による。
- 33) 麟長13年に比丘秀雅僧事が記した「狹山池修複記」
狹山町史編纂委員会「狹山町史」第1巻、本文編、1967年
- 34) a : 市川秀之「大阪狭山市内遺跡群発掘調査概要報告書2」「大阪狭山市文化財報告書」6、1992年
b : 同「大阪狭山市内遺跡群発掘調査概要報告書3」「大阪狭山市文化財報告書」9、1993年
植田隆司「大阪狭山市内遺跡群発掘調査概要報告書4」「大阪狭山市文化財報告書」12、1994年
- 35) 1994年~1995年の調査で東橋下層遺構が検出され、その材であるコウヤマキの伐採年代がA.D. 616年であると判明した。よって、東橋下層遺構と北堤第1次堤体とSIN窯との層序関係から、狹山池北堤第1次堤体の構築時期はA.D. 616年からTK217型式期の間に限定されることとなった。



第3図 調査地位置図（●印は窯跡）

第2章 調査の契機と経過

大阪狭山市金剛二丁目9-1に所在する農業用溜池であるひつ池では、東岸の1箇所、西岸の2箇所における須恵器片の散布が從来より知られていた。

『狭山町史』編纂の際に森浩一氏によって、狭山町内における須恵器窯跡の分布調査が行われ、48箇所の窯跡が確認されている¹⁾。この調査で、ひつ池では1箇所に窯の遺存を推定され、「20 ヒツ池西窯 Ⅲ末Ⅳ前半 灰原がよくのこる」と記述されている。「狭山町史」第1巻本文編の16頁に掲載されている「狭山町内所在遺跡分布図」では、第20番の窯跡はひつ池西岸の南端付近にドットされており、第21番「ヒツ池西北の窯」はひつ池の岸ではなく、その北方にのびる同一崖面で須恵器片の散布が確認されたことがわかる。

この分布調査をふまえて実施された、大阪府立狭山高等学校地歴部の遺跡分布調査²⁾では、ひつ池の西岸南端付近と西岸中央北側付近と東岸中央付近の3箇所に須恵器片の散布が確認された。

大阪狭山市教育委員会では『大阪狭山市埋蔵文化財分布図』に、森浩一氏の分布調査と大阪府立狭山高等学校の分布調査の両者の調査成果から、ひつ池の岸に3箇所の散布域をドットしている³⁾。

平成3年に大阪狭山市市民部経済課から、ひつ池護岸改修工事の実施予定がある旨の通知を受けたため、工事予定箇所での須恵器窯の存否、さらにその位置と規模を把握する必要が生じた。よって、平成3年2月14日から同年2月21日の間、ひつ池において事前調査を行なった。調査は、池の冬季吃水線より上位で西岸と東岸の全域にわたって、須恵器片の散布状況の確認から開始した。この結果、東岸中ほどどの池中へ半島状に突出した地点と西岸南端よりの地点とに須恵器片散布の集中箇所を認めるに至った。東岸の半島状突出部における散布域内では窯壁片の散布も確認され、同地点付近に窯跡が遺存する可能性は、きわめて高いものと思われる。

今次の改修工事は、池の西岸のみに限定されたものであるため、東岸の須恵器片散布域（ひつ池東窯：HTE）ではその散布状況を確認するにとどめ、『大阪狭山市埋蔵文化財分布図』にドットされている西岸南端付近の散布域と、同じくドットがある西岸中央北側の箇所において、灰原等の遺存状況を確認するために幅20cm程度の試掘溝を設定した。

この結果、西岸中央北側の箇所では灰土層の堆積は認められず、同地点には窯跡は存在しないと判断した。また、西岸南端付近の散布域では南北約7mの範囲内において、厚さ約10cmの灰土層を確認することができた。さらに、当該箇所西端の崖面では、その最下端の所々が樹木の根と池の水の浸食によって空洞状になっており、その内部で橙色の焼土の露出が観察された。

この事前調査によって、本調査が必要な箇所は池西岸南端寄りの南北約7mの範囲内と

確認できたため、この年は一旦試掘溝を埋め戻し、調査を休止した。

平成3年10月9日付、大狭経第251号にて大阪狭山市長から、文化財保護法第57条の3第1項の規定により「埋蔵文化財発掘の通知について」が提出されたため、同年10月14日付、大狭教社第327号で発掘調査が必要である旨の意見を付して、これを大阪府教育委員会文化財保護課に進達した。これに対して、教委文第1-4072号で「埋蔵文化財の発掘について」の通知が大阪府教育委員会からあった。大阪狭山市教育委員会は第98条の2第1項の規定により、大狭教社第268号で「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を提出した。

発掘調査は池の水位が低下して調査が可能となった平成3年11月18日から開始した。

まず、事前調査の際に設定したトレーニチを再び掘削することより開始し、灰原の南北端を再確認した。次に、満水時の池岸となっている崖面に繁茂している樹木の伐採とその根の削除を、南北約4m・東西約2mの範囲内で行った。

主な樹木の伐採をほぼ完了したのち、トレーニチの南北間は中央で直交する、東西約7mのトレーニチを設定し、掘削を行った。つづいて、南北と東西方向のトレーニチにおける土層断面観察に従い、南北約13m×東西約10mの調査区を設定し、灰原上面まで掘削を行った。灰原は池岸の崖裾でその西端を成し、現状の崖面で窯体断面が表れているものと判断し、灰原上面にて写真撮影と平板測量を行ったのち、灰原の掘削を進めた。しかしその途中で、灰原上面における観察とは異なって、灰原の東端は崖裾の直下からさらに東方へと続いている。このため、崖部分の崩落土を掘削除去し、灰原上面を検出すると同時に、地山面の立ち上がりの検出に努めた。結果、地山斜面上での灰原の収束を確認し、その最東端部を検出することができた。

この後、灰原全域を各層毎に掘削し、必要な記録措置を行った上で埋め戻しを行い、平成4年1月14日に調査を完了した。

なお、今次のひとつ池西窯の発掘調査は、コンクリート護岸擁壁工事によって破壊が及ぶ箇所のみに限定した緊急発掘調査である。擁壁工事による破壊が及ばない、当該地点東側の住宅地内には、中位段丘の斜面に構築された窯体の焼成部・燃焼部が、今なお遺存しているものと推定されるので、今後も当該地点付近における開発行為には注意を要する。

註記

- 1) 森浩一「第1章第3節 土器の生産」『狭山町史』第1巻、本文編、1967年
- 2) 豊田兼典氏の指導のもとに、市内全域にわたって遺物等の散布調査が行われた。
- 3) 大阪狭山市教育委員会『大阪狭山市埋蔵文化財分布図』1992年

第3章 遺構

第1節 調査の概要

ひつ池は、現東除川が中位段丘を開削して形成された支谷を、北側の堤で人工的に堰き止めた溜池である¹⁾。ゆえに、窯が操業していた古墳時代終末期には、当該地点は南北に連続する傾斜面であり、川は谷底にて南から北へ流れていたものと想定される。

ゆえに、この傾斜面を最大限有効に利用した場合、窯の操業に伴って遺棄された灰土は焚口近辺のみならず、谷底付近の斜面裾にまで達している可能性がある。また、斜面の中程に堆積した灰土が崩落などの2次移動によって斜面を滑落し、斜面裾に再堆積している状況も予想される。

この斜面裾部分は、現在では池の泥土によって厚く覆われており、鋼矢板で土留めを施した上でトレンチ調査を実施するか、もしくは、池底全体の泥土をすべてさらえる作業を行わなければ、この箇所における灰土の堆積の有無を確認することは不可能である。

今次の改修工事では、擁壁工事によって影響を受ける範囲は池岸近辺のみに限定されるために、池底における灰土堆積の確認は行わないこととした。

よって、岸部の南北13m・東西10mの範囲内において調査を実施した。崖下の斜面では現在確認しうる灰原の東端とその南北端の検出に努めた。岸部崖面では窯体焚口部の確認に努めたが、調査が必要な範囲内には窯体は構築されておらず、灰原が急斜面で収束し、その西端を成している状況を検出した。

この灰原は、後述のように4層に分層しうるため、各層ごとに遺物を取り上げた。また遺物の出土地点を概ね記録すると同時に、後日の遺物接合作業を円滑に進める目的もあり調査区を4区に分割して発掘を行い、各区ごとに遺物を取り上げた。なお、本調査において、出土した遺物の総量はコンテナバットにして約30箱分である。

また、灰原各層は比較的に薄いものであるため、その上層にあたる褐色系砂質土を除去し、灰原の各層の上面が段状に露出した状態で平板測量を行い、コンターラインと灰原の範囲を記録した。灰原掘削完了後にも、灰原堆積前の地形および土地利用状況を確認するために、地山面において平板測量でコンターラインと遺構を記録した。

第2節 灰原の広がりと層序

本窯の灰原は、4層の灰土層より形成される（第4図・第5図）。

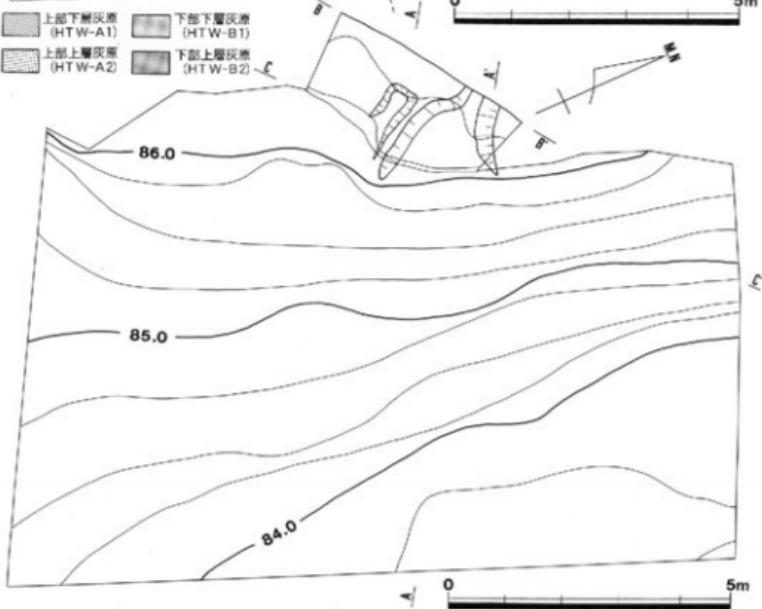
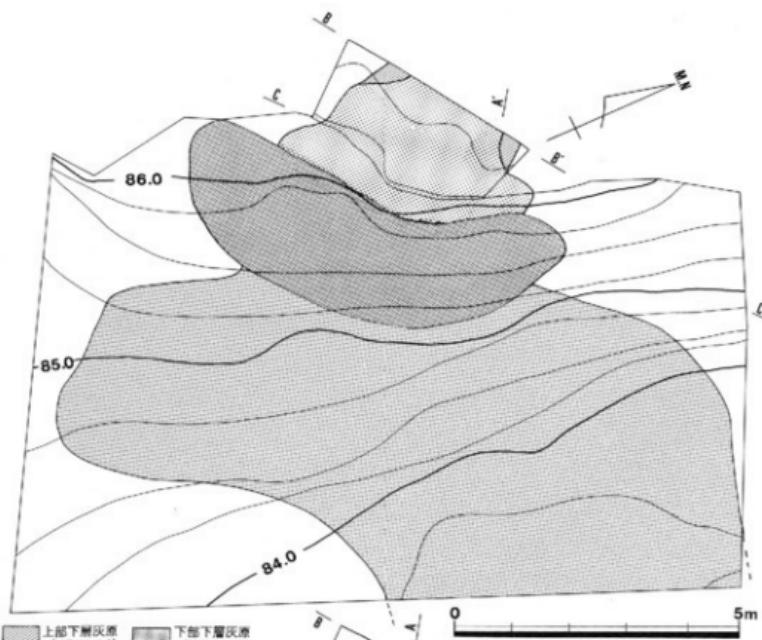
明橙色焼土層を内包する黒色灰土層の上部下層灰原〔HTW-A1〕（以後A1と略記）は、標高86.0mにある地山面の傾斜変換点より上方の急斜面に堆積している（第4図・第5図）。A1は最大で約40cmの厚みを有し、コンターラインに平行する方向で3.2m、これに直交する方向で1.1m以上の範囲内に堆積が確認された。この灰土層中には、杯蓋・杯身・平瓶・短頸壺・長頸壺・甕等が包含されており、残存状態の良好な須恵器が多いようである。

橙色焼土を含む灰褐色灰土層の上部上層灰原〔HTW-A2〕（以後A2と略記）は、標高85.75mより上方で、A1の直上を被覆している。A2は最大で約55cmの厚みを有し、コンターラインに平行する方向で4.5m、これに直交する方向で2.3m以上の範囲内に堆積していた。A2の灰土中からは、杯蓋・杯身・長頸壺・甕・甕が出土しており、それら個々体の残存状態は良好である。しかしながら、灰土中に包含される須恵器の数量はA1のそれに比して少ないようである。

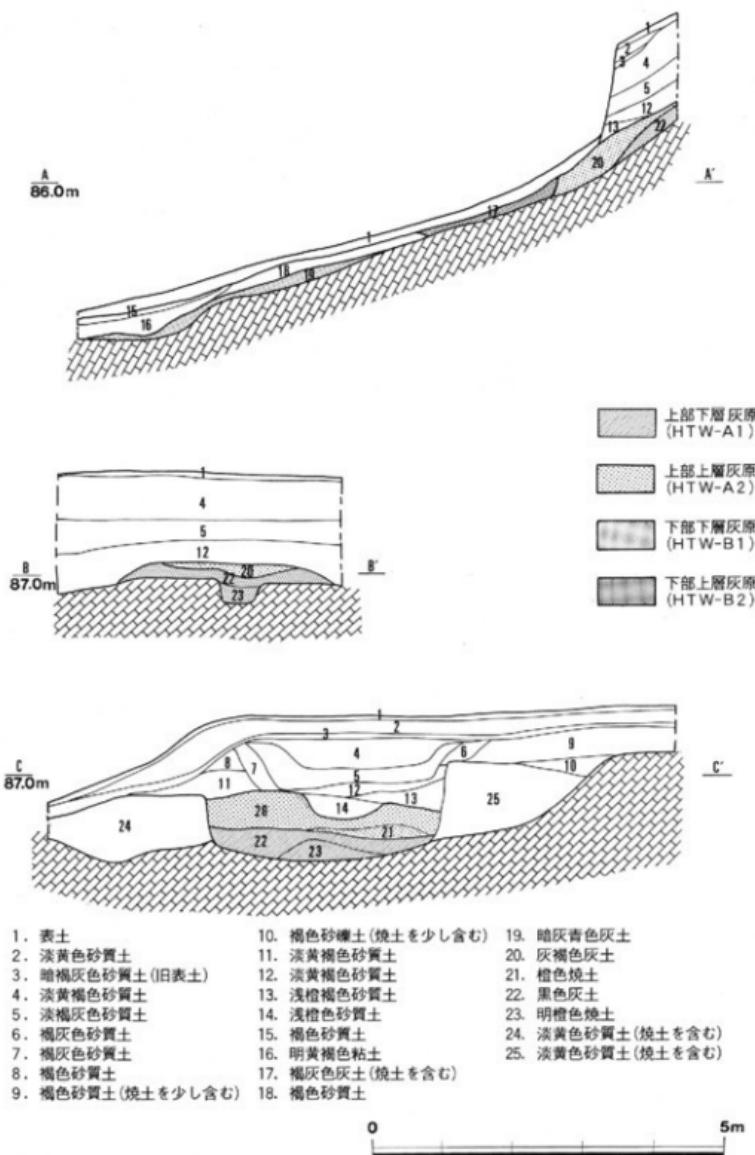
ところで、A1とA2の一部はその下面を地山面に接している。この箇所の地山面には長さ2.2m以上・幅約0.8m～1.9m・深さ約30cmの斜面に直交する溝1が掘られていた（第4図下段）。溝1は斜面上方では調査区外へと伸び、斜面下方では大きく開いて標高86.0m付近で終わる。この溝の埋土は、斜面上方ではA1で、斜面下方ではA2であった（第5図中段）。溝1の南側ではこれに並行して、溝2が検出された。溝2は長さ1.4m・幅約0.6m・深さ約20cmを測り、斜面上方では標高86.75m付近で完結し、斜面下方では標高86.25m～86.50m付近で上端と下端の落差がなくなり終わっていた。溝2の埋土も溝1と同様にA1とA2であった。

この2条の溝の用途は不明であるが、雨水等の流水によって浸食を受け、形成されたものではなく、明らかに人工的に掘削された遺構である。加えて、その底部から上端に至るまで、A1・A2の灰土が埋土となっていたため、これらの溝が掘削され、一定期間何らかの役割を果したのちにその機能が喪失され、その後に、窯体から搔き出された灰土によって埋められたと想定される。もしくは、窯体から灰土を搔出し、傾斜面に遺棄する際に灰土が斜面に滞留せず、斜面下まで容易に滑落させる機能を有していたのであろうか。

さて、A2の上面では、その面での標高86.25m付近より西側で、橙色系砂質土・黄褐色系砂質土・褐色系砂質土等が上層にみられ、約1.3mの厚みを有している。これらの土層の東端が崖面となって、当該箇所における現在のひつ池西岸部をなしている。A1・A2直下の地山面は、調査区外西側でさらに立ち上がっていると考えられ、灰原の上層に堆積するこれらの土層中には焼土が多く含まれていることから、橙色系砂質土・黄褐色系砂質土・褐色系砂質土は、窯体が崩壊した際に崩落した土、もしくは後世の改変に伴う流入



第4図 ひつ池西窪〔HTW〕灰原平面図
(上段:灰原堆積状況、下段:灰原堆積前)



第5図 ひつ池西窓〔HTW〕灰原土層断面図

土か盛土と推定される。

この付近の土層堆積状況は、第5図下段のC-C'軸の土層断面によく表れている。この土層図における24・25番の淡黄褐色砂質土は、A1・A2の灰原の下層にあり、灰原堆積に先行するものであると理解される。この土層には焼土が多量に包含されており、A1・A2の灰原が堆積する前段階において、操業中の窯体崩壊や操業開始期における窯体改修があったのではないかと想定される。

暗灰青色灰土よりなる下部下層灰原〔HTW-B1〕(以後B1と略記)は標高85.50m付近より下方の斜面に堆積している。B1は最大で約20cmの厚みしかなく、地山面における標高84.0m付近の傾斜変換点近辺である程度の厚みを有するほかは、比較的薄く地面上に被覆する。その規模は斜面に平行する方向で11.8m、これに直交する方向で5.8m以上を測り、調査区外東側では5.0cm以下の厚みで斜面下へとさらに続く。B1の灰土中には、杯蓋・杯身・短頸壺・甕等が包含されているが、その残存状態はA1・A2のそれに比して良好とはいえず、細片となって出土したものが多い感がある。

B1の上層には褐色砂質土層・明黄褐色粘土層があり、その上面を被覆している。標高85.25m付近では、B1の上面を覆う褐色砂質土を間層として、その上層に下部上層灰原〔HTW-B2〕(以後B2と略記)が堆積している。B2は焼土を含む褐灰色灰土層であり、その厚みは最も厚く堆積した箇所においても30cmに満たない。標高85.75m～86.0m付近では、B2はA2の上面を被覆しており、本窯の灰原中で最も上層に位置する。その散布域は南北方向に長く、斜面にはほぼ平行する方向で6.9mを、これに直交する方向で最大2.2mを測る。B2の灰土中からは、杯蓋・杯身・高杯・甕が出土している。他の灰原に比して、遺物検出数は少ない。

ひつ池西窯の灰原は、このように4層の灰原より形成されていた。複数回の焼成が本窯で行われた場合の廃棄過程において、前回の焼成に伴う灰原のある程度の部分をさらに遠方へ運搬し、その箇所に今次焼成に伴って生じた廃棄物を撒き出すといった片付け行為が行われていないと仮定するならば、上部下層灰原〔HTW-A1〕→上部上層灰原〔HTW-A2〕・下部下層灰原〔HTW-B1〕→下部上層灰原〔HTW-B2〕という順に廃棄が行われ、堆積したと考える。しかしながら、上部灰原に較べて下部灰原の須恵器には細片となって検出されたものが多いことや、下部上層灰原の灰土に砂質土が混入してその色調が褐灰色となっていることなどから、下部灰原が2次移動によって形成された可能性も残っている。

註記

- 1) ひつ池築造の時期は現在のところ明らかでないが、水下にあたる池尻新池付近の灌漑工事の実施された年代等から、中世～近世前半までのいずれかの時期に築造されたと類推される。

第4章 遺物

第1節 上部上層灰原出土遺物 [HTW-A 2]

上部上層灰原 [HTW-A 2] から検出された遺物では、須恵器の杯H¹⁾の杯蓋 6 点・杯身 6 点、蓋身逆転後の杯G²⁾の杯蓋 8 点・杯身 2 点、長頸壺 1 点、甌 1 点、甕 1 点の計 25 点を図化した (第 6 図・第 11 図、図版 7、第 1 表)。

杯Hの杯身は、その口径の計測値が 9.4~9.9cm であり、6 点とも近似した値を示している。器高は、10 のみが 2.2cm と低いほかは、いずれも 3cm 前後の値である。よって、A 2 の杯Hはいずれも同程度の法量を有しているといえよう。

杯Hの杯蓋は、口径が 10.1cm~10.8cm を、器高が 3.1cm~4.6cm を測り、その口径は杯身に対応してバラツキのない数値を示している。

杯Gの杯身は、23 が口径 9.2cm・器高 3.6cm、24 が口径 8.0cm・器高 3.2cm を測る。

杯Gの杯蓋は、その口径の計測値が 9.8cm~11.9cm であり、やや大小がある。その頂部に付されるつまみは 17 がやや扁平な形態をとるが、その他は宝珠形の形態を保っている。

14 の甌は、底体部外面の調整にヘラ削りを用いず、不整方向のナデ調整で代用しており、その調整は底部中央に未調整部分を残す不完全なものである。調整の簡略化が著しい。

第2節 上部下層灰原出土遺物 [HTW-A 1]

上部下層灰原 [HTW-A 1] で出土した遺物のうち、須恵器の杯Hの杯蓋 30 点・杯身 35 点、杯Gの杯蓋 14 点・杯身 15 点、平瓶 4 点、壺蓋 1 点、短頸壺 1 点、長頸壺 3 点、壺 1 点、甕 6 点を図化することができた (第 6 図・第 7 図・第 8 図・第 9 図・第 11 図、図版 8・図版 9・図版 10・図版 11、第 2 表)。

杯Hの杯身は、その口径が 7.3cm~11.1cm を、器高が 2.0cm~3.7cm を測り、その法量にはやや大小がある。

杯Hの杯蓋は、口径が 8.7cm~11.2cm を、器高が 2.7cm~4.9cm を計測する。明らかに口径の数値は杯身のそれにはほぼ対応した幅を有している。

杯Gの杯身は、口径が 8.9cm~10.9cm を、器高が 3.1cm~4.6cm を測る。10.9cm の口径を有する 115 と、口径が 9.9cm に達しない。122 を除外すれば、他の杯身の口径はいずれも 10.0cm 前後である。

杯Gの杯蓋は、その口径の計測値が 9.9cm~11.8cm であり、ほぼ杯身の口径に適合したものである。頂部に付されているつまみは 105 のそれがやや扁平な感を受けるが、その他は宝珠形の形態を保っている。

平瓶は**26**が口頸部と体部上面を遺し、**27**が全体の2/3を残存する。**25・28**は口頸部のみ図化できた。**26**は比較的平らかな体部上面の中央軸上に、偏円形の粘土粒を1個のみ貼付する。**27**は、体部上面を含めて全体に丸みを帯びた形態で、体部上面には粘土粒等は付さない。

長頸壺**95**は口頸部のみの残存である。口頸部がラッパ状に外反してその器壁は薄いため底部に短い脚部が接合されるタイプの長頸壺であろう。

壺**174・175**には、頸部に沈線がめぐっているが、この沈線はいずれも鈍いものである。また、**175**の頸部には、沈線をめぐらす前に波状文を施しているが、この波状文はやや変調気味であり、粗雑な感を受ける。壺**176**は主要部を復元しない小片であるが、肩部外面に付された把手を遺していたので、あえて図化した。この把手は、肩部の4方向もしくは2方向に取付けられたものの一つであろう。

第3節 下部上層灰原出土遺物 [HTW-B 2]

下部上層灰原 [HTW-B 2] で出土した遺物中では、須恵器の杯Hの杯蓋4点・杯身7点、杯Gの杯蓋2点・杯身1点、高杯1点、壺2点を図化した(第10図・第12図、図版12、第3表)。

杯Hの杯身は、その口径が8.7~9.6cmを、器高が2.5cm~3.2cmを測り、個体数が少ないこともあって、その法量は比較的まとまった数値を示している。

杯Hの杯蓋は、口径が9.7cm~11.0cmを測り、器高はいずれも3.0cm前後である。

杯Gの杯身**142**は、口径9.1cm・器高3.6cmを測る。この数値はA 1・A 2の杯Gのそれと差異を有するものではない。

杯Gの杯蓋**140**は口径10.0cmを、**141**は口径10.8cmを測る。その頂部に付されたつまみの形状も宝珠形が崩れておらず、形態および法量においてA 1・A 2の杯G蓋と差異を有する点は認められない。

高杯**143**は長脚2段の無蓋高杯である。脚部上下段にスカシはなく、中位にめぐる2条の沈線は非常に鈍い。

壺**178**は、その頸部上方に2条の鈍い沈線をめぐらし、その上下に波状文を施すがそれはとくに乱調なものであり、粗雑である。

第4節 下部下層灰原出土遺物 [HTW-B1]

下部下層灰原 [HTW-B1] から検出した遺物では、須恵器の杯Hの杯蓋9点・杯身9点、杯Gの杯蓋5点・杯身2点、短頸壺1点、甕3点を図化できた（第10図・第12図、図版12、第4表）。

杯Hの杯身は、その口径が9.0cm～10.1cmを、器高が2.6cm～3.3cmを測り、A2・B2と相似した値にまとまっている。

杯Hの杯蓋は、口径が9.8cm～11.3cmを測り、器高はいずれも3.0cm前後である。

杯Gの杯身167は口径9.7cm・器高3.7cmを計測し、168は口径9.3cm・器高3.7cmを測る。この2点の杯GはA1・A2・B2のそれと同様の法量を有しているといえよう。

杯Gの杯蓋は、口径が10.4cm～11.2cmを測り、162・163のつまみは宝珠形を呈し、164のつまみはやや扁平な形状である。

甕は3点とも同じような形態の口頸部をもつ。頸部外面にめぐる沈線はいずれも鈍く、181の沈線は乱れており、179の沈線などは全周しないものを含む。

第5節 試掘溝内出土遺物

事前の範囲確認調査と本調査において、試掘溝内から出土した遺物のうち、その層序の帰属が明らかでないものを一括してここに掲載した。図化したのは、杯Hの杯蓋6点・杯身11点、杯Gの杯蓋7点・杯身1点、甕1点である（第13図、図版13、第5表）。

杯Hの杯身は、その口径が8.7cm～10.5cmを、器高が2.1cm～3.3cmを測る。

杯Hの杯蓋は、口径9.3cm～10.6cm・器高2.6cm～3.3cmを計測する。

杯Gの杯身205は口径9.6cm・残存高3.7cmを測る。

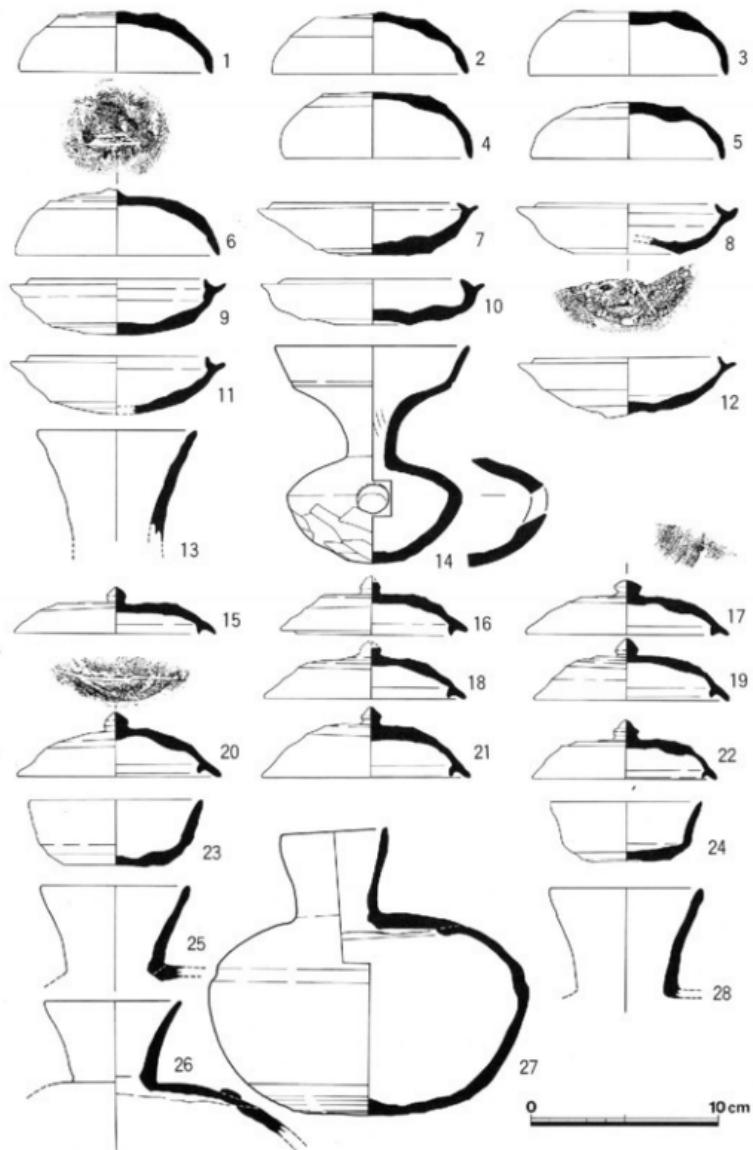
杯Gの杯蓋は、口径が10.0cm～11.3cmを測る。199・200・202はつまみを遺存し、その形状はいずれも宝珠形である。

甕207は口頸部のみの残存で、頸部外面中位上方にめぐる2条の沈線は鈍い。

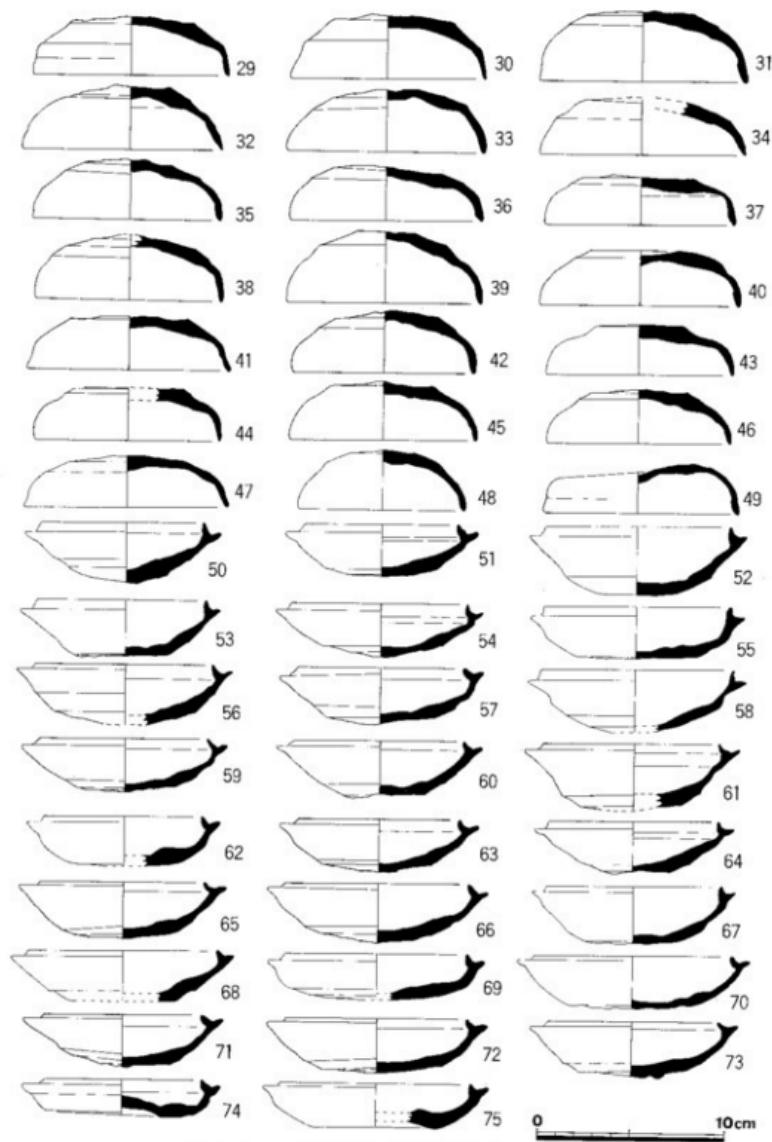
註記

1) 西弘海「七世紀の土器の時期区分と型式変化」『土器様式の成立とその背景』1986年

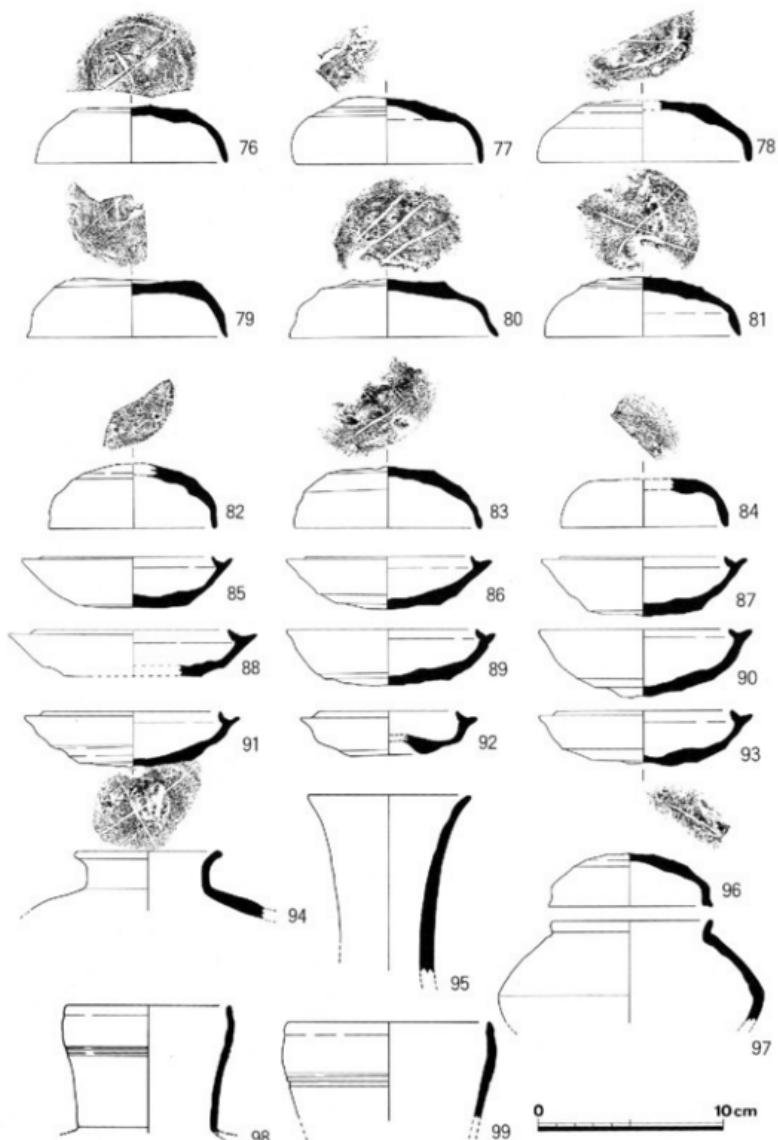
2) 前出註1文獻



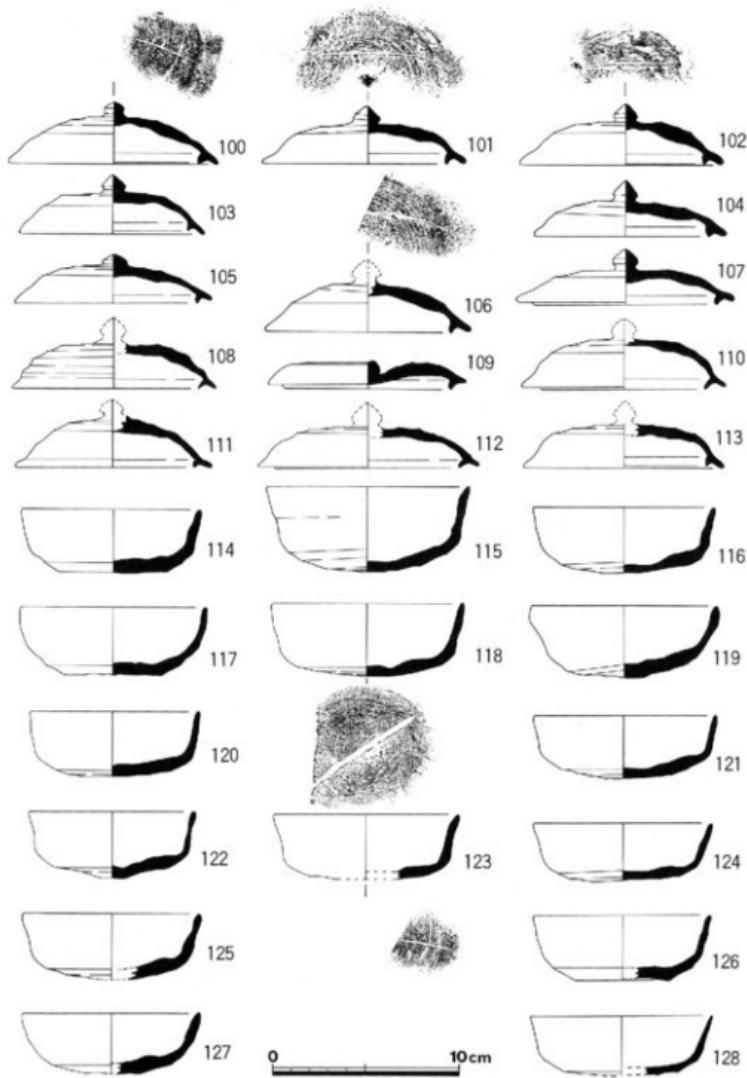
第6図 ひつ池西窯灰原出土遺物(1)
(1~24:上部上層灰原[HTW-A2] 25~28:上部下層灰原[HTW-A1])



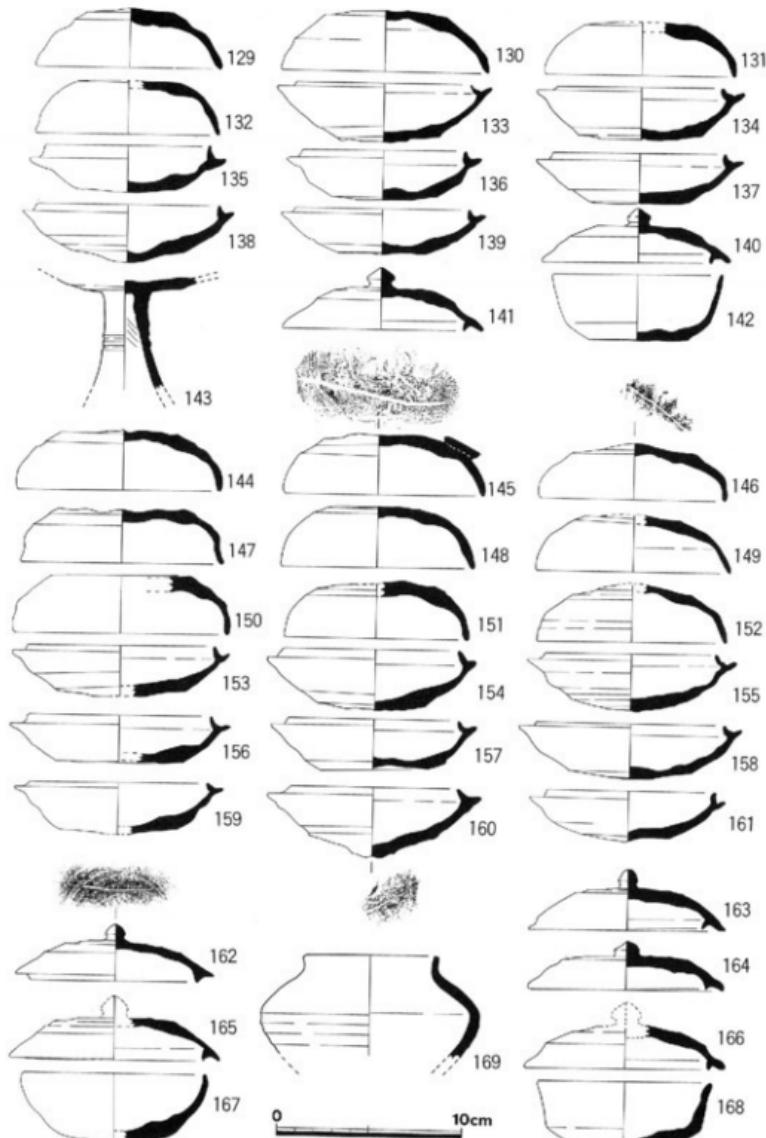
第7図 ひつ池西窯灰原出土遺物(2)
(29~75: 上部下層灰原[HTW-A1])



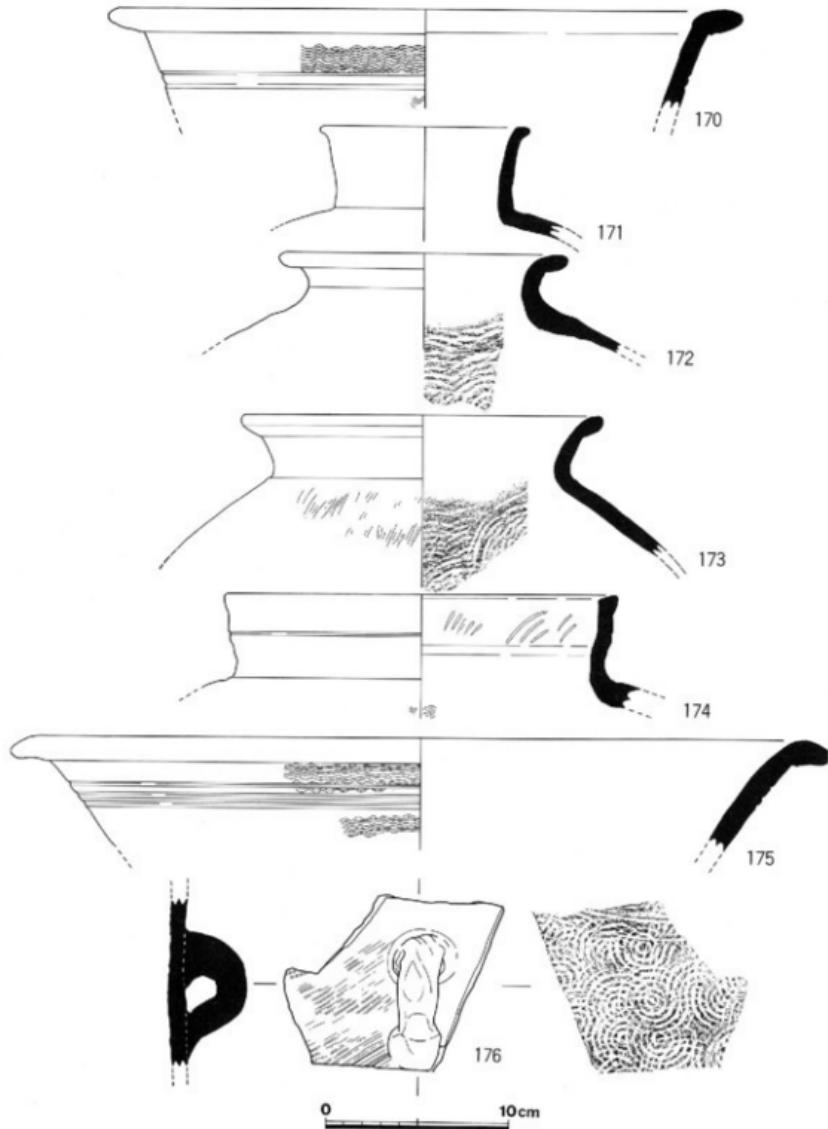
第8図 ひつ池西窯灰原出土遺物(3)
(76~99:上部下層灰原[HTW-A1])



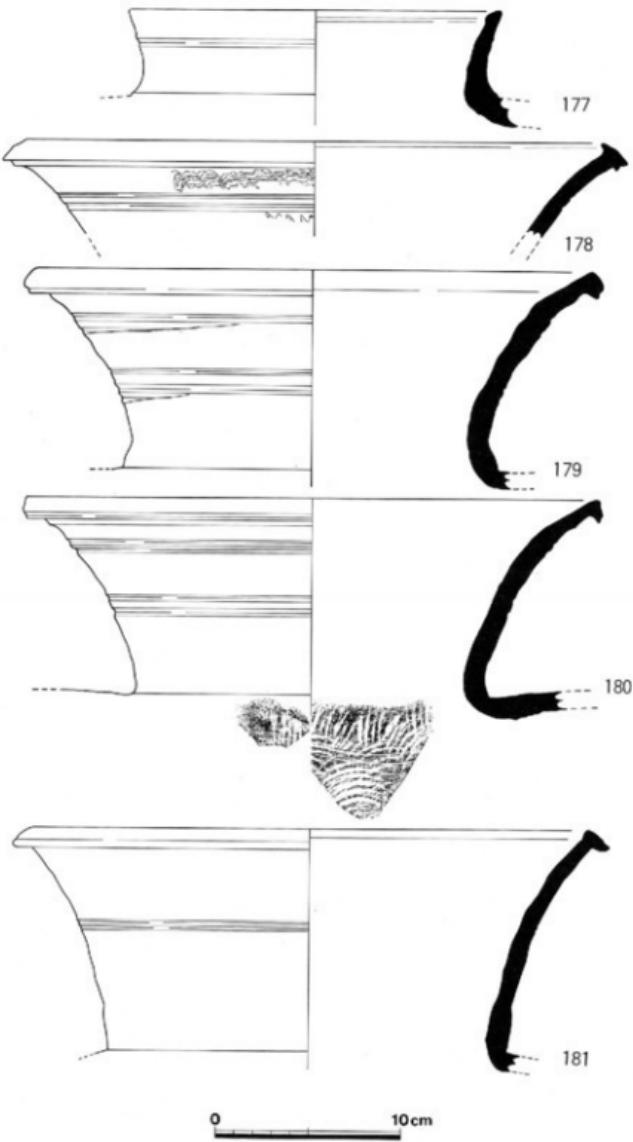
第9図 ひつ池西窯灰原出土遺物(4)
(100~128:上部下層灰原[HTW-A1])



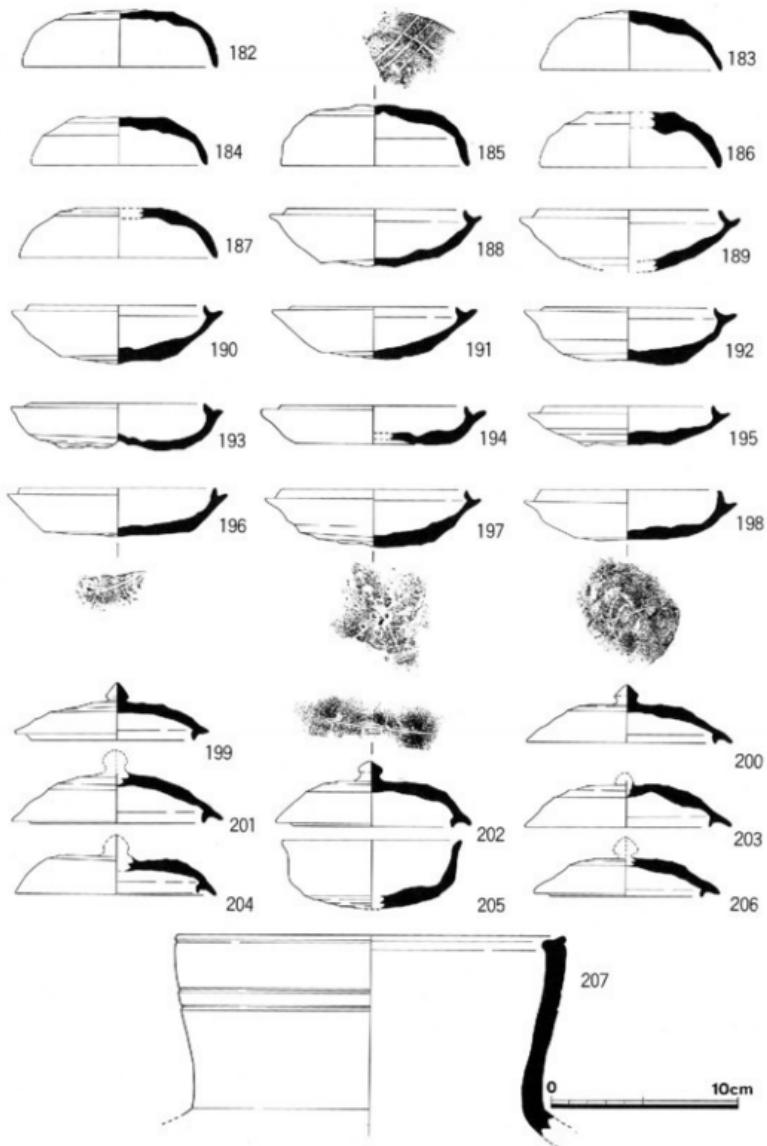
第10図 ひつ池西窯灰原出土遺物(5)
(129~143:下部上層灰原[HTW-B2]、144~169:下部下層灰原[HTW-B1])



第11図 ひつ池西窯灰原出土遺物(6)
(170:上部上層灰原[HTW-A2]、171~176:上部下層灰原[HTW-A1])



第12図 ひつ池西窯灰原出土遺物(7)
(177~178:下部上層灰原[HTW-B2]、179~181:下部下層灰原[HTW-B1])



第13図 ひつ池西窯灰原出土遺物(8)
(182~207: 試掘溝出土)

第1表 ひつ池西窯上部上層灰原出土遺物観察表 (HTW-A 2)

器種	図面 版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 蓋	6-1 7-1	口径 器高 10.2 3.3	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。 端部は丸くおさめる。 天井部はやや低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/3、回転ヘラ削り調整。天井部外面1/3(頂部)、未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左方向。色調:内一灰褐色、外一暗灰色、胎土:密。1~2mmの長石・石英を含む。焼成:良好。残存:7/8。天井部外面に自然釉・土器片付着。
	6-2 上	口径 器高 10.4 3.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部はやや高く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面3/5、回転ヘラ削り調整。天井部外面1/5(頂部)、未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左方向 色調:内一淡灰色、外一暗灰褐色。 胎土:密。2mm以下の長石を若干含む。 焼成:良好。 残存:1/3。一部反転復元。
同 上	6-3 6-4 7-2	口径 器高 10.4 3.5	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。 端部は丸くおさめる。 天井部はやや高く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/5、回転ヘラ削り調整。天井部外面3/5(頂部)、未調整。 他は同軸ナデ調整。	ロクロ回転:左方向。 色調:内一淡灰色、外一暗灰褐色。 胎土:密。2mm以下の長石を若干含む。 チャートを若干含む。 焼成:良好。残存:1/3。一部反転復元。
	7-2	口径 器高 10.1 3.5	体部は下外方に下り口縁部はほぼ垂直に下る。 端部は丸くおさめる。 天井部はやや低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/5、回転ヘラ削り調整。天井部外面2/5(頂部)、未調整。 他は同軸ナデ調整。	ロクロ回転:左方向。 色調:灰褐色。 胎土:密。1~3mmの長石を若干含む。 チャートを含む。 焼成:良好。残存:7/8。
同 上	6-5	口径 器高 10.2 3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部はやや低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面3/5、回転ヘラ削り調整。天井部外面1/5(頂部)、未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右方向。 色調:内一灰褐色、外一暗灰色。 胎土:密。 焼成:良好。 残存:1/4。反転復元。
	6-6 7-3	口径 器高 10.8 4.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部はやや丸くおさめる。 天井部はやや高くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面2/5、回転ヘラ削り調整。天井部外面1/2(頂部)、未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右方向。 色調:内一灰褐色、外一暗灰色。 胎土:密。1~4mmの長石を多く含む。 焼成:良好。 残存:「」。 天井部外面に「」がある。内面・口縁部外面一部灰かぶり。
杯 身	6-7 6-8	口径 受部径 器高 2.8 0.3 たちあがり角 度 65° 30'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部はやや上外方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/5、回転ヘラ削り調整。底部外面3/5(底部中央)、未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左方向。 色調:内一灰褐色、外一暗灰色。 胎土:密。1~2mmの長石をわずかに含む。 焼成:良好。 残存:3/4。 底体部外面に土器片付着。
	7-4	口径 受部径 器高 2.7 0.4 たちあがり角 度 60° 00'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸くおさめる。 受部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/5、回転ヘラ削り調整。底部外面2/3(底部中央)、未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右方向。 色調:灰青色。 胎土:密。 焼成:良好、堅壁。 残存:1/2。一部反転復元。 ハラ記号:底部外面にあり。
同 上	6-9	口径 受部径 器高 3.0 0.4 たちあがり角 度 41° 15'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸くおさめる。 受部はやや上外方にのび、端部はやや丸い。 底体部はやや浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/6、回転ヘラ削り調整。底部外面2/3(底部中央)、未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左方向。 色調:内一淡灰褐色、外一灰褐色。 胎土:密。1~2mmの長石をわずかに含む。 焼成:良好。 残存:1/3。一部反転復元。 外側の一部に自然釉付着。

*たちあがり角度は、たちあがり基部外面を中心に鉛直方向を0°としてたちあがり基部外面と口縁端部を結んだ直線までの角度を計測したもの。

*かえり角度は、かえり基部外面を中心に鉛直方向を0°としてかえり基部外面とかえり端部を結んだ直線までの角度を計測したもの。

部種	回数	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 身	6-10	口径 9.5 受部径 12.1 器高 2.2 たちあがり高さ 0.3 たちあがり角度 63° 15'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部はやや上外方にのび端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/2、回転ヘラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)、未調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転:右方向。 色調:内一明灰黄色、外一暗灰青色。 胎土:密。3mm以下の長石を若干含む。 焼成:良好。 残存:1/2。反転復元。
	6-11	口径 9.5 受部径 11.6 器高 3.1 たちあがり高さ 0.4 たちあがり角度 47° 45'	たちあがりは内傾したのち端部で上方にのびる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部はやや浅く、底部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/4、回転ヘラ削り調整。底部外面5/8(底部中央)、未調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転:左方向。色調:内一淡灰色、外一明灰黄色。胎土:密。1mmの長石を若干含む。チャートを含む。 焼成:良好。残存:6/7。底体部外面に自然釉付着。底体部外面灰かぶり。底部外面黒壁付着。受部上面に朴葉口縁部分接着。
	7-4				
	7-5				
同 上	6-12	口径 9.7 受部径 11.6 器高 3.3 たちあがり高さ 0.4 たちあがり角度 35° 30'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部はやや浅く、底部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面3/10、回転ヘラ削り調整。底部外面3/5(底部中央)、未調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転:左方向。 色調:灰色。 胎土:密。チャートを若干含む。 焼成:良好。 残存:2/3。一部反転復元。 底体部外面灰かぶり。底体部外面に黒壁部分接着。
	7-5				
	7-6				
	7-7				
瓶 頭 壺	6-13	口径 8.4 残存高 6.0	口縁部はやや外反しながら上外方にのびる。 口縁端部は丸くおさめる。 頭部一部・肩部・体部・底部以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	色調:灰色。 胎土:密。2mm以下の長石を若干含む。 焼成:良好。 残存:口縁部の1/2未満。 反転復元。
	7-8				
越	6-14	口径 10.4 基部径 2.3 体部最大径 9.5 器高 11.8	頭部はやや外彎しながら上外方にのびたのち、上方約1/3で強く外反して外上方向に開く。 口縁部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面5/7、体部1/3、不整方向のナダ調整。底部外面2/7(底部中央)、未調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転:右方向。 色調:内一暗灰色、外一暗灰青色。 胎土:やや密。2mm以下の長石を含む。チャートを多く含む。 焼成:良好。 残存:3/4。一部反転復元。肩部、体部上半に自然釉付着。頭部内面、肩部一部灰かぶり。
	7-6				
	7-7				
	7-8				
杯 蓋	6-15	口径 10.8 器高 2.5 つまみ径 1.0 つまみ高 0.9 かえり高 0.3 かえり角度 34° 45'	口縁端部はやや親く、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部はやや丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下に突出せず、口縁端部とかえり端部の双方で接地する。 天井部は低く平ら。 天井部外面中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転:左方向。 色調:灰色。 胎土:密。チャートを若干含む。 焼成:良好。 残存:1/4。一部反転復元。 天井部外面一部灰かぶり。
	7-9				
	7-10				
	7-11				
同 上	6-16	口径 10.1 残存高 2.8 つまみ径 1.0 つまみ高 0.6 かえり高 0.3 かえり角度 24° 15'	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部はやや丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下に突出し、かえり端部で接地する。 天井部はやや低く平ら。天井部外面中央に擬宝珠様つまみを付す。 つまみ頂部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面5/9、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転:左方向。 色調:灰褐色。 胎土:密。1~2mmの長石をわずかに含む。チャートを多く含む。 焼成:良好。 残存:1/2。一部反転復元。
	7-12				
	7-13				
	7-14				
同 上	6-17	口径 10.8 器高 3.0 つまみ径 1.4 つまみ高 0.9 かえり高 0.2 かえり角度 65° 15'	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部は丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下に突出せず、口縁端部で接地する。 天井部はやや低くやや丸い。天井部外面中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面3/5、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転:右方向。 色調:淡灰青色。 胎土:密。2mm以下の長石を若干含む。 焼成:良好。 残存:1/2。 ハラ記号:天井部外面に「=」あり。
	7-15				
	7-16				
	7-17				

器種	図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 蓋	6-18 同 上	口径 11.9 残存高 2.8 つまみ径 1.1 つまみ高 — かえり高 0.1 かえり角度 62° 30' つまみ上半欠損。	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部は丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下に突出せず、口縁端部で接地する。 天井部はやや低くや丸い。 天井部外側中央にやや扁平な擬宝珠様つまみを付す。 つまみ上半欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側1/2、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰褐色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：1/2。一部反転復元。
同 上	6-19 7-7	口径 10.4 器高 3.4 つまみ径 1.1 つまみ高 0.9 かえり高 0.2 かえり角度 56° 30' 天井部外側中央に擬宝珠様つまみを付す。	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部はやや鋸歯状である。 かえりは口縁端部以下に突出せず、口縁端部で接地する。 天井部はやや低くや丸い。 天井部外側中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側2/5、回転ヘラ削り調整。 天井部内面中央、静止ナデ調整他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一淡灰青色、外一暗灰色。 胎土：密。1mmの長石をわずかに含む。 チャートをわずかに含む。 焼成：良好、堅強。 残存：7/8。天井部外側一部自然剥落。 天井部外側灰かぶり。
同 上	6-20 同 上	口径 11.0 器高 3.5 つまみ径 1.3 つまみ高 1.0 かえり高 0.2 かえり角度 57° 00' 天井部外側中央に擬宝珠様つまみを付す。	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部はやや丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下に突出せず、口縁端部で接地する。 天井部はやや低く丸い。 天井部外側中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側1/2、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：内一暗灰色、外一淡灰青色。 胎土：密。5mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：1/2。一部反転復元。 ヘラ記号：天井部外側に「—」がある。
同 上	6-21 同 上	口径 11.2 器高 3.8 つまみ径 1.1 つまみ高 1.0 かえり高 0.2 かえり角度 38° 45' 天井部外側中央に擬宝珠様つまみを付す。	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部は丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下に突出せず、口縁端部で接地する。 天井部はやや低く丸い。 天井部外側中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側2/5、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰褐色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好、堅強。 残存：2/3。一部反転復元。
同 上	6-22 同 上	口径 9.8 器高 3.2 つまみ径 1.3 つまみ高 1.1 かえり高 0.1 かえり角度 57° 00' 天井部外側中央に擬宝珠様つまみを付す。	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部は鋸歯状である。 かえりは口縁端部以下に突出せず、口縁端部で接地する。 天井部はやや低く平らに近い。 天井部外側中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側3/8、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：灰褐色。 胎土：密。チャートを含む。 焼成：良好。 残存：1/4。一部反転復元。 天井部外側灰かぶり。
杯 身	6-23 7-8	口径 9.2 器高 3.6 底体部は深く、底部は平ら。	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は深く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側1/5、回転ヘラ削り調整。 底部外側4/5(底部中央)、ヘラ切り未調整。 他の回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：灰色。 胎土：密。1mmの長石をわずかに含む。 チャートを若干含む。 焼成：良好。残存：3/4。 ヘラ記号：底部外側に「√」あり。
同 上	6-24	口径 8.0 器高 3.2 底体部は深く、底部は平ら。	体部・口縁部は外反しながら上外方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は深く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側3/8、回転ヘラ削り調整。 底部外側1/2(底部中央)、ヘラ切り未調整。 他の回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：内一灰褐色、外一暗灰色。 胎土：密。1~2mmの長石をわずかに含む。 焼成：良好。残存：1/4。反転復元。 内面灰かぶり。
甕	11-170	口径 35.0 残存高 4.8	口縁部は上外方にのび、口縁部は口縁部下で段を成して外方へのび、端部は丸くおさめ心。 口縁部直下に1条11本の波状文を1条、頭部中位に波状文を1条を有す。この施文ののちに、頭部中位上方に2条の沈線をめぐらす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：内一灰褐色、外一頭部は暗灰色、口縁部は灰褐色。 胎土：密。1mmの長石をわずかに含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：口縁部1/4。反転復元。

第2表

ひつ池西窯上部下層灰原出土遺物観察表 (HTW-A1)

器種	図版 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考	
平 瓶	6-25	口径 基部径 残存高	7.9 5.3 5.1	口頸部はやや外側しながら上方にのび、口縁端部は丸くおさめる。 体部・底部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。色調：灰色。 胎土：粗。2mmの長石をやや多く含む。焼成：良好。残存：口頸部はほぼ完形。内外面一部自然剥離着。内面灰かぶり。
同 上	6-26 8-9	口径 基部径 残存高	7.3 4.6 7.5	口頭部は外反しながら上方に開き、口縁端部は丸くおさめる。 体部上面は基部よりなだらかに下方へ張り出し、同外観のほぼ中央に偏円形の粘土粒を1個付す。体部一部・底部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：淡灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：2/5。
同 上	6-27 8-10	口径 基部径 器高	5.5 5.6 15.5	口頭部は外反しながら上方にのびたのち、やや内傾して上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。 体部上面は丸みをもって下方へ張り出し、底部は下内方に下る。底部はやや丸い。 脚部に非常に鈍い凹頭をめぐらす。 体部上面外観の中央より右側に粘土粒を付していったような痕跡が認められる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外観、回転ヘラ削り調整。 底部は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：内一灰赤、外一口頭部と底部は灰色。体部は暗灰色。胎土：やや密。2mm以下の長石をやや多く含む。チャートを多く含む。焼成：良好。 残存：2/3。一部反転復元。体部外観一部・底部外観一部自然剥離着。口頭部外観・体部上面一部・底部外観灰かぶり。別部外観掌状片付着。
同 上	6-28	口径 基部径 残存高	7.8 5.8 5.9	口頭部はやや外反しながら上方にのび、口縁端部は丸くおさめる。 体部・底部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：淡灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。チャートをやや多く含む。焼成：不良、軟質。 残存：口頭部はほぼ完形。
杯 蓋	7-29	口径 器高	10.6 3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部は低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 大井部外面2/5、回転ヘラ削り調整。天井部外面3/5(頂部)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。色調：内一灰赤色、外一暗灰色。胎土：密。1~2mmの長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/3。一部反転復元。天井部外面土器片付着。
同 上	7-30	口径 器高	10.4 3.4	体部・口縁部は下外方に下り、端部はやや丸くおさめる。 天井部はやや高くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 大井部外面2/5、回転ヘラ削り調整。大井部外面3/5(頂部)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一浅灰色、外一暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。チャートを多く含む。焼成：良好。 残存：1/3。一部反転復元。大井部外面に空器片付着。
同 上	7-31 9-11	口径 器高	10.4 3.5	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部は高く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/4、回転ヘラ削り調整。天井部外面1/2(頂部)、未調整。 他は四転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。チャートを若干含む。焼成：良好。 残存：3/4。一部反転復元。
同 上	7-32	口径 器高	10.8 3.4	体部・口縁部は下外方に下り、端部はやや丸くおさめる。 天井部はやや低く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/7、回転ヘラ削り調整。天井部外面4/7(頂部)、未調整。 他は四転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一浅灰色、外一灰色。胎土：密。1~2mmの長石を若干含む。1mmの石英を若干含む。焼成：良好。 残存：2/3。一部反転復元。
同 上	7-33	口径 器高	10.4 3.4	体部は下外方に下り口縁部はやや下方に下る。 端部は丸くおさめる。 天井部はやや高くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面2/9、回転ヘラ削り調整。大井部外面5/9(頂部)、未調整。 他は四転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：淡灰青色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：1/3。一部反転復元。
同 上	7-34	口径 器高	10.9 3.0	体部・口縁部は下外方に下り端部はやや鋭い。 端部は丸くおさめる。 天井部は低くやや丸い。	天井部外面2/7、回転ヘラ削り調整。大井部外面4/7(頂部)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一浅灰色、外一灰色。胎土：密。1~2mmの長石を若干含む。1mmの石英を若干含む。焼成：良好。 残存：1/3。一部反転復元。外面一部擦痕片付着。内外面灰かぶり。

器種	表面 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 蓋	7-35 9-12	口径 器高 10.2 3.3	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。 端部は丸くおさめる。 天井部は低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/4、回転ヘラ削り調整。天井部外面1/2(頂部)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一淡灰色、外一暗灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。1mmの石英を若干含む。チャートを含む。 焼成：良好。残存：1/8。合成復元。 外面一部に自然釉付着。
同 上	7-36	口径 器高 10.3 3.0	体部・口縁部はやや下外方に下り、端部 は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 大井部外面1/4、回転ヘラ削り調整。大井部外面1/2(頂部)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：淡灰色。 胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。残存：1/2。
同 上	7-37	口径 器高 10.0 2.7	体部・口縁部は下方に下り端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/6、回転ヘラ削り調整。大井部外面2/3(頂部)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：内一淡灰色、外一灰色。 胎土：やや粗。1~2mmの長石を多く含む。チャートを多く含む。 焼成：良好。残存：1/2。一部反転復元。 外間に自然釉付着。
同 上	7-38	口径 器高 10.0 3.5	体部・口縁部はやや内脇して下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部はやや高く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。天井部外面1/3(頂部)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰青色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。堅腹。残存：1/4。反転復元。
同 上	7-39	口径 器高 10.4 4.9	体部は下外方に下り口縁部はやや下方に下る。 大井部は高く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面2/5、回転ヘラ削り調整。天井部外面3/10(頂部)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：淡灰白色。 胎土：密。焼成：やや不良。残存：1/2。合成復元。
同 上	7-40	口径 器高 10.5 3.0	体部・口縁部は内脇して下外方に下り、 端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 大井部外面1/6、回転ヘラ削り調整。天井部外面1/2(頂部)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一淡灰色、外一暗灰褐色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。1mmの石英をわずかに含む。チャートを若干含む。焼成：良好。残存：1/2。一部反転復元。
同 上	7-41	口径 器高 10.8 2.9	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 大井部外面2/7、回転ヘラ削り調整。天井部外面2/7(頂部)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：内一淡灰色、外一暗灰褐色。 胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。チャートを若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
同 上	7-42	口径 器高 9.6 3.4	体部・口縁部はやや内脇してやや下方に下り、 端部は丸くおさめる。 大井部はやや低く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/4、回転ヘラ削り調整。天井部外面1/2(頂部)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：内一淡灰色、外一淡灰褐色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。チャートを若干含む。焼成：良好。残存：1/2。
同 上	7-43	口径 器高 10.0 2.7	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一明灰青色、外一暗灰褐色。 胎土：密。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
同 上	7-44	口径 器高 9.9 2.8	体部・口縁部はやや下外方に下り、端部 は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。天井部頂部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 大井部外面1/4、回転ヘラ削り調整。天井部外面1/2(頂部)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰青色。胎土：密。1~2mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/8。反転復元。 内面灰がぶり。外間に自然釉付着。
同 上	7-45	口径 器高 9.8 3.2	体部の下外方に下り、口縁部は下方に下る。 端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/6、回転ヘラ削り調整。天井部外面2/7(頂部)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：淡灰青色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。一部反転復元。
同 上	7-46	口径 器高 9.6 2.9	体部・口縁部は内脇して下外方に下り、 端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 大井部外面1/6、回転ヘラ削り調整。天井部外面1/2(頂部)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰青色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。

器種	図版 版面	法 量(cm)	形 態の特 徴	手 法の特 徴	備 考	
杯 垂	7-47	口径 器高	10.9 2.7 くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/4、回転ヘラ削り調整。天井部外面1/7(頂部)、未調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：暗灰青色。 胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：9/10。一部反転復元。	
同 上	7-48	口径 器高	8.7 3.2 体部・口縁部はやや内傾して下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部はやや高くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/3、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一暗灰黄色、外一暗灰色。 胎土：密。 焼成：良好。 残存：1/4。反転復元。	
同 上	7-49 9-13	口径 器高	10.3 2.7 体部はやや下方に下り、口縁部は下外方に下る。 端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。天井部窪け歪む。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一灰 色、外一暗灰色。胎土：密。1~2 mmの長石をやや多く含む。 焼成：良好。残存：4/5。外側底部無輪片付着。	
杯 身	7-50	口径 受部径 器高 たちあがり高 たちあがり角 度	8.8 10.6 3.3 0.6 32° 00'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/5、回転ヘラ削り調整。 底部外面3/5(底部中央)、未調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰 色。胎土：密。 焼成：良好。 残存：1/3。一部反転復元。 底部外面に自然輪付着。
同 上	7-51	口径 受部径 器高 たちあがり高 たちあがり角 度	8.2 10.2 2.8 0.4 42° 00'	たちあがりは内傾したのち端部で上方にのび、端部はやや丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/7、回転ヘラ削り調整。 底部外面3/7(底部中央)、未調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：明灰青色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。微裂。 残存：1/2。反転復元。
同 上	7-52	口径 受部径 器高 たちあがり高 たちあがり角 度	9.9 11.5 3.7 0.5 32° 30'	たちあがりは内傾したのち中位ではほぼ直立し、端部はやや丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は深く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/5、回転ヘラ削り調整。 底部外面2/5(底部中央)、未調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一暗灰青色、外一暗灰色。 胎土：密。2mmの長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：2/3。反転復元。
同 上	7-53	口径 受部径 器高 たちあがり高 たちあがり角 度	9.2 10.8 3.0 0.6 35° 30'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部はやや丸くおさめる。 底体部はやや深く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：内一明灰青色、外一暗灰青色。 胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：1/2。
同 上	7-54 9-17	口径 受部径 器高 たちあがり高 たちあがり角 度	9.3 11.0 2.9 0.5 43° 45'	たちあがりは内傾したのち中位で上方にのびる。端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部はやや丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/3、回転ヘラ削り調整。 底部外面1/3(底部中央)、未調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：内一灰 色、外一暗灰黄色。胎土：密。1~2mmの長石を含む。 チャートを含む。 焼成：良。残存：2/3。 底部外面に土器片付着。底体部外面灰かぶり。底体部外面一部自然輪付着。
同 上	7-55	口径 受部径 器高 たちあがり高 たちあがり角 度	10.0 11.4 2.8 0.5 12° 00'	たちあがりは上方にのびたのち中位で直立し、端部は丸くおさめる。 受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面3/5、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内外一明灰青色、断面一明灰 褐色。胎土：密。 焼成：やや不良。 残存：1/3。反転復元。

器種	固形 固版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 身	7-56	口径 9.5 受部径 11.6 残存高 3.2 たちあがり高 0.4 たちあがり角度 52° 30'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部はやや深く、底部はやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/4、回転ヘラ削り調整。底部外面3/4(底部中央)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右方向。 色調: 内一淡灰色、外一灰色。 胎土: 密。1mmの長石を若干含む。 焼成: 良好。 残存: 1/8。反転復元。 底体部外側に上器片付着。 底体部外側灰かぶり。
同 上	7-57	口径 8.8 受部径 10.9 器高 3.1 たちあがり高 0.3 たちあがり角度 63° 00'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/5、回転ヘラ削り調整。底部外面3/5(底部中央)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右方向。 色調: 淡灰色。 胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。チャートを若干含む。 焼成: 良好。 残存: 1/2。反転復元。 底体部外側に自然釉付着。
同 上	7-58	口径 10.2 受部径 11.6 器高 3.3 たちあがり高 0.6 たちあがり角度 12° 00'	たちあがりは上方にのびたの中位で直立し、端部はやや丸くおさめる。 受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。 底体部はやや深く、底部はやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面3/10、四輪ヘラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:左方向。 色調: 淡灰黄色。 胎土: 密。4mm以下の長石を若干含む。 焼成: 不良。 残存: 1/4。反転復元。
同 上	7-59 9-19	口径 9.0 受部径 11.1 器高 2.9 たちあがり高 0.4 たちあがり角度 51° 15'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/5、回転ヘラ削り調整。底部外面2/5(底部中央)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右方向。 色調: 内一灰色、外一暗灰色。 胎土: 密。1~3mmの長石をわずかに含む。 焼成: 良好。残存: ほぼ完形。 底体部外側灰かぶり。 底体部外側に自然釉付着。
同 上	7-60 9-20	口径 9.0 受部径 11.0 器高 3.1 たちあがり高 0.4 たちあがり角度 52° 45'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部はやや深く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面3/5、四輪ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右方向。 色調: 内外一明灰黄色、断面一明灰橙色。 胎土: 密。 焼成: やや不良。 残存: 1/3。反転復元。
同 上	7-61 10-21	口径 9.4 受部径 11.5 器高 3.6 たちあがり高 0.5 たちあがり角度 53° 45'	たちあがりは内傾したのち端部付近で上方にのび、端部はやや弧状。 受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部はやや深く、底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/4、回転ヘラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:左方向。 色調: 内一灰色、外一暗灰色。 胎土: やや粗。1~2mmの長石をやや多く含む。チャートを多く含む。 焼成: 良好。 残存: 3/5。一部反転復元。
同 上	7-62	口径 8.4 受部径 10.4 器高 2.7 たちあがり高 0.4 たちあがり角度 41° 45'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/2、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右方向。 色調: 内一暗灰青色、外一暗灰色。 胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。 焼成: 良好。 残存: 1/4。反転復元。
同 上	7-63 10-22	口径 8.6 受部径 10.6 器高 2.9 たちあがり高 0.4 たちあがり角度 50° 00'	たちあがりは内傾したのち端部付近で上方にのび、端部はやや丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/11、回転ヘラ削り調整。底部外面6/11(底部中央)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右方向。 色調: 淡灰色。 胎土: 密。2mm以下の長石を若干含む。チャートを若干含む。 焼成: 良好。 残存: 9/10。底体部外側に底盤片付着。 底体部外側灰かぶり。
同 上	7-64	口径 9.0 受部径 10.6 器高 2.8 たちあがり高 0.4 たちあがり角度 42° 15'	たちあがりは内傾したのち低位で上方にのび、端部は丸くおさめる。 受部はほぼ水平にのび端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/7、回転ヘラ削り調整。底部外面3/7(底部中央)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:左方向。 色調: 内一淡灰青色、外一淡灰黄色。 胎土: 密。1~4mmの長石を含む。 チャートを含む。焼成: 良好。 残存: 1/3。一部反転復元。 底体部外側に土器片培養。 底体部外側灰かぶり。

器種	図版 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 身	7-65 10-23	口径 8.9 受部径 11.2 器高 3.1 たちあがり高 度 0.4 たちあがり角 度 59° 00'	たちあがりは内傾したち端部で上方に のび、端部はやや丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/6、回転ヘラ削り 調整。底部外面1/2(底部中央)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：淡灰色。 胎土：密。2mm以下の長石をわずか に含む。チャートを若干含む。 焼成：良好。 残存：3/4。
	7-66 同 上	口径 9.6 受部径 11.8 器高 3.2 たちあがり高 度 0.5 たちあがり角 度 42° 30'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くお さめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/5、回転ヘラ削り 調整。底部外面3/5(底部中央)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一淡灰褐色、外一暗灰色。 胎土：密。2mm以下の長石を多 く含む。チャートを含む。 焼成：良好。 残存：5/6。
	7-67 10-25	口径 9.3 受部径 10.8 器高 3.1 たちあがり高 度 0.3 たちあがり角 度 32° 00'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くお さめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/4、回転ヘラ削り 調整。底部外面1/4(底部中央)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：淡灰色。 胎土：やや粗。2mm以下の長石を多 く含む。チャートを多く含む。 焼成：良好。 残存：2/3。反転復元。 底部内外面一部灰かぶり。
同 上	7-68 同 上	口径 11.1 受部径 12.8 器高 2.7 たちあがり高 度 0.5 たちあがり角 度 47° 15'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くお さめる。 受部はやや外上方にのび、端部は丸くお さめる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/9、回転ヘラ削り 調整。底部外面5/9(底部中央)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一暗灰青色、外一暗灰色。 胎土：密。 焼成：良好。 残存：1/5。反転復元。
	7-69 同 上	口径 9.7 受部径 11.5 器高 2.5 たちあがり高 度 0.4 たちあがり角 度 38° 00'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くお さめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面9/10、回転ヘラ削 り調整。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：内一暗灰青色、外一暗灰色。 胎土：密。 焼成：良好。 残存：1/4n。反転復元。
	7-70 同 上	口径 10.5 受部径 12.4 器高 2.8 たちあがり高 度 0.4 たちあがり角 度 41° 00'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くお さめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/5、回転ヘラ削り 調整。底部外面1/6(底部中央)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：明灰青色。 胎土：密。5mm以下の長石を若干含 む。 焼成：良好。 残存：1/2n。反転復元。
同 上	7-71 同 上	口径 8.7 受部径 10.7 器高 2.9 たちあがり高 度 0.5 たちあがり角 度 57° 45'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くお さめる。 受部は外上方にのび、端部はやや丸くお さめる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/2、回転ヘラ削り 調整。底部外面1/4(底部中央)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：淡灰青色。 胎土：密。2mm以下の長石を含む。 チャートを含む。 焼成：良好。 残存：1/3n。一部反転復元。 外面に自然輪付看。
	7-72 10-26	口径 9.7 受部径 11.8 器高 2.9 たちあがり高 度 0.3 たちあがり角 度 55° 45'	たちあがりは内傾したち、端部付近で 上方にのびる。端部はやや丸くおさめる。 受部はやや外上方にのび、端部は丸くお さめる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/3、回転ヘラ削り 調整。底部外面1/3(底部中央)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：内一灰青色、外一暗灰色、断 面一淡褐色。 胎土：やや粗。1~2mmの長石をや や多く含む。チャートを含む。 焼成：良好。 残存：7/8n。
	7-73 同 上	口径 9.0 受部径 11.1 器高 3.1 たちあがり高 度 0.3 たちあがり角 度 63° 00'	たちあがりは内傾したち、端部付近で やや上内方にのびる。端部は丸くおさめ る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/5、回転ヘラ削り 調整。底部外面3/5(底部中央)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：内一淡灰、外一灰。 胎土：密。1~2mmの長石を含む。 1mm以下の石英をわずかに含む。 焼成：良好。残存：1/2。合成復元。 底部外面に黒斑片堵着。底部外面灰 かぶり。

器種	画面図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯身	7-74	口径 8.6 受部径 10.7 器高 2.0 たちあがり高 0.4 たちあがり角度 53° 30'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/7、回転ヘラ削り調整。底部外面5/7(底部中央)、未調整。 他は回転ナナ子調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。1~2mmの長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：1/3。合成復元。
同上	7-75	口径 10.2 受部径 12.0 器高 2.4 たちあがり高 0.4 たちあがり角度 34° 15'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナナ子調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：淡灰色。 胎土：密。 焼成：良好。 残存：1/2。反転復元。
杯蓋	8-76 9-14	口径 10.2 器高 3.2	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部はやや低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/4、回転ヘラ削り調整。天井部外面1/2(頂部)、未調整。 他は回転ナナ子調整。	ロクロ回転：左方向。色調：淡灰色。 胎土：密。1~2mmの長石を含む。 焼成：良好。 残存：1/2。一部合成復元。 ヘラ記号：天井部外面に「X」。 外面一部に自然難付着。
同上	8-77	口径 9.9 器高 3.5	体部は下外方に下り、口縁部はほぼ垂直に下る。 端部は丸くおさめる。 天井部はやや低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/4、回転ヘラ削り調整。天井部外面1/2(頂部)、未調整。 他は回転ナナ子調整。	ロクロ回転：左方向。色調：灰色。 胎土：密。1mmの長石を若干含む。 チャートを含む。焼成：良好。 残存：2/3。 ヘラ記号：天井部外面にあり。
同上	8-78	口径 11.2 器高 3.3	体部・口縁部は下方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部はやや低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面3/8、回転ヘラ削り調整。大井部外面1/2(頂部)、未調整。 他は回転ナナ子調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：明灰青色。胎土：密。 焼成：良好。 残存：1/4。反転復元。 ヘラ記号：天井部外面にあり。
同上	8-79 9-15	口径 10.6 器高 3.2	体部・口縁部は下外方に下り、口縁部でやや外反する。端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面3/5、回転ヘラ削り調整。天井部外面1/5(頂部)、未調整。 他は回転ナナ子調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：灰青色。胎土：密。1~3mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。 残存：3/4。一部合成復元。 ヘラ記号：天井部外面にあり。
同上	8-80	口径 11.1 器高 3.2	体部は下外方に下り、口縁部は外反して下外方に下る。端部は丸くおさめる。 天井部は低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/4、回転ヘラ削り調整。天井部外面1/2(頂部)、ヘラ切り子調整。 他は回転ナナ子調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：淡灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：1/2。一部反転復元。 ヘラ記号：天井部外面に「三」あり。
同上	8-81	口径 10.5 器高 3.2	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部は低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/3、回転ヘラ削り調整。大井部外面1/3(頂部)、未調整。 他は回転ナナ子調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一淡灰色、外一灰色。 胎土：密。長石を若干含む。石英をわずかに含む。チャートを含む。 焼成：良好。残存：1/2。 ヘラ記号：天井部外面に「X」あり。
同上	8-82	口径 9.0 残存高 3.5	体部は垂直に下り、口縁部はわずかに外反して下方に下る。端部は丸くおさめる。 天井部はやや高く丸い。 天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/2以上、回転ヘラ削り調整。天井部外面2/3(頂部)、ヘラ切り子調整。 他は回転ナナ子調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰赤色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。 ヘラ記号：天井部外面にあり。
同上	8-83 9-16	口径 10.0 器高 3.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 大井部はやや低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/3、回転ヘラ削り調整。天井部外面2/3(頂部)、ヘラ切り子調整。 他は回転ナナ子調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗褐色。胎土：密。4mm以下 の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：2/3。一部反転復元。 ヘラ記号：天井部外面に「一」あり。
同上	8-84	口径 9.0 残存高 2.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/3以下、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナナ子調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰青色。 胎土：密。焼成：良好。 残存：1/4。 ヘラ記号：天井部外面にあり。

器種	図版 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 身	8-85 同 上	口径 9.2 受部径 11.4 器高 2.7 たちあがり高 度 0.3 たちあがり角 度 66° 30'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや 丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周1/6、回転ヘラ削り 調整。底部外周1/2(底部中央) , ヘラ切り未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：淡灰褐色。 胎土：密。2mm以下の長石をわずか に含む。チャートを若干含む。 焼成：良好。 残存：3/4。
同 上	8-86 同 上	口径 8.8 受部径 10.9 器高 2.9 たちあがり高 度 0.3 たちあがり角 度 53° 30'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや 丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。 底体部は浅く、底部は平らに近い。 全体にやや焼け重む。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周1/4、回転ヘラ削り 調整。底部外周1/2(底部中央) , ヘラ切り未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰褐色。 胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：1/2。 底体部外面に黒斑片付着。
同 上	8-87 同 上	口径 8.9 受部径 11.0 器高 3.2 たちあがり高 度 0.3 たちあがり角 度 55° 00'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くお さめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。 底体部はやや深く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周1/5、回転ヘラ削り 調整。底部外周2/5(底部中央) , ヘラ切り未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一淡灰褐色、外一灰色。 胎土：密。 焼成：良好。 残存：1/4。反転復元。 底体部外面に黒斑片付着。 底体部外面に自然釉付着。
同 上	8-88 同 上	口径 10.5 受部径 13.4 残存高 2.4 たちあがり高 度 0.4 たちあがり角 度 56° 45'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くお さめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。 底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠 損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周3/4以下、回転ヘラ 削り調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：明灰青色。 胎土：密。 焼成：良好。 残存：1/5。反転復元。
同 上	8-89 同 上	口径 8.9 受部径 11.1 器高 3.0 たちあがり高 度 0.4 たちあがり角 度 55° 15'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くお さめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。 底体部は浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周1/2、回転ヘラ削り 調整。底部外周5/7(底部中央) , ヘラ切り未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：淡灰褐色。 胎土：密。1~3mmの長石を含む。 チャートを含む。 焼成：良好。 残存：7/8。
同 上	8-90 同 上	口径 9.1 受部径 11.4 器高 3.3 たちあがり高 度 0.2 たちあがり角 度 55° 45'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くお さめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。 底体部はやや深く、底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周1/4、回転ヘラ削り 調整。底部外周1/2(底部中央) , ヘラ切り未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。色調：淡灰色。 胎土：密。1mmの長石を若干含む。 チャートを含む。 焼成：良好。堅敏。 残存：4/5。底体部外面に黒斑片付着。 底体部外周-受部上面に自然釉付着。 受部上面に杯口縁部擦着。底部外 面に十脚片付着。
同 上	8-91 同 上	口径 9.5 受部径 11.6 器高 3.4 たちあがり高 度 0.5 たちあがり角 度 51° 15'	たちあがりは内傾したち端部付近で上 内方にのび、端部はやや丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周1/3(底部中央)、 ヘラ切り未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：灰褐色。 胎土：密。1mmの長石を若干含む。 焼成：良好。堅敏。 残存：完形。 ヘラ記号：底部外面に「×」あり。 底体部外周に胎土塊が付着。
同 上	8-92 同 上	口径 7.3 受部径 9.4 器高 2.4 たちあがり高 度 0.4 たちあがり角 度 50° 00'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くお さめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。 底体部は浅く、底部は平ら。 底部は焼け重む。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/3(底部中央)、 ヘラ切り未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：明灰青色。 胎土：密。 焼成：良好。 残存：1/4。反転復元。 外曲灰かぶり。
同 上	8-93 同 上	口径 9.4 受部径 11.4 器高 3.0 たちあがり高 度 0.3 たちあがり角 度 49° 00'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くお さめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。 底体部は浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周1/3、回転ヘラ削り 調整。底部外周1/2(底部中央) , ヘラ切り未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：内一淡灰褐色、外一灰色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含 む。チャートを含む。 焼成：良好。 残存：2/3。合成復元。 ヘラ記号：底部外面にあり。

器種	図版 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考	
壺	8-94	口径 基部径 残存高	7.6 6.9 3.7	頭部は垂直にのび、口縁部は外上方にのびる。 口縁端部は丸くおさめる。 肩部は外下方に張り出す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：暗灰色。 胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。残存：7/8。 反転復元。口頭部内面に自然釉付着。
長頸壺	8-95	口径 残存高	8.6 9.6	頭部は上方にやや外側してのび、口縁部は上外方にのびる。 口縁端部は丸くおさめる。 頭部基部付近以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：淡灰青色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。残存：口頭部の2/3。
壺 蓋	8-96	口径 器高	8.8 2.9	体部は下方に下り、口縁部は外反する。 口縁端部はやや内傾する凹面を成して、外側で接地する。 天井部は低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面5/7、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：1/4。 反転復元。
短頸壺	8-97	口径 基部径 体部最大径 残存高	8.6 8.5 14.2 5.5	頭部は基部から上外方にのびる。 口縁端部は丸くおさめる。 頭部は下方にやや内傾して下り、体部は下内方に下る。体部下半・底部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一明灰青色、外一暗灰色。 胎土：密。 残存：1/7。 反転復元。
長瓶壺	8-98	口径 基部径 残存高	11.5 9.8 9.2	頭部は上方にのびたのち、内側して上外方にのびる。 口縁部はやや上内方にのびる。 頭部は丸くおさめる。頭部以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：内一灰青色、外一暗灰青色。 胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：口頭部の1/5。 反転復元。
同上	8-99	口径 残存高	10.8 5.3	頭部下平以下欠損。頭部は上外方にのびたのち内側して内方にのび、口縁部は上方にのびる。 口縁端部は丸くおさめる。頭部外面上方にやや純く2条の沈線をめぐらす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：灰青色。 胎土：密。1mmの長石を含む。 焼成：良好。 残存：口頭部の1/16。 反転復元。
杯 蓋	9-100	口径 器高 つまみ径 かえり高 かえり角度 60° 00'	11.2 3.4 1.0 0.2 0.2 0.0	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部は丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下に突出せず、口縁部で接地する。 天井部はやや低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面4/5、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：淡灰色。 胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：1/4。 一部反転復元。 ヘラ記号：天井部外面上に「—」あり。
同上	9-101 11-31	口径 器高 つまみ径 かえり高 かえり角度 42° 00'	10.7 3.4 1.5 1.0 0.3 0.0	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部は丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下に突出せず、口縁部で接地する。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面4/5、回転ヘラ削り調整。 天井部内面中央、静止ナダ調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰色。 胎土：密。2mm以下の長石を含む。 チャートを含む。 焼成：良好。 残存：9/10。 ヘラ記号：天井部外面上に「—」あり。
同上	9-102	口径 器高 つまみ径 つまみ高 かえり高 かえり角度 40° 00'	10.8 3.3 1.2 1.0 0.2 0.0	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部は丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下に突出せず、口縁部で接地する。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面5/6、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：灰青色。 胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：2/3。 一部反転復元。 ヘラ記号：天井部外面上に「—」あり。 天井部外面上に磨塵片付着。
同上	9-103	口径 器高 つまみ径 つまみ高 かえり高 かえり角度 56° 30'	9.9 3.2 1.2 1.0 0.2 0.0	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部はやや丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下に突出せず、口縁部で接地する。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面3/4、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰青色。 胎土：密。 焼成：良好。 残存：1/4。 一部合成復元。 外面上に自然釉付着。
同上	9-104 11-32	口径 器高 つまみ径 つまみ高 かえり高 かえり角度 53° 15'	10.2 3.1 1.3 1.2 0.2 0.0	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部は丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下に突出せず、口縁部で接地する。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面4/5、回転ヘラ削り調整。 天井部内面中央、静止ナダ調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：淡灰青色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：完形。

器種	図面 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の等級	備考
杯	9-105	口径 10.5 器高 2.6 つまみ径 1.3 つまみ高 0.6 かえり高 0.3 かえり角度 35° 45°	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内側するかえりを付し、その端部はやや鋸い。 かえりは口縁端部以下に部分的に突出し、かえり端部のみで接地する箇所と、口縁端部とかえり端部の双方で接地する箇所とがある。 天井部外間に扁平な擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側3/4、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：淡灰色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：2/5。合成復元。
蓋	9-106	口径 10.8 残存高 3.0 つまみ径 — つまみ高 — かえり高 0.3 かえり角度 44° 45°	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内側するかえりを付し、その端部は丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下にわずかに突出し、かえり端部で接地する。 天井部はやや低くや丸い。 天井部外面上中央に擬宝珠様つまみを付すようである。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側4/5、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一灰褐色、外一灰色。 胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：1/2。合成復元。 ヘラ記号：天井部外面にあり。
同上	9-107	口径 11.6 器高 3.0 つまみ径 1.4 つまみ高 1.2 かえり高 0.3 かえり角度 46° 30°	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内側するかえりを付し、その端部は丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下に突出し、かえり端部で接地する。 天井部は低く平ら。 天井部外面上中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側3/4、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：1/3。反板復元。 外面に自然剥付着。
同上	9-108	口径 10.9 残存高 2.4 つまみ径 — つまみ高 — かえり高 0.2 かえり角度 53° 00°	口縁端部はやや丸くおさめ、口縁部内面に内側するかえりを付し、その端部はやや鋸い。 かえりは口縁端部以下に一部で突出し、かえり端部のみで接地する箇所と、口縁端部、かえり端部の双方で接地する箇所とがある。 天井部はやや低く平ら。天井部外面上中央に擬宝珠様つまみを付すと思われる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側4/5、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：灰色。 胎土：密。4mm以下の長石をわずかに含む。 焼成：良好。 残存：1/2。合成復元。 外面灰かぶり。
同上	9-109 11-33	口径 10.5 器高 1.5 つまみ径 1.0 つまみ高 0.7 かえり高 0.3 かえり角度 35° 00°	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内側するかえりを付し、その端部は丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下に突出し、かえり端部で接地する。 天井部は低く平ら。 天井部外面上中央に擬宝珠様つまみを付す。 天井部が焼け込み、中央が凹む。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側5/6、回転ヘラ削り調整。 天井部内面中空尖堵止ナダ調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一灰青色、外一灰色。 胎土：密。2mm以下の長石を含む。 チャートを含む。 焼成：良好。 残存：完形。
同上	9-110	口径 11.0 残存高 2.8 つまみ径 — つまみ高 — かえり高 0.4 かえり角度 53° 00°	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内側するかえりを付し、その端部はやや鋸い。 かえりは口縁端部以下に突出し、かえり端部で接地する。 天井部はやや低く平ら。 天井部外面上中央に擬宝珠様つまみを付すと思われる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側3/4、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：内一淡灰色、外一暗灰色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。 チャートを含む。 焼成：良好。 残存：1/2。 外面に自然剥付着。
同上	9-111	口径 10.5 残存高 2.9 つまみ径 — つまみ高 — かえり高 0.2 かえり角度 56° 15°	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内側するかえりを付し、その端部はやや丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下に突出せざ、口縁端部とかえり端部の双方で接地する。 天井部は低く平ら。 天井部外面上中央に擬宝珠様つまみを付すようである。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側3/5、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一灰青色、外一灰色。 胎土：密。2mmの長石を含む。 焼成：良好。 残存：7/8。 天井部外面に擦摩片付着。

器種	回転 回数	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考	
杯	9-112	口径 残存高 つまみ径 つまみ高 かえり高 かえり角度	11.8 2.2 — — 0.3 59° 15'	口縁部は丸くおさめ、口縁部内面に内 縫するかえりを付し、その端部は丸くお さめる。 かえりは口縁端部以下に突出し、かえり 端部で接地する。 天井部は低く平ら。 天井部外周中央に擬宝珠様つまみを付す と思われる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外周2/3、回転ヘラ削 り調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一明灰色、外一灰褐色。 胎土：密。2mm以下の長石を含む。 焼成：良好。 残存：1/2。合成復元。 外面灰かぶり。
	蓋	—	—	—	—	
同	9-113	口径 器高 つまみ径 つまみ高 かえり高 かえり角度	10.6 2.4 — — 0.3 53° 00'	口縁部は丸くおさめ、口縁部内面に内 縫するかえりを付し、その端部は丸くお さめる。 かえりは口縁端部以下に突出せず、口縁 端部で接地する。 天井部は低く平ら。 天井部外周中央に擬宝珠様つまみを付す と思われる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外周3/4、回転ヘラ削 り調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰褐色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：1/2。反転復元。
	上	—	—	—	—	
杯	9-114	口径 器高	9.5	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸 くおさめる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周1/5、回転ヘラ削り 調整。底部外周3/5(底部中央)、ヘラ切り未調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰青色。 胎土：密。3mm以下の長石を含む。 チャートを含む。
	11-34	—	3.4	底体部はやや深く、底部は平ら。 全体に焼け斑む。	他の回転ナダ調整。	焼成：良好。 残存：7/8。
身	9-115	口径 器高	10.9	体部は上方にのび、口縁部はやや外反し て上外方にのびる。口縁端部は丸くおさ める。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周5/6、回転ヘラ削り 調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：淡灰青 色。胎土：密。4mm以下の長石をや や多く含む。チャートを含む。
	11-35	—	4.6	底体部は深く、底部はやや丸い。	焼成：良好。残存：ほぼ完形。 外面一部に自然釉付着。	焼成：良好。
同	9-116	口径 器高	9.8	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸 くおさめる。	マキアゲ、ミズビキ成形。	ロクロ回転：左方向。色調：内一明 灰色、外一灰褐色。胎土：密。3mm以 下の長石を含む。チャートを含む。
	11-36	—	3.6	底体部はやや浅く、底部はほぼ平ら。 口縁部一部焼け歪む。	底部外周1/2、回転ヘラ削り 調整。底部外周1/4(底部中央)、ヘラ切り未調整。 他の回転ナダ調整。	焼成：良好。残存：9/10。反転復元 外面灰かぶり。
同	9-117	口径 器高	10.0	体部は上外方にのび、口縁部は上方にの びる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周1/4、回転ヘラ削り 調整。底部外周1/2(底部中央)、ヘラ切り未調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：明灰青色。 胎土：密。2mm以下の長石を含む。 チャートを含む。
	11-37	—	3.7	口縁端部は丸くおさめる。 底体部はやや深く、底部は平ら。	焼成：良好。 残存：1/2。反転復元。	焼成：良好。
同	9-118	口径 器高	10.2	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸 くおさめる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周3/4、回転ヘラ削り 調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一灰色、外一暗灰色。 胎土：密。5mm以下の長石をやや多 く含む。チャートを含む。
	11-38	—	4.0	底体部はやや浅く、底部はほぼ平ら。	焼成：良好。残存：3/5。ヘラ記号：底部外 面に「—」あり。一部灰かぶり。	焼成：良好。
同	9-119	口径 器高	10.0	体部は上外方にのび、口縁部は上方にの びる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周1/6、回転ヘラ削り 調整。底部外周1/2(底部中央)、ヘラ切り未調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：明灰青色。胎土：密。1mmの長 石をわざかに含む。チャートを含む。
	11-39	—	3.9	口縁端部は丸くおさめる。 底体部はやや浅く、底部は平ら。	焼成：良好、堅麗。 残存：完形。	焼成：良好。
同	9-120	口径 器高	9.0	体部はやや内彎して上外方にのび、口縁 部は上方にのびる。口縁端部は丸くおさ める。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周3/4、回転ヘラ削り 調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：明灰青色。
	上	—	3.5	底体部はやや深く、底部は平らに近い。	胎土：密。6mm以下の長石を若干含 む。チャートを含む。	焼成：良好。残存：1/2。
同	9-121	口径 器高	9.8	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸 くおさめる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周1/3、回転ヘラ削り 調整。底部外周1/3(底部中央)、ヘラ切り未調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰褐色。
	上	—	3.4	底体部は浅く、底部は平らに近い。	胎土：密。2mm以下の長石を若干含 む。チャートを含む。	焼成：良好。残存：2/3。一部反転復元。
同	9-122	口径 器高	8.9	体部は上方にのび、口縁部は外反して上 外方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/3、回転ヘラ削り 調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰色。 胎土：密。3mm以下の長石を含む。
	11-40	—	3.6	底体部はやや深く、底部は平らに近い。	チャートを含む。	焼成：良好。残存：1/2。反転復元。

器種	図面 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考	
杯 身	9-123	口径 残存高	10.0 3.5	体部・口縁部はや外反して上外方にのび 端部は丸くおさめる。 底体部はやや浅く、底部はほぼ平ら。 底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成型。 底部外面1/3、回転ヘラ削り 調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：明灰青色。胎土：密。3mm以下 の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：1/4。反転復元。 ヘラ記号：底部外面にあり。
同 上	9-124	口径 器高	9.5 3.1	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸 くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成型。 底部外面1/2、回転ヘラ削り 調整。底部外面1/3(底部中央) 、ヘラ切り未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：内一淡灰色、外一暗灰色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。残存：1/3。 合成復元。
同 上	9-125	口径 残存高	9.4 3.5	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸 くおさめる。 底体部はやや浅く、底部はやや丸い。 底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成型。 底部外面4/5、回転ヘラ削り 調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：青灰褐色。胎土：密。5mm以下 の長石を若干含む。焼成：良好。 残存：1/4。反転復元。
同 上	9-126	口径 器高	9.4 3.5	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸 くおさめる。 底体部はやや浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成型。 底部外面2/7、回転ヘラ削り 調整。底部外面4/7(底部中央) 、ヘラ切り未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：淡灰色。 胎土：密。 焼成：良好。 残存：1/3。反転復元。
同 上	9-127	口径 器高	9.4 3.3	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸 くおさめる。 底体部は浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成型。 底部外面1/4、回転ヘラ削り 調整。底部外面1/2(底部中央) 、ヘラ切り未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：内一明灰色、外一暗灰色。 胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。 チャートを含む。焼成：良好。 残存：1/4。反転復元。
同 上	9-128	口径 残存高	9.8 3.2	体部・口縁部は上外方にのびる。 口縁端部はやや鋸い。 底体部はやや浅く、底部はほぼ平ら。 底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成型。 底部外面2/3、回転ヘラ削り 調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。 チャートを含む。焼成：良好。 残存：1/5。反転復元。
甕	11-171	口径 基部径 残存高	10.7 9.6 6.0	口縁部はやや外反して上外方にのび、口 縁部は近く外方にのび、端部は丸くおさ める。 肩部は外下方に下る。 肩部下半以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成型。 回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：青灰色。 胎土：密。4mm以下の長石を多く含む。 チャートを含む。焼成：良好。 残存：口頭部1/4。反転復元。
同 上	11-172	口径 基部径 残存高	15.0 12.4 5.2	頭部は外反して上外方にのび、口縁部は 外上方にのび、端部は丸くおさめる。 肩部は外下方に下る。 肩部下半以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成型。 肩部外面、タタキ。 肩部内面、青海波タタキ。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：淡灰色。 胎土：密。2mm以下の長石を含む。 焼成：良好。残存：口頭部1/4。 反転復元。外側に自然釉付着。
同 上	11-173	口径 基部径 残存高	19.0 16.3 7.6	頭部は上外方にのび、口縁部は外上方に のび、端部は丸くおさめる。 肩部は外下方に下る。 体部下半以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成型。 肩部外面、タタキ。 肩部内面、青海波タタキ。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰色。 胎土：密。6mm以下の長石を含む。 焼成：やや不良。 残存：口頭部1/3以下。反転復元。
同 上	11-174	口径 基部径 残存高	20.8 20.2 6.0	口頭部は内上方にのびたのちや内壁し てやや上外方にのびる。口縁端部は内傾 する平盤を成し、その断面は方形に近い。 肩部は外下方に下る。肩部以下欠損。 頭部中位に1条の純い沈線をめぐらす。	マキアゲ、ミズビキ成型。 肩部外面、タタキ。肩部内面、 青海波タタキ。 頭部内面、タタキのち回転 ナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。胎土：密。2mm以下の 長石を含む。チャートを含む。 焼成：良好。残存：口頭部1/5。 反転復元。外側一部に自然釉付着。
同 上	11-175	口径 最大径 残存高	40.8 44.0 6.0	頭部は上外方にのび、口縁部は口縁部下 であまい段を成して外下方にのびる。口 縁端部は丸くおさめる。頭部下半以下欠 損。 口縁部底面下に1条10本の波状文を1条、 頭部中位に1条8本の波状文を1条施文 のちに、頭部中位上方に3条の純い沈 線をめぐらす。	マキアゲ、ミズビキ成型。 回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰青色。 胎土：密。2mm以下の長石を含む。 チャートを含む。 焼成：良好。 残存：口頭部の1/30。反転復元。
同 上	11-176	残存長 (上下 方向)	9.3	肩部一部のみ残存。 肩部に先端が残して輪状を成す把手を付 す。	マキアゲ、ミズビキ成型。 肩部外面、タタキ。 肩部内面、同心円タタキ。 把手、ナデ調整。	色調：灰色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含 む。チャートを含む。焼成：良好。

第3表

ひつ池西窯下部上層灰原出土遺物観察表 (HTW-B2)

器種	図面 回転 回転	法 量(cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考	
杯 蓋	10-129	口径 器高	9.8 3.2	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外圍2/9、回転ヘラ削り調整。天井部外周5/9(頂部)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右方向。 色調:内一明灰青色、外一淡灰色。 胎土:密。2mm以下の長石を若干含む。 焼成:良好。 残存:1/2。反転復元。
同 上	10-130	口径 器高	11.0 3.3	体部は外下方に下り、口縁部は下外方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部はやや低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外圍1/3、回転ヘラ削り調整。天井部外周1/3(頂部)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:左方向。 色調:淡灰色。 胎土:密。4mm以下の長石を若干含む。 チャートを含む。 焼成:良好。 残存:1/3。合成復元。
同 上	10-131	口径 残存高	10.2 2.9	体部はやや外下方に下り口縁部は下外方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外圍3/5、回転ヘラ削り調整。	ロクロ回転:右方向。 色調:明灰青色。 胎土:密。チャートを含む。 焼成:良好。残存:1/4。反転復元。
同 上	10-132	口径 残存高	9.7 2.9	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部はやや高く平ら。 天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外圍1/2、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右方向。 色調:明灰青色。 胎土:密。チャートを含む。 焼成:1mmの石英を若干含む。 焼成:良好。残存:2/3。合成復元。
杯 身	10-133 12-41	口径 受部径 器高 たちあがり高 度	9.4 11.5 3.1 0.4 0.4	たちあがりは内傾したのち中位で上内方にのび、端部はやや丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 受部外周1/4、回転ヘラ削り調整。 底体部は浅く、底部は平ら。	ロクロ回転:右方向。 色調:淡灰色。 胎土:密。2mm以下の長石を含む。 チャートを含む。 焼成:良好。 残存:2/3。一部反転復元。 外面灰かぶり。外側一部自然釉付着。
同 上	10-134	口径 受部径 器高 たちあがり高 度	8.8 11.2 2.9 0.4 0.4	たちあがりは内傾したのち端部で上方にのび、端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/5、回転ヘラ削り調整。 底体部は浅く、底部は平ら。	ロクロ回転:左方向。 色調:内一暗灰色、外一淡灰色。 胎土:密。2mm以下の長石を若干含む。 チャートを含む。 焼成:良好。残存:1/2。 受部上面に杯蓋片焼着。
同 上	10-135	口径 受部径 器高 たちあがり高 度	8.7 10.4 2.5 0.7 0.7	たちあがりは内傾したのち低位で上方にのび、端部はやや丸くおさめる。 受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周1/6、回転ヘラ削り調整。 底体部は浅く、底部は平ら。	ロクロ回転:右方向。 色調:内一明灰青色、外一暗灰色。 胎土:密。3mm以下の長石を若干含む。 焼成:良好。残存:1/2。反転復元。
同 上	10-136	口径 受部径 器高 たちあがり高 度	8.7 10.4 2.7 0.4 0.4	たちあがりは内傾したのち中位で上方にのびる。 端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部はやや丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/3、回転ヘラ削り調整。 底体部は浅く、底部は平ら。	ロクロ回転:右方向。 色調:暗灰色。 胎土:密。3mm以下の長石を若干含む。 チャートを含む。 焼成:良好。 残存:1/2。反転復元。
同 上	10-137	口径 受部径 器高 たちあがり高 度	9.3 11.2 2.7 0.4 0.4	たちあがりは内傾したのち端部で上方にのびる。 端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/7、回転ヘラ削り調整。 底部外周4/7(底部中央)、ヘラ切り未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:左方向。 色調:灰色。 胎土:密。2mm以下の長石を若干含む。 チャートを含む。 焼成:良好。 残存:1/3。反転復元。 外面に隔壁片焼着。外側に自然釉付着。内面灰かぶり。
同 上	10-138	口径 受部径 器高 たちあがり高 度	9.6 11.1 3.2 0.5 0.5	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/5、回転ヘラ削り調整。 底部外周3/5(底部中央)、未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転:右方向。 色調:暗灰色。 胎土:密。3mm以下の長石を若干含む。 焼成:良好。 残存:1/4。反転復元。

器種	図面 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 身	10-139	口徑 9.3 受部径 11.0 器高 2.5 たちあがり高 0.4 たちあがり角度 36° 30'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側1/4、回転ヘラ削り調整。 底部外側1/2(底部中央)、ヘラ切り未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：内一明灰青色、外一暗灰色。 胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：1/4。反転復元。
	10-140 12-42	口徑 10.0 器高 2.9 つまみ径 1.2 つまみ高 1.2 かえり高 0.3 かえり角度 38° 00'	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部は丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下に一部でわずかに突出し、口縁端部へかえり端部の双方で接地する箇所とかえり端部のみで接地する箇所とがある。 天井部は低く平らに近い。天井部外側中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側3/4、回転ヘラ削り調整。 天井部内面中央、勝止ナダ調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：淡灰青色。 胎土：密。2mm以下の長石を含む。 チャートを含む。 焼成：良好。 残存：9/10。天井部外側灰かぶり。 天井部外面に粘土塊付着。
同 上	10-141	口徑 10.8 器高 3.4 つまみ径 1.5 つまみ高 1.1 かえり高 0.3 かえり角度 55° 30'	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部はやや丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下に突出せず、口縁端部へかえり端部の双方で接地する。 天井部は低く平らに近い。天井部外側中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側3/4、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰。 胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：1/3。合成復元。
	10-142	口徑 9.1 器高 3.6	体部、口縁部は外上方にのびる。 口縁端部は丸くおさめる。 底部は深く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側1/3、回転ヘラ削り調整。 底部外側2/3(底部中央)、ヘラ切り未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：明灰青色、断面一灰紫色。 胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。 チャートを含む。焼成：良好。 残存：2/3。反転復元。
高 杯	10-143	基部径 2.7 残存高 6.1	杯底部は平らに近い。体部以上欠損。 脚部は下方に下ったのち下外方に開いて下る。 脚部下方1/3欠損。中位に2条の非常に鈍い沈線をめぐらす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：灰色。 胎土：密。3mm以下の長石を含む。 チャートを含む。焼成：良好。残存：1/5。合成復元。外側灰かぶり。
	12-177	口徑 19.8 基部径 19.6 残存高 6.3	口縁部は外上方にのびる。口縁端部は内傾する平面をほぼ成したのち、内面である段を成す。肩部以下欠損。 口縁部1/3上方に1条のやや鈍い沈線をめぐらす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：淡灰色。 胎土：密。1mmの長石を若干含む。 焼成：良好。残存：口縁部1/5。反転復元。外側一部に崩壊片堵塞。
同 上	12-178	口徑 30.8 残存高 5.1	口頭部下半欠損。口頭部はやや外反して上方にのび、口縁部下で下方にのびたのち段を成し内傾して上方にのびる。 口縁端部は丸くおさまる。口縁部内面にややあまい段を成す。 脚部上方に鈍い2条の沈線をめぐらし、その上方に1条5本の乱れた波状文を1条。沈線の下方に1条の波状文を施す。 下方の波状文はその下半をナダ調整によって消されている。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰。無部外側一部一暗灰色。 胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。 焼成：良好。 残存：口縁部の1/30。反転復元。

第4表 ひつ池西窯下部下層灰原出土遺物観察表 (HTW-B1)

器種	図面 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 蓋	10-144 12-43	口徑 10.7 器高 3.3	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。 口縁端部は丸くおさまる。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側1/5、回転ヘラ削り調整。 天井部外側3/5(頂部)、ヘラ切り未調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一灰、外一暗灰色。 胎土：密。3mm以下の長石を含む。 4mm以下の石英をわずかに含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：3/5。合成復元。天井部外側灰かぶり。外側一部に自然釉付着。

器種	圖面 版面	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考	
杯	10-145 12-44	口径 器高	10.7 3.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/6、回転ヘラ削り調整。天井部外面2/3(頂部)、ヘラ切り未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一灰、外一暗灰色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。チャートを含む。 焼成：良好。残存：1/2。一部反転復元。ヘラ記号：天井部外側にあり。 天井部外側に土器片付着。内面灰かぶり。外面一部に自然釉付着。
	12-46	器高	3.0			
同上	10-146 12-45	口径 器高	9.8 3.0	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/5、回転ヘラ削り調整。天井部外面2/5(頂部)、未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一明灰色、外一淡灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。 焼成：良好。残存：1/2。ヘラ記号：天井部外側にあり。
	12-46	器高	2.9			
壺	10-147 12-46	口径 器高	10.7 2.9	体部は下方に下り、口縁部は外反して下外方に下る。口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/4、回転ヘラ削り調整。天井部外面5/8(頂部)、未調整。 天井部内面中央、静止ナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：青灰色。 胎土：密。チャートをわずかに含む。 焼成：良好。残存：3/5。反転復元。
	12-46	器高	2.9			
杯	10-148 12-46	口径 器高	10.3 3.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部はやや低くほぼ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/7、回転ヘラ削り調整。天井部外面3/7(頂部)、未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一灰、外一暗灰色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。残存：1/3。一部反転復元。
	12-46	器高	3.3			
同上	10-149	口径 残存高	10.5 3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部はやや丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。 天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/7、回転ヘラ削り調整。天井部外面1/2(頂部)、未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一灰、外一灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。 焼成：良好。残存：1/2。合成復元。内外面に自然釉付着。
	10-150	口径 残存高	11.3 3.2	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。 天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。天井部外面1/2(頂部)、未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯	10-151 12-47	口径 器高	9.8 3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/6、回転ヘラ削り調整。天井部外面2/3(頂部)、ヘラ切り未調整。 天井部内面中央、静止ナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰青色。胎土：密。1mmの長石をわずかに含む。 チャートを含む。 焼成：良好。残存：3/5。合成復元。
	12-47	器高	3.1			
同上	10-152	口径 残存高	10.0 3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部はやや低くやや丸い。 天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/3、回転ヘラ削り調整。天井部外面1/3(頂部)、未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。 焼成：良好。残存：1/4。反転復元。内面灰かぶり。
	10-153	口径 受部径 器高 たちあがり高 たちあがり角 度	9.9 11.6 2.8 0.5 36° 00'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 たちあがり高 たちあがり角 度	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/7、回転ヘラ削り調整。底部外面5/7(底部中央)、未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：内一明灰青色、外一灰色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。 焼成：良好。残存：1/3。合成復元。外面上壁片剥着。
同上	10-154	口径 受部径 器高 たちあがり高 たちあがり角 度	9.5 11.3 3.3 0.6 32° 30'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平らに近い。 底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/5、回転ヘラ削り調整。底部外面3/5(底部中央)、未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：淡黄色。胎土：密。チャートを含む。 焼成：不良。残存：2/3。一部反転復元。
	10-154	器高 たちあがり角 度	3.3 0.6 32° 30'			

形種	画面 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 身	10-155	口径 9.1 受部径 11.4 器高 3.1 たちあがり高 0.6 たちあがり角度 47° 00'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/5、回転ヘラ削り調整。底部外面2/5(底部中央)、未調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一灰青色、外一灰色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。 チャートを含む。焼成：良好。 残存：1/2。合成復元。 受部上面に口蓋片接着。外面に窓壁片接着。外面部灰かぶり。
	10-156	口径 9.7 受部径 11.8 器高 2.6 たちあがり高 0.5 たちあがり角度 46° 15'	たちあがりは内傾したのち低位で上内方にのげる。端部は丸くおさめる。 受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。 底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/4、回転ヘラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)、未調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一灰青色、外一灰色。 胎土：密。1mmの長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：1/4。反転復元。 外面に自然釉付着。
	10-157 同 12-48	口径 9.2 受部径 11.1 器高 2.8 たちあがり高 0.4 たちあがり角度 48° 00'	たちあがりは内傾したのち中位で上内方にのげる。端部はやや丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/5、回転ヘラ削り調整。底部外面3/5(底部中央)、ヘラ切り未調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一灰青色、外一暗灰色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。 チャートを含む。 焼成：良好。 残存：1/2。 底体部外面灰かぶり。外面一部に自然釉付着。体部外面に粘土塊付着。
	10-158 同 12-49	口径 10.1 受部径 12.0 器高 3.0 たちあがり高 0.3 たちあがり角度 56° 45'	たちあがりは内傾したのち端部付近で上方にのげる。端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/5、回転ヘラ削り調整。底部外面1/5(底部中央)、未調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一灰青色、外一暗灰色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。 チャートを含む。 焼成：良好。 残存：1/4。反転復元。 外面に自然釉付着。
同 上	10-159 同 12-49	口径 9.5 受部径 11.1 残存痕 2.8 たちあがり高 0.3 たちあがり角度 51° 00'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/3(底部中央)、ヘラ切り未調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一灰青色、外一灰色。 胎土：密。3mm以下の長石をやや多く含む。 チャートを含む。 焼成：良好。 残存：1/3。反転復元。 外面一部灰かぶり。
	10-160 同 上	口径 9.0 受部径 11.6 器高 (3.8) たちあがり高 0.4 たちあがり角度 57° 15'	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部はやや浅い。 全体に焼け歪む。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/4、回転ヘラ削り調整。底部外面5/7(底部中央)、未調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：淡灰色。 胎土：密。2mm以下の長石をわずかに含む。 チャートを含む。 焼成：良好。 残存：1/4。反転復元。 ヘラ記号：底部外面にあり。
	10-161 同 上	口径 9.0 受部径 10.5 器高 2.7 たちあがり高 0.6 たちあがり角度 9° 30'	たちあがりは内傾したのち中位で直立する。 端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/4、回転ヘラ削り調整。底部外面1/2(底部中央)、ヘラ切り未調整。 底体内部中央、静止ナダ調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰青色。 胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。1mmの石英をわずかに含む。 チャートを含む。 焼成：良好。 残存：1/2。合成復元。
	10-162 杯 蓋	口径 10.6 器高 3.1 つまみ径 1.1 つまみ高 0.9 かえり高 0.4 かえり角度 49° 00'	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部はやや丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下に突出し、かえり端部で接続する。 天井部は底く平らに近い。 天井部外面中央に擬宝珠様つまみを付す。 全体に焼き歪みが著しい。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面4/5、回転ヘラ削り調整。 天井部内部中央、静止ナダ調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰。胎土：密。2mm以下の長石を含む。 チャートを含む。 焼成：良好。 残存：完形。蓋のみのため合成復元。 ヘラ記号：天井部外面に「-」あり。

器種	図版 版面	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	10-163	口径 10.6 器高 3.3 つまみ径 1.0 つまみ高 1.1 かえり高 0.2 かえり角度 52° 45'	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部は丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下に突出せず、口縁端部で接地する。 天井部は低くほん平ら。 天井部外側中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側1/2、回転ヘラ削り調整。 天井部内面中央、静止ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色、断面一暗紫褐色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。残存：1/4。一部反転復元。 天井部外側灰かぶり。天井部外側一部に自然釉付着。
同	10-164	口径 10.4 器高 2.6 つまみ径 1.3 つまみ高 0.8 かえり高 0.1 かえり角度 46° 00'	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部はやや丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下に突出せず、口縁端部で後接地する。 天井部は低く平ら。 天井部外側中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側2/3、回転ヘラ削り調整。 天井部内面中央、静止ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。2mm以下の長石を含む。 焼成：良好。残存：1/4。一部反転復元。 つまみに粘土塊付着。 天井部外側一部に自然釉付着。
同	10-165	口径 11.2 残存高 2.3 つまみ径 1 つまみ高 0.3 かえり高 0.3 かえり角度 50° 00'	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部はやや丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下にわずかに突出し、かえり端部で接地する。 天井部は低くほん平ら。 天井部外側中央に擬宝珠様つまみを付すと思われる。天井部中央・つまみ欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側5/6、回転ヘラ削り調整。 天井部内面中央、静止ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：青灰色。 胎土：密。2mm以下の長石をやや多く含む。チャートを含む。 焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
同	10-166	口径 10.8 残存高 2.3 つまみ径 1 つまみ高 1 かえり高 0.2 かえり角度 41° 30'	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部は丸くおさめる。 かえりは口縁端部以下に突出せず、口縁端部とかえり端部の双方で接地する。 天井部は低くやや丸い。 天井部外側中央に擬宝珠様つまみを付すと思われる。天井部中央・つまみ欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側8/9、回転ヘラ削り調整。 天井部内面中央、静止ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。1mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/5。 天井部外側に自然釉付着。
杯	10-167	口径 9.7 器高 3.7	体部は内彎して上方にのび、口縁部は上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。 底体部はやや深く、底部はほん平ら。 底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側1/2（底部中央）、ヘラ削り未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：淡灰黄色。胎土：密。チャートを含む。焼成：やや不良。残存：1/2。反転復元。
同	10-168	口径 9.3 器高 3.7	体部は上方にのび、口縁部はやや外反して上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。 底体部はやや深く、底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側3/4、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰褐色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。1mmの石英をわずかに含む。焼成：良好。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
短 脚 壺	10-169	口径 6.8 基部径 7.4 体部最大径 11.8 残存高 5.4	口縁部は基部からやや上方にのび、口縁部の断面は弓形に近い。 肩部は下方に強く張り出し、体部は下方内方に下る。底部平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側、体部外側、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：暗灰色。胎土：密。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/8。反転復元。 肩部外側灰かぶり。
甕	12-179	口径 29.8 基部径 19.9 残存高 10.6	口縁部は外反して上方にのび口縁部下で外下方にのびたのちあまい段を成し内傾して上方にのび口縁部内面に生る。 肩部は下方に下欠損。肩部上方1/3に下の1条が全周しない2条の純い沈線を、下方1/3に下の1条が全周しない3条の純い沈線をめぐらす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側、タキのち回転ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：明灰青色。 胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：口頭部の1/3以下。反転復元。
同	12-180	口径 30.6 基部径 19.2 残存高 11.8	口縁部は外反して上方にのび、口縁部下で外下方にのびたのちあまい段を成し内傾して上方にのび、口縁部内面に至る。 肩部は下方に張り出し焼けむ。肩部以下欠損。肩部上方1/3に2条の純い沈線をめぐらし、下方1/3に2条の純い沈線をめぐらす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部外側、タキ。 肩部内面、青海波タキ。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：灰青色。 胎土：密。4mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存：口頭部の1/7。反転復元。 口頭部外側に自然釉付着。

器種	図面 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	12-181	口径 29.6 基部径 21.6 残存高 13.0	口縁部は外反して上外方にのび、口縁部下で外下方にのびたもの非常にあまい段を成し、内傾して内上方にのびる。口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面にあまい段を成す。 肩部は外下方に下る。肩部以下下欠損。 頭部中位上方に2条の乱れた非常に純い沈縫をめぐらす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部外腹、小明。 肩部内室、青海波タタキ。 他の回転ナナ調整。	クロロ回転：左方向。 色調：灰色。胎土：密。4mm以下の長石を含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：口頭部の1/5以下。反転復元。基部外腹・口頭部外腹一部に自然釉付着。口頭部内面・部底がぶり。口頭部内面に粘土塊付着。

第5表 ひつ池西窯灰原トレンチ出土遺物観察表

器種	図面 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	13-182 13-51	口径 10.4 器高 3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部はやや低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外腹2/7、回転ヘラ削り調整。天井部外腹3/7(頂部)、未調整。 他の回転ナナ調整。	クロロ回転：右方向。 色調：灰色。胎土：密。3mm以下の長石を含む。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/2。外面一部に自然釉付着。
同上	13-183	口径 9.7 基高 3.2	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部外腹1/2、回転ヘラ削り調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外腹1/2、回転ヘラ削り調整。	クロロ回転：右方向。色調：明灰青色。胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。
同上	13-184	口径 9.3 器高 2.6	体部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外腹1/4、回転ヘラ削り調整。天井部外腹5/8(頂部)、ヘラ切り未調整。 他の回転ナナ調整。	クロロ回転：左方向。色調：明灰青色。胎土：密。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
同上	13-185	口径 9.8 器高 3.3	体部は下外方に下り、口縁部はやや外反して下外方に下る。口縁端部は丸くおさめる。 天井部はやや低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外腹1/7、回転ヘラ削り調整。天井部外腹4/7(頂部)、未調整。 他の回転ナナ調整。	クロロ回転：左方向。色調：橙色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。 ヘラ記号：天井部外腹にあり。
同上	13-186	口径 9.6 残存高 3.0	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。 口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。 天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外腹1/4、回転ヘラ削り調整。天井部外腹1/2(頂部)、ヘラ切り未調整。 他の回転ナナ調整。	クロロ回転：左方向。色調：内一明灰色、外一暗灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。
同上	13-187	口径 10.6 残存高 2.7	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外腹1/4、回転ヘラ削り調整。天井部外腹1/2(頂部)、未調整。 他の回転ナナ調整。	クロロ回転：右方向。色調：淡灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
杯	13-188 13-52	口径 9.5 受部径 11.3 器高 3.1 たちあがり高 0.4	たちあがりは内傾したのち端部で上方にのび、端部はやや丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外腹1/3、回転ヘラ削り調整。底部外腹1/3(底部中央)、未調整。 底部内面中央、静止ナナ調整。 他の回転ナナ調整。	クロロ回転：左方向。色調：内一淡灰色、外一暗灰色。受部は底灰青色、底体部は灰青色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：9/10。外面灰かぶり。底体部外腹に黒壁片付着。底部外腹に土器片付着。
同上	13-189	口径 9.6 受部径 11.8 器高 3.3 たちあがり高 0.6	たちあがりは内傾したのちや上方にのび、端部は丸くおさめる。 受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部はやや深く、底部はやや丸い。 底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外腹3/4、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナナ調整。	クロロ回転：右方向。色調：内一淡灰青色、外一暗灰色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/2。受部上面に杆縫口縁部が壊壊。
同上	13-190	口径 9.5 受部径 11.3 器高 3.2 たちあがり高 0.4	たちあがりは内傾したのちや上方にのび、端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部はほぼ平ら。 たちあがり角度 44° 45'	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外腹2/7、回転ヘラ削り調整。底部外腹2/7(底部中央)、未調整。 底部内面中央、静止ナナ調整。 他の回転ナナ調整。	クロロ回転：左方向。色調：内一淡灰色、外一暗灰色。胎土：密。チャートを含む。焼成：良好。残存：1/2。一部反転復元。外面に自然釉付着。

器種	表面 圓版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	13-191	口径 8.7 受部徑 11.0 器高 2.9 たちあがり高 さ 0.3 たちあがり角 度 63° 15'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや 丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/3、圓版へラ削り 調整。底部外面1/3(底部中 央)、末調整。 底部内面中央、静止ナデ調 整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：灰色。 胎土：密。2mm以下の長石を含む。 チャートを含む。 焼成：良好。 残存：1/3。合成復元。底部外面に 土器片接着。外面に自然釉付着。
	13-192	口径 9.3 受部徑 11.6 器高 3.1 たちあがり高 さ 0.4 たちあがり角 度 57° 30'	たちあがりは内傾したのち端部で上方に のび、端部はやや丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/4、圓版へラ削り 調整。底部外面1/2(底部中 央)、ヘラ切り未調整。 底部内面中央、静止ナデ調 整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：灰色。 胎土：密。1mmの長石を若干含む。 チャートを含む。 焼成：良好。 残存：1/4。合成復元。 外面に自然釉付着。
	13-193	口径 9.2 受部徑 11.3 器高 2.6 たちあがり高 さ 0.4 たちあがり角 度 49° 00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸く おさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/9、圓版へラ削り 調整。底部外面2/3(底部中 央)、ヘラ切り未調整。 底部内面中央、静止ナデ調 整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰色。 胎土：密。3mm以下の長石を多く含 む。チャートを含む。 焼成：良好。 残存：ほぼ完形。受部付近一部灰か ぶり。底部外面に麻壁片付着。
	13-53	口径 9.9 受部徑 12.0 器高 2.1 たちあがり高 さ 0.5 たちあがり角 度 38° 30'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや 丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/5、圓版へラ削り 調整。底部外面2/5(底部中 央)、未調整。 底部内面中央、静止ナデ調 整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一明青色、外一暗灰色。 胎土：密。チャートを含む。 焼成：良好。 残存：1/2。反転復元。
上	13-194	口径 9.9 受部徑 12.0 器高 2.1 たちあがり高 さ 0.5 たちあがり角 度 40° 00'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや 丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/5、圓版へラ削り 調整。底部外面2/5(底部中 央)、未調整。 底部内面中央、静止ナデ調 整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一明青色、外一暗灰色。 胎土：密。3mm以下の長石を含む。 チャートを含む。 焼成：良好。 残存：1/2。反転復元。
	13-195	口径 9.0 受部徑 10.8 器高 2.1 たちあがり高 さ 0.4 たちあがり角 度 40° 00'	たちあがりは内傾したのち中位でやや上 方にのび、端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/5、圓版へラ削り 調整。底部外面3/5(底部中 央)、ヘラ切り未調整。 底部内面中央、静止ナデ調 整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：内一暗灰青色、外一明灰青色。 胎土：密。チャートを含む。 焼成：良好。 残存：1/2。
	13-196	口径 10.5 受部徑 11.8 器高 2.6 たちあがり高 さ 0.5 たちあがり角 度 19° 00'	たちあがりは上方にのび、端部は丸くお さめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面5/7、圓版へラ削り 調整。底部内面中央、静止ナデ調 整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一明灰色、外一暗灰色。 胎土：密。チャートを含む。 焼成：良好。 残存：1/2。反転復元。 ヘラ記号：底部外面にあり。
	13-197	口径 9.8 受部徑 11.5 器高 3.1 たちあがり高 さ 0.6 たちあがり角 度 32° 30'	たちあがりは内傾してのび、端部はやや 丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/5、圓版へラ削り 調整。底部内面中央、静止ナデ調 整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一灰色、外一暗灰色。 胎土：密。3mm以下の長石を含む。 チャートを含む。 焼成：良好。残存：3/5。 ヘラ記号：底部外面に「X」あり。 底部外側灰かぶり。
上	13-198	口径 9.6 受部徑 11.4 器高 3.1 たちあがり高 さ 0.8 たちあがり角 度 22° 00'	たちあがりは内傾してのび、端部は丸く おさめる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/5、圓版へラ削り 調整。底部内面中央、静止ナデ調 整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一浅灰色、外一灰色。 胎土：密。3mm以下の長石を若干含 む。チャートを含む。 焼成：良好。残存：3/4。 ヘラ記号：底部外面に「X」あり。 内面灰かぶり。
	13-54	口径 10.4 受部徑 11.2 器高 3.2 つまみ径 1.2 つまみ高 1.1 かえり高 0.4 かえり角度 38° 30'	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内 傾するかえりを付し、その端部はやや丸 くおさめる。 かえりは口縁端部以下に突出し、かえり かえりは縫隙部で接続する。 かえり角度 天井部は低く平らに近い。 38° 30'	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/2、圓版へラ削 り調整。天井部内面中央、静止ナデ調 整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。2mm以下の長石を含む。 チャートを含む。 焼成：良好。 残存：1/2。
	13-199	口径 10.4 受部徑 11.2 器高 3.2 つまみ径 1.2 つまみ高 1.1 かえり高 0.4 かえり角度 38° 30'	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内 傾するかえりを付し、その端部はやや丸 くおさめる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/2、圓版へラ削 り調整。天井部内面中央、静止ナデ調 整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。2mm以下の長石を含む。 チャートを含む。 焼成：良好。
蓋					

器種	回転 回版	法 量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備 考
杯 蓋	13-200	口徑 11.0 器高 3.1 つまみ径 1.2 つまみ高 1.1 かえり高 0.2 かえり角度 24° 30°	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部はやや鋸歯状。天井部内面中央、静止ナダ調整。	マキアゲ、ミズビキ成型。 天井部外側2/3、回転ヘラ削り調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰青色。 胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。 焼成：良好、堅敏。 残存：ほぼ完形。
	13-58	口徑 11.0 器高 3.1 つまみ径 1.2 つまみ高 1.1 かえり高 0.2 かえり角度 24° 30°	かえりは口縁端部以下に突出せず、口縁端部とかえり端部の双方で接地する。天井部は低く平ら。	他は回転ナダ調整。	
同 上	13-201	口徑 11.3 残存高 2.7 つまみ径 1 つまみ高 0.3 かえり高 0.3 かえり角度 39° 00°	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部は丸くおさめる。	マキアゲ、ミズビキ成型。 天井部外側1/3、回転ヘラ削り調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：浅橙色。 胎土：密。5mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。
	13-59	口徑 11.3 器高 3.5 つまみ径 1.3 つまみ高 1.1 かえり高 0.3 かえり角度 39° 00°	かえりは口縁端部以下に突出し、かえり端部で接地する。天井部はやや低くやや丸い。天井部外側中央に擬宝珠様つまみを付すと思われる。	天井部内面中央、静止ナダ調整。 他は回転ナダ調整。	焼成：不良。 残存：8/9。
同 上	13-202	口徑 10.5 器高 3.5 つまみ径 1.3 つまみ高 1.1 かえり高 0.3 かえり角度 41° 00°	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部は丸くおさめる。	マキアゲ、ミズビキ成型。 天井部外側3/4、回転ヘラ削り調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰。
	13-60	口徑 10.5 器高 3.5 つまみ径 1.3 つまみ高 1.1 かえり高 0.3 かえり角度 41° 00°	かえりは口縁端部以下に突出し、かえり端部で接地する。天井部はやや低くやや丸い。天井部外側中央に擬宝珠様つまみを付すと思われる。	天井部内面中央、静止ナダ調整。 他は回転ナダ調整。	胎土：密。4mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。 焼成：良好。 残存：8/9。
同 上	13-203	口徑 11.1 残存高 2.5 つまみ径 1 つまみ高 1 かえり高 0.3 かえり角度 40° 15°	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部はやや丸くおさめる。	マキアゲ、ミズビキ成型。 天井部外側3/4、回転ヘラ削り調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一灰色、外一淡灰色。 胎土：密。3mm以下の長石をわずかに含む。
			かえりは口縁端部以下に突出せず、口縁端部とかえり端部の双方で接地する。天井部は低く平らに近い。天井部外側中央に擬宝珠様つまみを付すと思われる。	天井部内面中央、静止ナダ調整。 他は回転ナダ調整。	焼成：良好。 残存：1/2。合成立復元。 天井部外側灰かぶり。
同 上	13-204	口徑 10.8 残存高 2.1 つまみ径 1 つまみ高 0.2 かえり高 0.2 かえり角度 28° 30°	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面に内傾するかえりを付し、その端部はやや丸くおさめる。	マキアゲ、ミズビキ成型。 天井部外側5/7、回転ヘラ削り調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰。
			かえりは口縁端部以下に突出せず、口縁端部で接地する。天井部は低く平ら。	天井部内面中央、静止ナダ調整。 他は回転ナダ調整。	胎土：密。2mm以下の長石をわずかに含む。 焼成：良好。 残存：1/3。合成立復元。 内面灰かぶり。
杯 身	13-205	口徑 9.6 残存高 3.7	部体は上外方にのび、口縁部は外反して上外方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。底部はやや深く、底部はやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成型。 底部外側3/4、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰色。 胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成：良好。
杯 蓋	13-206	口徑 10.0 残存高 2.1 つまみ径 1 つまみ高 0.3 かえり高 0.3 かえり角度 40° 45°	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面におさめられるかえりを付し、その端部は丸くおさめる。	マキアゲ、ミズビキ成型。 天井部外側2/3、回転ヘラ削り調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。
			かえりは口縁端部以下に突出し、かえり端部で接地する。天井部は低く平ら。	天井部内面中央、静止ナダ調整。 他は回転ナダ調整。	胎土：密。2mm以下の長石を含む。 焼成：良好。 残存：1/4。反転復元。
同	13-207	口徑 20.8 蓋部径 19.0 残存高 10.8	口縁部は上外方にのびたのち、内彎して上外方にのびる。口縁端部は内傾する凹面を成し、内面であま段を成す。端部断面は方形に近い。肩部は外下方に下る。肩部以下欠損。頸部中位上方に2条の純い沈線をめぐらす。	マキアゲ、ミズビキ成型。 肩部外側、タタキ。肩部内面、背面波タタキ。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：内一灰青色、外一灰色。胎土：密。2mm以下の長石を含む。チャートを含む。 焼成：良好。残存：口縁部の1/5以下。反転復元。口縁部内面灰かぶり。口縫部外面に自然釉付着。

第5章 考 察

—ひとつ池西窯出土須恵器の編年的位置付け—

第1節 窯跡資料に基づく編年の補強作業方法

近年、陶邑窯跡群東端をなす大阪狭山市域内の窯跡群における発掘調査が増加しており、窯跡の破壊と引換に、はからずも須恵器編年を補強しうる窯跡資料が充実しつつある。

その資料をもとに、これらの杯身の法量と形態を陶邑窯跡群の代表的な窯跡資料と比較し、主としてTK 43型式～TK 209型式の杯身の生産状況をあきらかにして、陶邑の須恵器編年を補強すべく検討を行ってきた¹⁾。

今もって期待される床式編年を指向しつつも、結果として緻密な型式編年を提示するにとどまり、各段階間の時間差を明確に追確認することが難しい中村編年に依拠することができず、あえて1窯跡1型式に留める田辺編年を用いる研究者が多いことからも、須恵器編年の補強作業が急務であると理解される。

TK 43号窯資料²⁾中には、各研究者がそれぞれ設定する概念的な形態に照合するならばTK 43型式に判断される須恵器と、ともすればTK 209型式に峻別しうる須恵器が混在している。よって、どのような窯跡資料をもってTK 43型式と認知すればよいかを具体的に提示するために、TK 43型式の杯身と判断しうる形態・法量の限界値をTK 43号窯資料に基づいて設定し、TK 43型式・TK 209型式の須恵器を生産したと考えられる各窯跡の資料がこの限界値に対応するか否かを確認する作業を以前に行った³⁾。

その結果、TK 118・ISS・S13が概ねこの限界値内におさまり、TK 312・TK 230-II・S12・TMS・TMNは形態・法量の両方、もしくはそのどちらか一方が、限界値内におさまらなかった（本市域内の窯跡略号は第6表を参照されたい）。

典型的なTK 209型式の法量・形態を有する杯身のみを産出する須恵器窯は、現段階において調査例がなく、それのみが検出される焼成床面の存在もいまだ実証されていない。ゆえに、このような状況下における窯跡資料において、層序的に分離不可能な一括遺物をその形態もしくは法量をもって分類し、分類された遺物間に時期差を考えることには肯首しがたい。この理由から、上記の限界値内ののみにおさまる一括の窯跡資料をもってTK 43型式とするならば、限界値内ののみにとどまらない上記の一括の窯跡資料をTK 209型式と理解すべきである。つまり、TK 209型式とすべき段階に生産された杯身はTK 43型式の杯身と異なった法量・形態を探るのではなく、TK 43型式的な形態・法量を有する杯身とともに、法量の縮小化・たちあがりの内傾化と低化が進行したTK 209型式的な形態・法量を有する杯身が生産されていた窯跡から検出される一括資料をもって、TK 209型式と

捉まえるべきであろう。

標式とすべき窯跡資料の本来の取扱われ方は、ある型式を表象するに好都合な、一括遺物の内の一部の資料をもって、その標式遺物群を理解するのではなく、型式差を内包するよううけとれたとしても、その層序的一括性を最重要視して「一括遺物=標式遺物」と理解せねばならない。

たとえば、消費地遺跡において検出された遺物の内の多くがTK 43型式的な法量・形態を有していたとしても、即、その構造をTK 43型式に該当する時期に比定することはむづかしい。なぜならば、TK 209型式とすべき段階にもTK 43型式的な法量と形態をもつ杯身は多量に生産されていると、生産地での一括資料から判断されるからである。

第6表 大阪狭山市域の須恵器窯跡略号対照表（既調査分）

窯跡名・層名	略号	窯跡名・層名	略号
山本1号窯	MT 252	狭山池2号窯 下層灰原 中層灰原 上層灰原	S I 2 S I 2-1 S I 2-2 S I 2-3
太満池南窯 灰原	T M S		
太満池北窯 燃焼部第1次床面	TMN TMN-1		S I N S I N-1
燃焼部第2次床面	TMN-2		S I N-2 S I N-3
池尻新池南窯 下層灰原 上層灰原 下部灰原層	I S S I S S-1 I S S-2 I S S-B	東池尻1号窯 第1次焼成床面 第2次焼成床面 第3次焼成床面 灰原	H I 1 H I 1-1 H I 1-2 H I 1-3 H I 1-B
今熊1号窯 第1次焼成床面	I K 1 I K 1-1		
第2次焼成床面	I K 1-2		
第3次焼成床面	I K 1-3		
ひつ池西窯			HTW
狭山池3号窯 下層灰原 上層灰原	S I 3 S I 3-1 S I 3-2	上部下層灰原 上部上層灰原 下部下層灰原 下部上層灰原	HTW-A 1 HTW-A 2 HTW-B 1 HTW-B 2

逆に、消費地遺跡において検出された遺物の内多くのがTK 209型式的な法量・形態を有していた場合は、その遺構をTK 209型式に該当する時期に比定することは可能であると考えられる。なぜならば、TK 43型式とすべき段階にはTK 209型式的な法量と形態の杯身は全く生産されておらず、TK 217型式とすべき段階ではH 11のような、TK 217型式的な（飛鳥I的な）法量と形態をもつ杯身のみを生産する窯が存在し、その一括遺物中にはTK 209型式的な法量と形態の杯身はほとんど含まれていないからである⁴⁾。

このような状況を検証するために次節においては、TK 217型式的な杯身を産出した窯跡資料の比較検討を行うと同時に、その細分が可能であるかを考察する。

第2節 蓋身逆転期の窯跡資料の比較

陶邑窯跡群内における、数量が比較的豊富な当該期の窯跡資料としては、TG10-I・TG32・TG11-II・TG206・TG61の各窯跡から出土した資料がある⁵⁾。陶邑窯跡群東端に位置する大阪狭山市域の窯跡群では、HTW・H11・SINの窯跡資料があるが現在までに整理作業が完了したHTW・H11の2基の資料が有用である。

これらの資料で杯Hの杯身の形態と法量を比較し、当該期の窯跡資料が消費地における編年とどのように対応しているかを考えてみたい。

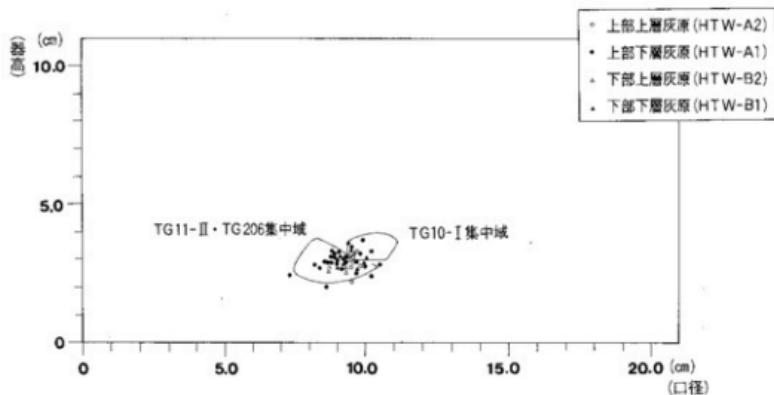
なお、杯身の形態比較はたちあがりの角度と高さを比較要素とした。たちあがり高は、たちあがり外面基部からその端部までの鉛直方向の距離を計測して、図中の縦軸とした。たちあがり角度は、たちあがり外面基部を中心点として鉛直方向を0°とし、この鉛直軸から、たちあがり外面基部とその端部を結んだ直線までの角度を計測して、これを図中の横軸とした。また、1個体中において、たちあがり高もしくは、たちあがり角度にバラツキが認められる場合はその平均値を探った。

また、杯身の法量は口径・器高ともに完全な計測が可能なもののみに限定して、図中にドットした。

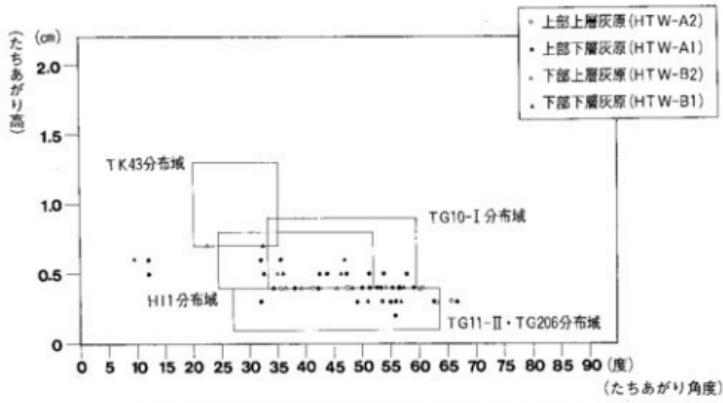
(1) HTWの杯身法量とたちあがり

HTW資料は、A1・A2・B1・B2の4層の灰原層に包含されていた資料である。杯身の法量とたちあがりの形態を灰原ごとに確認するために、グラフ中ではそれぞれ異なったマークでドットした（第14図・第15図）。

HTWの杯身法量は、口径が7.3cm～10.5cm、器高が2.0cm～3.7cmを測る。このためTG10-I集中域（器高3.0cm／口径9.4cm、器高3.6cm／口径9.4cm、器高3.6cm／口径11.1cm、器高3.0cm／口径10.7cmの各点を結んだライン内）とTG11-II・TG206集中域（器高2.6cm／口径7.4cm、器高3.3cm／口径7.8cm、器高3.8cm／口径8.2cm、器高3.6cm／口径8.8cm、器高3.0cm／口径9.5cm、器高2.7cm／口径10.4cm、器高2.3cm／口径9.7cm、器高

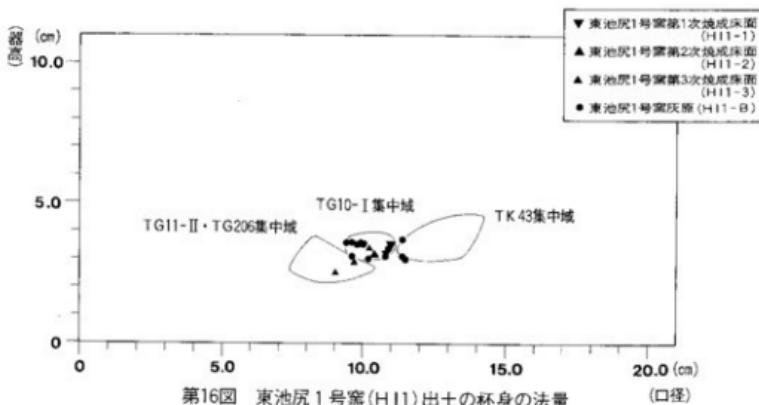


第14図 ひつ池西窯(HTW)出土の杯身の法量

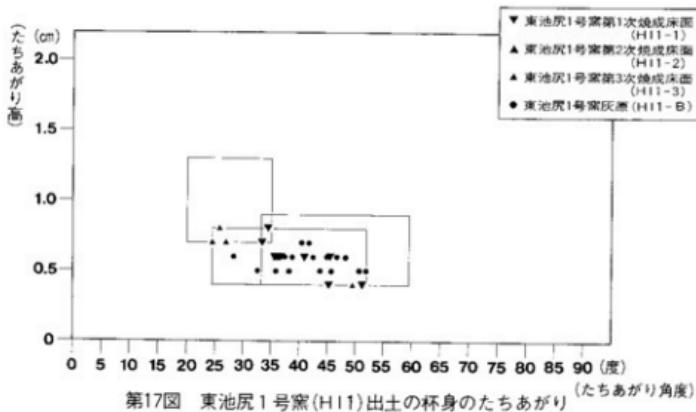


第15図 ひつ池西窯(HTW)出土の杯身のたちあがり

2.2cm / 口径8.1cmの各点を結んだライン内)の両方の集中域にまたがった分布を示している。このようにHTWの杯身法量は、TG 11-II・TG 206集中域からTG 10-I集中域にわたる範囲に分布し、その最大と最小には幅があるものの、多くの資料は口径約8cm~10.5cm・器高2.5cm~3.5cmの帯域に最も集中している。すなわち、HTW杯身の法量は、TG 10-I集中域とTG 11-II・TG 206集中域の端境付近に中心をもつ分布を示しているといえよう。なお、HTW-A1の法量に比して、HTW-A2・B1・B2のそれは、



第16図 東池尻1号窯(H11)出土の杯身の法量



第17図 東池尻1号窯(H11)出土の杯身のたちあがり

この集中域の端境にまとまった分布となっている。

H T W の杯身のたちあがり形態は、たちあがり高が0.2cm～0.7cmを測り、たちあがり角度が9°30'～66°30'を計測する。よって、たちあがり高が10°前後を示すA1の2点とB1の1点を除けば、H11分布域（たちあがり高0.4cm～0.8cm / たちあがり角度24°30'～52°00'）・TG10-I分布域（同高0.4cm～0.9cm / 同角度33°00'～59°30'）とTG11-II・TG206分布域（同高0.1cm～0.4cm / 同角度27°00'～63°30'）にまたがった分布を示し

ている。とくにたちあがり高は、TG10-I分布域の上半部分にはドットがなく、TG11-II・TG206分布域との端境付近を中心とした分布となっている。

(2) H I 1 の杯身法量とたちあがり

H I 1 資料には、各焼成床面上検出資料のH I 1-1・H I 1-2・H I 1-3と、灰原資料のH I 1-Bがあり、層序的に先後関係を確認しうる窯体資料である。ゆえに、図中では異なったマークでドットをした（第16図・第17図）。

H I 1-1・2の杯身法量は、ほぼTG10-I集中域内におさまる。これに対して、最終ベースであるH I 1-3から検出される杯身の法量は、TG10-I集中域とTG11-II・TG206集中域に広がっている。これは、H I 1-3焼成段階の生産時には、杯身法量が縮小化の傾向にあったことを示している。

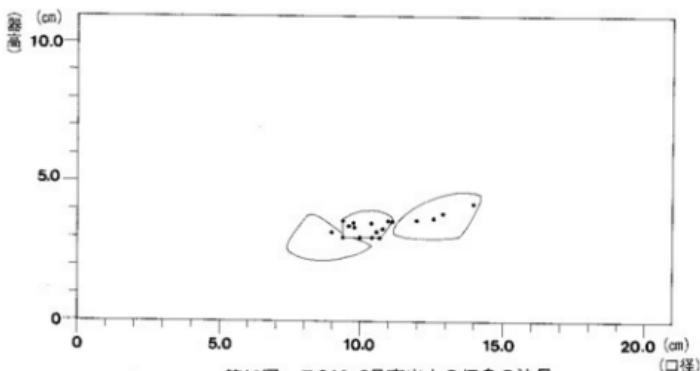
H I 1 の杯身のたちあがり形態は、たちあがり高が0.4cm～0.8cmを測り、たちあがり角度が $24^{\circ}30'$ ～ $52^{\circ}00'$ を測る。H I 1 の杯身にはTG11-II・TG206分布域に入るようなたちあがり高が低いものが多く、TG10-Iの分布に近似したたちあがり形態といえるが、TG10-Iに較べてたちあがり角度がややきつい傾向にあるため、便宜上、このたちあがり形態の分布をH I 1 分布域として設定した⁶⁾。

(3) TG10-I の杯身法量とたちあがり

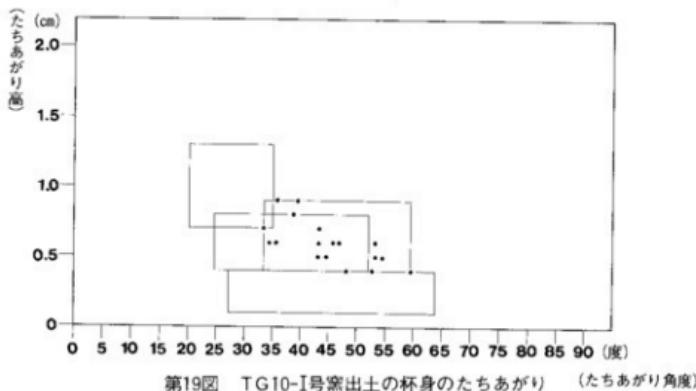
TG10-I 資料は、焼成床面を含む窯体内と灰原から検出された資料である。しかし、報告書ではこれらが一括して扱われているために、各焼成床面ごとに杯身法量と形態を追確認することはできない。よって、図中では单一マークを用いた（第18図・第19図）。

TG10-I の杯身法量は、その計測値が使用可能な18点のうちの4点がT K 43集中域（器高3.4cm / 口径11.3cm、器高3.0cm / 口径13.4cm、器高4.6cm / 口径14.2cm、器高4.6cm / 口径13.2cmの各点を結んだライン内）にあり、1点がTG11-II・TG206集中域内にある他は、ほぼ近似した値を示してTG10-I集中域を形成する。

TG10-I の杯身のたちあがりは、たちあがり高が0.4cm～0.9cmを、たちあがり角度が $33^{\circ}00'$ ～ $59^{\circ}30'$ を計測する。TG11-II・TG206分布域に入るような退化しきった、たちあがりをもつ杯身はTG10-Iにはなく、このたちあがりの形態の限界値内をもって、TG10-I分布域と認知しえよう。



第18図 TG10-I号窯出土の杯身の法量

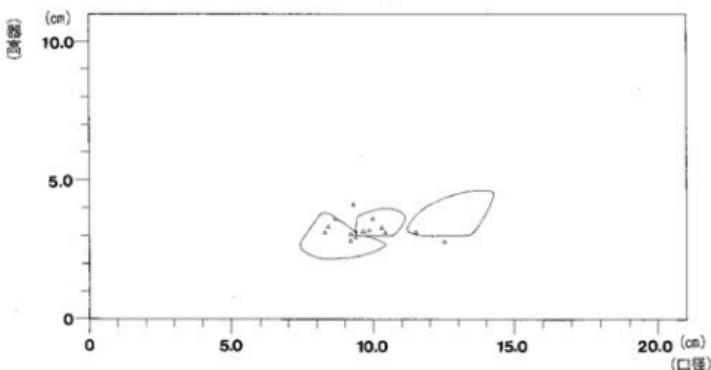


第19図 TG10-I号窯出土の杯身のたちあがり (たちあがり角度)

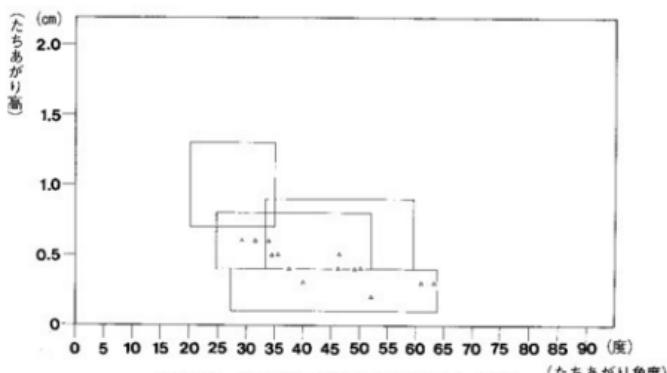
(4) TG32の杯身法量とたちあがり

TG32資料は、窯体内と灰原から検出された資料であるが、そのほとんどは灰原検出であるとされている。この資料も検出箇所および層序による分割が不可能であるため、図中では単一マークを用いてドットした(第20図・第21図)。

TG32の杯身法量は、13点のうちの2点がTK43集中域付近にある他は、TG10-I集中域とTG11-II・TG206集中域の両集中域にわたって分布する。



第20図 TG 32号窯出土の杯身の法量

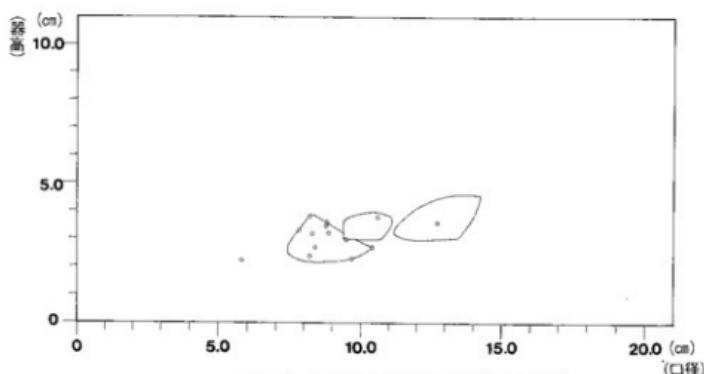


第21図 TG 32号窯出土の杯身のたちあがり

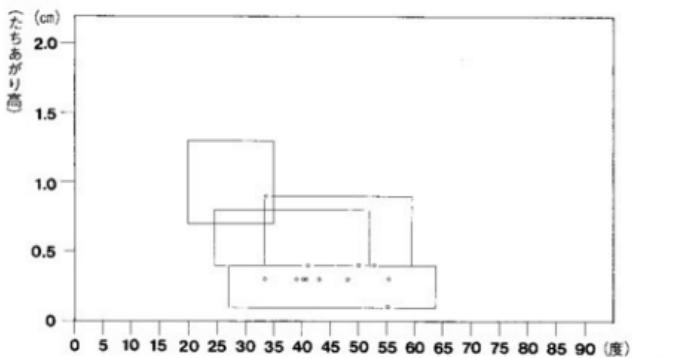
TG 32の杯身のたちあがり形態は、H 11分布域とTG 10-I分布域からTG 11-II・TG 206分布域にかけて分布し、資料点数が14点と少ないために厳密に確認はできないがHTWと同様に両分布域の端境付近を中心とする分布であると考えられる。

(5) TG 11-IIの杯身法量とたちあがり

TG 11-II資料は、窯体内と灰原から出土した須恵器のうち、報告が行われた窯体内的



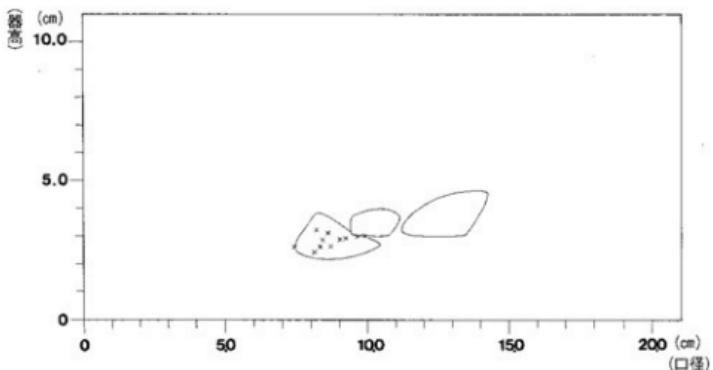
第22図 TG11-II号窯出土の杯身の法量



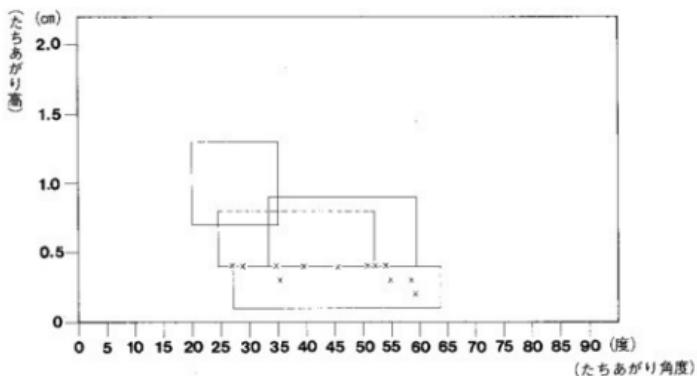
第23図 TG11-II号窯出土の杯身のたちあがり (たちあがり角度)

焼成部・燃焼部検出資料に限定されてしまい、灰原出土資料はTG11-I灰原との分割・分層がなされなかったことにより使用不可能となっている。また、焼成床面は全く攪乱をうけていない床面が2枚検出されているが、残念ながら報告された出土遺物にその明示がなく有効に活用しえない。よって、TG11-II資料を層序ごとに分割できず、図中においては単一マークでドットすることとした(第22図・第23図)。

TG11-IIの杯身法量は、器高3.6cm / 口径12.7cmを測る1点がTK43集中域内にあり



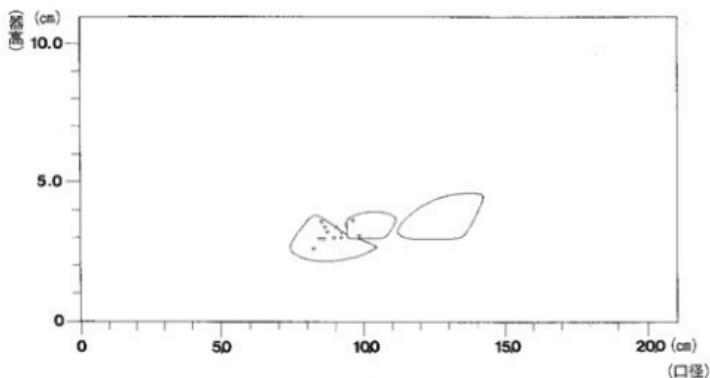
第24図 TG206号窯出土の杯身の法量



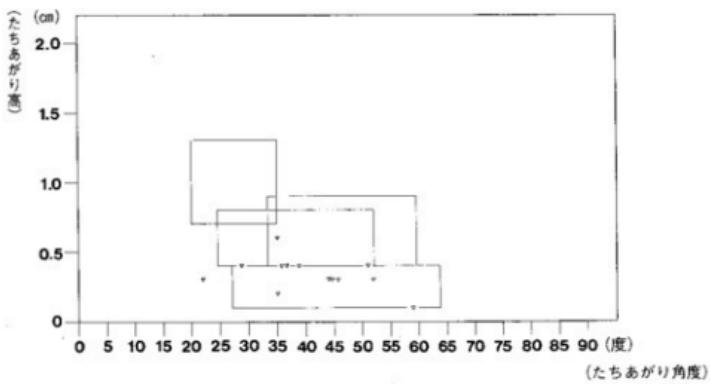
第25図 TG206号窯出土の杯身のたちあがり

器高 3.6cm / 口径 10.6cm を測る 1 点が TG10-I 集中域内にあり、器高 2.2cm / 口径 6.8cm を測る 1 点が全く域外にあるほかは、いずれも器高 2.3cm~3.8cm で口径 7.4cm~10.4cm を測る TG11-II・TG206 集中域内の内にあり、これを形成する。

TG11-II の杯身のたちあがり形態は、TK43集中域内におさまる法量をもった 1 点が 0.7cm を測るたちあがり高を有し、法量計測不可能な 1 点が 0.9cm を測るたちあがり高を有するほかは、いずれも 0.4cm 以下を計測し、TG11-II・TG206 分布域内にある。



第26図 TG61号窯出土の杯身の法量



第27図 TG61号窯出土の杯身のたちあがり

発掘調査時にその完存が確認されている2枚の焼成床面のうち、第1次焼成床面上にわずかに片付け残されていた遺物が法量・形態ともにTK43集中域・分布域におさまる先の2点であり、最終ベースである第2次焼成床面上において徹底的な片付けが行われなかつた結果、そこに多量に遺存した遺物がその2点以外の資料であると推定するならば非常に理解しやすい。報告からは追確認しないことであるが、仮にそうであるならば、法量・形態ともに一定のまとまりをもつ後者の資料の一括性は高く評価できよう。

(6) TG 206の杯身法量とたちあがり

TG 206資料は、燃焼部と灰原から検出された資料である。この資料も報告書では一括して扱われているので、図中では单一マークを用いてドットした（第24図・第25図）。

TG 206の杯身法量は、器高2.4cm～3.2cm・口径7.4cm～9.9cmを測り、TG 11-IIと似通った分布を示している。このため、TG 11-IIとTG 206の両資料をもって、TG-II II・TG 206集中域を設定した。

TG 206の杯身のたちあがり形態は、そのいずれもが、たちあがり高0.4cm以下を計測する。この資料とTG 11-II資料をあわせてTG 11-II・TG 206分布域（たちあがり高0.1cm～0.4cm / たちあがり角度27°00'～63°30'）を設定した。

(7) TG 61の杯身法量とたちあがり

TG 61資料は、窯体内と灰原から検出された資料で、大半が窯体内検出とされている。焼成床面は部分的に2枚の重なりが認められている。この資料も他と同様に、各焼成床面・燃焼部・灰原と、それぞれ検出部位・検出層位が明示されていないために、一括して取扱わざるをえない。よって、図中では杯身の法量と形態の値を单一マークで記した（第26図・第27図）。

TG 61の杯身法量は、器高2.6cm～3.6cm・口径8.2cm～9.8cmを測り、TG 10-I集中域に3点がかろうじて入り、11点がTG 11-II・TG 206集中域にある。

TG 61の杯身のたちあがり形態は、1点がたちあがり高0.6cmを測り、12点がたちあがり高0.4cm以下を計測し、このうち11点がTG 11-II・TG 206分布域内にある。

以上のように、杯身の形態と法量を数値化し、各窯跡資料ごとにその傾向を確認した。その結果、これらの窯跡資料を概ね次の3つのグループに分類することができると考えられる。

①法量がTG 10-I集中域に集中し、たちあがり形態がTG 10-I分布域・H I 1分布域内に分布する資料。

②法量がTG 10-I集中域とTG 11-II・TG 206集中域との端境付近を中心として、その両集中域にかけて集中し、たちあがり形態がTG 10-I分布域・H I 1分布域とTG 11-II・TG 206分布域との端境付近を中心として、両分布域にかけて分布する資料。

③法量がTG 11-II・TG 206集中域に集中し、たちあがり形態がTG 11-II・TG 206分布域内に分布する資料。

この3グループには、①にTG 10-IとH I 1が、②にHTWとTG 32が、③にTG 11-IIとTG 206とTG 61がそれぞれ分類される。これを順に第1類・第2類・第3類と仮に呼称する。

蓋身逆転期の杯Hの法量・形態は、その前段階と比して著しい縮小・退化の傾向にあり、その器形の矮小化は、杯Hの生産が完全に行われなくなる段階に至るまでの間、継続的に進行したと理解されよう。この型式変化を、時間軸上において把握することが容認されるのであれば、先の窯跡資料の分類は、法量とたちあがり形態の数値の集中・分布傾向から「第1類→第2類→第3類」の順に先後関係を与えることが可能であろう。

第3節 まとめ

今回は主として、蓋身逆転期のいわゆるTK 217型式的な窯跡資料の杯Hを、その法量とたちあがり形態から比較した。その結果、前述のような3グループに分類され、第1類から第2類へ、さらに第3類へと、各類間で認められる一定幅を有する型式変化は、そのまま、時間軸上に置換されるであろうと思量する。

ゆえに、杯Hの縮小化と退化が当該期に極端に進行した結果、最終的には杯Hが消滅し杯G等のたちあがりのない杯類のみの生産へと移行したとするならば、その経過は「第1類：TG10-I・H11」→「第2類：HTW・TG32」→「第3類：TG11-II・TG206・TG61」と、窯跡資料において表出していると考えるのである。しかしながら、この窯跡資料の先後関係が認められたとしても、いわゆる窓式編年の範疇を脱せず、層序的な確証を得た床式編年にはなりえてない。良好な遺存状態の窯跡を、細心をはらって綿密に調査し、そのありのままが報告された資料が待たれるところである。

ところで、先の窯跡資料における杯Hと他の器種の伴出状況を確認すると、以下のようである。

第1類のTG10-I・H11では、無蓋高杯には長脚2段のものと短脚のものとがともに出土している。このうち長脚2段の無蓋高杯は、脚底径15cm前後の比較的大型のものは脚部に長方形スカシもしくはスリット状スカシがあけられている。長脚2段の脚底径10cm前後の比較的小型のものは、TG10-Iではスカシがなく、H11ではスカシのあるものとないものとに分かれる。

第2類のHTWでは長脚2段の脚部をもつ小型の無蓋高杯のみが出土し、これにはスカシがない。TG32では短脚の無蓋高杯のみが出土し、長脚2段の高杯はみられない。

第3類のTG206・TG61では、長脚2段の無蓋高杯はみられず、短脚の高杯のみが出土している。なお、TG11-IIには高杯の出土が報告されていない。

このように、長脚2段と短脚の無蓋高杯が共伴して生産される第1類の段階から、短脚の無蓋高杯のみを生産する第3類の段階への移行が認められる。その間に移行期として、第2類の段階が存在している。

つぎに、これらの資料の杯Hと杯Gとの伴出状況を確認しておきたい。

第1類のTG10-Iでは、杯Gの出土が報告されておらず、杯Hのみを生産したと考え

られる。H I 1では杯Hに杯Gが少量伴出する。H I 1の杯Gは器高3.4cm~4.0cm / 口径8.7cm~10.8cmを測る。なお、杯G蓋はH I 1からは検出されていない。

第2類のHTWでは、杯H蓋55点 / 杯H身66点に対して、杯G蓋36点 / 杯G身23点を数えることができ、その最大点数をとれば杯Hと杯Gの生産比率はほぼ2:1となる。第1類の段階に比べて第2類の段階では杯Gの増産が行われ、この状況が遺棄製品の個体数の比率に反映したものと解される。HTWの杯Gは器高3.1cm~4.6cm / 口径8.0cm~10.9cmを計測し、法量の全体の傾向においてはH I 1とそれほど差異は認められず、その内に縮小化した法量をもつものが含まれることがわざかに指摘されるにとどまる。HTWの杯G蓋の天井部に付されるツマミは、若干扁平ぎみのものも少量含まれるもの、概ね宝珠形を呈しているといえよう。

杯Hが第2類に分類されるTG32の資料には、杯Gは含まれていない。

第3類のTG11-IIでは窯体内検出資料の、杯H蓋7点 / 杯H身14点と杯G蓋4点 / 杯G身3点が報告されている。TG11-IIには2枚の焼成床面が検出されており、明晰にTK43集中域・分布域におさまる数値を計測する杯蓋2点 / 杯身2点が、報告に記述はないものの、第1次焼成床面上検出資料である可能性が高い。よって、この各2点を除いて、最終ベース上における杯Hと杯Gの最大点数を比較すると3:1となり、第2類に比しての顕著な増産傾向は確認できない。TG11-IIの杯Gは器高3.5cm~3.6cm / 口径10.2cm~10.6cmを測り、とくに口径において、その拡大化傾向が看取される。つまり、第1類・第2類が9cm以下の口径の杯G身を含むのに対して、第3類のTG11-IIではその口径が10cm前後の計測値に安定しているといえる。また、TG11-IIの杯G蓋の天井頂部に付されるツマミはHTWとくらべて、やや扁平にくずれた宝珠形を呈している。

TG206では、杯H蓋8点 / 杯H身12点に対して、杯G蓋8点 / 杯G身4点がそれぞれ報告されている。報告された資料が検出遺物全体の比率を反映しているならば、杯Hと杯Gの生産比率は3:2となる。第1類・第2類と比して、杯Gの増産傾向が当該資料には認められる。TG206の杯Gは器高3.1cm~3.6cm / 口径8.5cm~9.3cmを測り、TG11-IIのような口径拡大安定化の傾向は見てとれない。杯G蓋の天井頂部に付されたツマミは、TG11-IIのそれよりもさらに扁平な宝珠形を呈している。

なお、杯Hが第3類に分類されるTG61には、杯Gは報告されていない。

以上のように、杯Hと杯Gの双方を生産する窯での杯Gが占める比率は、第1類→第2類→第3類と徐々に大きくなっていく。またこの順に、杯G蓋のツマミは宝珠形の扁平化が進行しているようである。この状況は、消費地遺跡における編年にはほぼ合致するものである。つまり、第1類=飛鳥I、第2類=飛鳥II、第3類=飛鳥IIIというように、杯Hから導き出した各3分類に属する資料の杯Gが、その出土数量・法量・形態において、消費地遺跡での編年観⁷⁾とほぼ等しい変化をみせているのである。

【飛鳥I:10cm~11cm・飛鳥II:9cm前後・飛鳥III:10cm前後】といった、小槻田宮推

定地等の消費地から出土した資料にみられる杯Gの口径の変化⁸⁾は、本稿で検討を行った窯跡資料中では、第1類・第2類・第3類の各類間において顕著に認めることができなかった。

しかしながら、従来TK217型式に一括して把握されてきた、あるいはII型式6段階・III型式1段階・III型式2段階の各段階に形態をもってのみしか把握できなかつた、蓋身逆転期の窯跡資料を、本稿では杯Hの法量・形態をもって分類し、稚拙ながらも実際の窯の操業に即した編年試案を提示するにいたつた。当該期の杯Hと杯Gの各々のみを産した、それぞれの焼成床面が明瞭に分層された例を知りえないために、杯Hのみを産出する窯・杯Hと杯Gが産出する窯・杯Gのみを産出する窯がある程度の重複する期間をもって併存したと理解してこの拙い考察を進めてきたが、いかがであろうか。ご批判を仰ぎたい。

なお、本稿の作業を進めるに際して、藤田和尊氏、尼子奈美枝氏、渡辺邦雄氏、濱口芳郎氏、木許守氏、富田尚夫氏、永井正浩氏、梅本康広氏、木澤直子氏の諸氏から貴重なご助言をいただいた。文末ながら記して深謝いたします。

註記

- 1) a : 植田隆司「池尻新池南窯出土須恵器の基準資料との比較」「池尻新池南窯発掘調査報告書—陶邑窯群の調査—」『大阪狭山市文化財報告書』7、1992年
b : 同「狹山池2号窯・狹山池3号窯・東池尻1号窯・狹山池北堤窯出土須恵器の基準資料との形態・法量比較」「狹山池2号窯・3号窯出土遺物整理報告」「狹山池調査事務所平成4年度調査報告書」1993年
c : 同「今熊1号窯（IK1号窯）発掘調査報告」「大阪狭山市内遺跡群発掘調査概要報告書4」「大阪狭山市文化財報告書」12、1994年
- 2) a : 田辺昭三「陶邑古窯址群I」「平安学園考古学クラブ研究論集」第10号、1968年
b : 同「須恵器大成」1981年
c : 野上丈助「陶邑V」「大阪府文化財調査報告書」第33輯、1982年
- 3) 前出註文献1-a・1-b
- 4) a : 前出註文献1-b
b : 植田隆司「東池尻1号窯発掘調査報告」「狹山池調査事務所平成4年度調査報告書」1993年
- 5) 中村浩「陶邑II」「大阪府文化財調査報告書」第29輯、1979年
- 6) 前出註文献1-b
- 7) 西弘海「七世紀の土器の時期区分と型式変化」「土器様式の成立とその背景」1986年
- 8) 前出註文献7

第7表 蓋身逆転期の窯跡資料分類表

分類	窯跡名	杯 H		杯 G	無蓋高杯	備考
		たちあ がり高	法量			
第1類	TG10—I H I I S I N	0.4cm 0.9cm	TG10—I 集中域内	•なし •あり(少數) ツマミ宝珠形	•長脚2段 スカシ有 スカシ無 •短脚	飛鳥Ⅰ併行
第2類	HTW (TG32)	0.9cm 以下	TG10—I 集中域内 TG11—II TG206 集中域内	•なし •あり (杯H:杯G=2:1) ツマミ宝珠形 やや扁平な宝珠形のもの有	•長脚2段 スカシ無 •短脚	飛鳥Ⅱ併行
第3類	TG11—II TG206 (TG 61)	0.4cm 以下	TG11—II TG206 集中域内	•なし •あり (杯H:杯G=3:2~3:1) ツマミは扁平な宝珠形	•短脚のみ	飛鳥Ⅲ併行 か?

調査と整理を終えて

ここに、ようやくにして本報告書の完成をみるに至った。本書を隅々までご検索いただければおわかりになると思うが、ひとつ池西窯の報告書作成作業はやや遅滞気味なものとなり、不本意ながらも本書の発刊は本来の期日を過ぎて行わざるをえなかつた。本窯の調査終了後に大規模な発掘調査が続き、それらの整理・報告を並行して進めねばならなかつたとはいえ、本報告書作成の遅滞は間違いなく許されることではない。ひとえに、担当者の能力の限界に起因するものであると自戒する。

しかしながら、寒風吹きすさぶ中で発掘調査に参加していただいた方々や、整理作業にひたすら打込んでくれた調査員・調査補助員達の努力、数々のご協力とご助言を下さった多くの方々のおかげをもって、学術的資料としてほぼ使用に耐えうる記録と報告ができるたと考える。あらためて、感謝の意を表したい。

ところで、本窯の灰原を発掘する際にもっとも注意を払つたことは、その分層と層序毎の遺物の検出であった。部位によっては比較的厚い堆積がみられるものの、B1の上方やB2などの灰土層の厚みはきわめて薄く、層序ごとの掘削はなんとかできたものの、その微細な標高差をあらわす等高線図は作成しえなかつた。ご容赦いただきたい。

現在までに各地で行われた窯跡の発掘調査では、灰原の分層はなされても、その層ごとの遺物検出はほとんど報告されていない。本窯の灰原も、通常であれば一括して掘削し、各層ごとに報告を行つた遺物もまとめて“灰原出土”と報告を行つたとしても、何ら指摘を受けることはないであろう。

しかし、その層がいかなる意味をもつものかを現段階において調査担当者が判断しえなくとも、本来は、各層ごとの検出をこころみ、各層毎に出土遺物を報告するべきであると確信する。それは、窯体内的焼成床面についても同様であるべきで、たとえ、部分補修とともにう焼成床面の追加にとどまつていようとも、床面の違いがあきらかに認められるのであれば、各々の焼成床面ごとに遺物を検出し、そのまま遺物の報告を分けて行うべきであろう。焼成床面ごと・灰原の灰土層ごとの遺物の型式差が看取されないようであってもやはりそうするべきであろう。窯跡資料として、各層序ごとに遺物を分割して扱うか否かはその資料を利用する者が判断すれば良いことである。ちなみに、本窯の資料も、本書の考察の段階では、灰土層ごとの杯身の法量・形態差を認めえなかつたために、最終的には一括して扱つている。

今後、窯跡の発掘調査を担当される方へ、検出位置・検出層位ごとに可能なかぎり明示した遺物報告をお願いして本書の結びとしたい。

第8表

報告書抄録

ふりがな	ひついけにしがま							
書名	ひつ池西窯							
副書名	陶邑窯跡群の調査							
シリーズ名	大阪狭山市文化財報告書							
シリーズ番号	10							
編著者名	植田隆司							
編集機関	大阪狭山市教育委員会							
所在地	〒589 大阪府大阪狭山市狭山1丁目2384-1 TEL.0723-66-0011							
発行年月日	西暦 1993年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
陶邑窯跡 群 ひつ 池西窯	大阪府大阪狭山 市 金剛	27231	一	34度 29分 47秒	135度 33分 40秒	範囲確認 19910214～ 19910221 本調査 19911118～ 19920114	3 130	池岸護岸 改修工事 に伴う事 前調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な造構	主な遺物	特記事項			
陶邑窯跡 群 ひつ 池西窯	生産遺跡	古墳時代 終末期 (7世紀 前葉～中葉)	須恵器窯灰原：4 層、溝：2条	須恵器：杯H(蓋 ・身)・杯G(蓋 ・身)・壺・長頸 壺・短頭壺・壺・ 壺蓋・平瓶・高杯 ・甕	4層からなる灰原 を検出。杯蓋身逆 転期の良好な窯跡 資料をえる。			

図版

図版1 上空よりのぞむひつ池（航空写真）



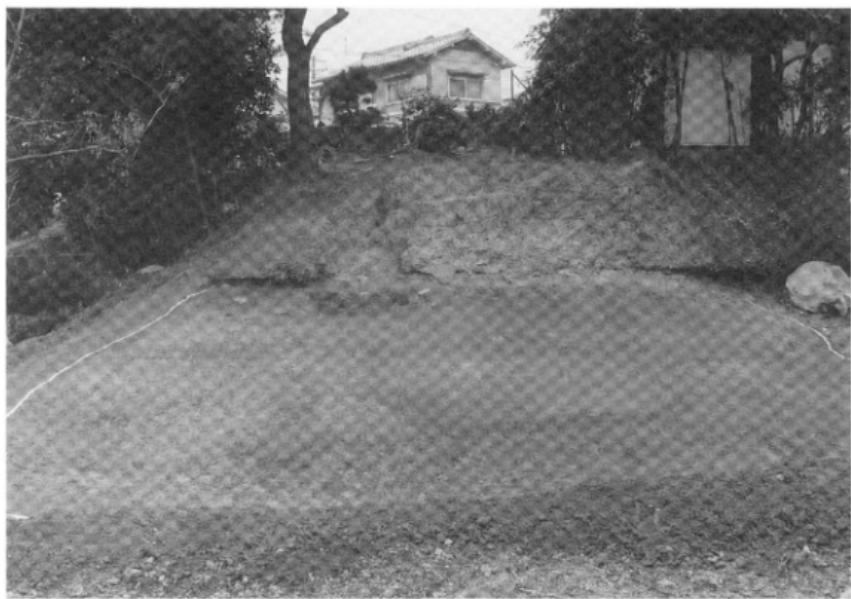
縮尺：1/1,800 (1994年8月撮影)



a. 調査区全景



b. 範囲確認調査



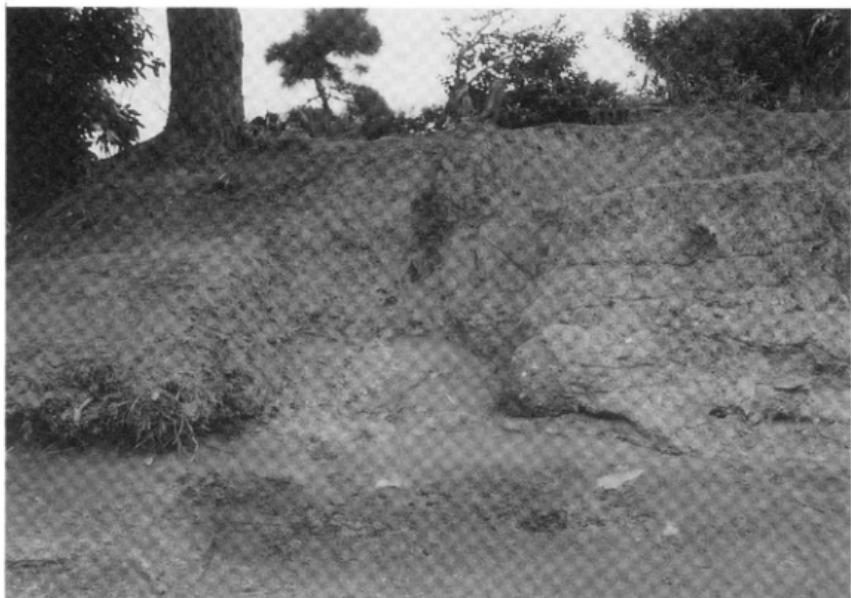
a. 灰原の広がり



b. 下部下層灰原掘削状況



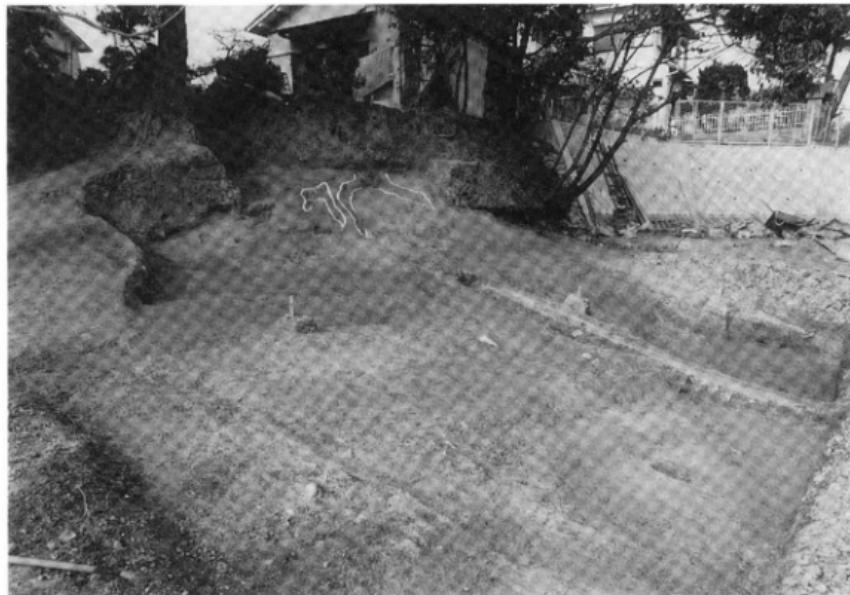
a. 上部灰原と崩土の堆積



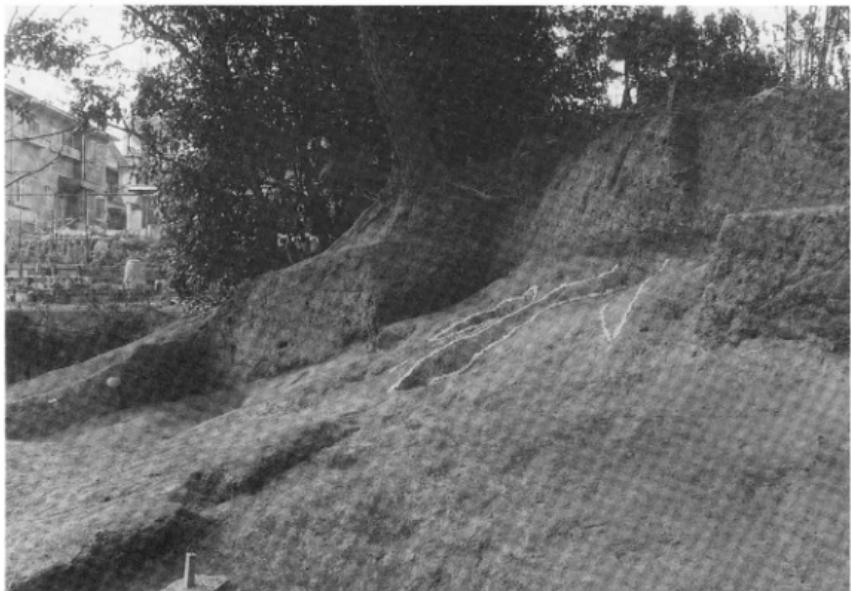
b. 上部灰原上面検出状況(半掘)



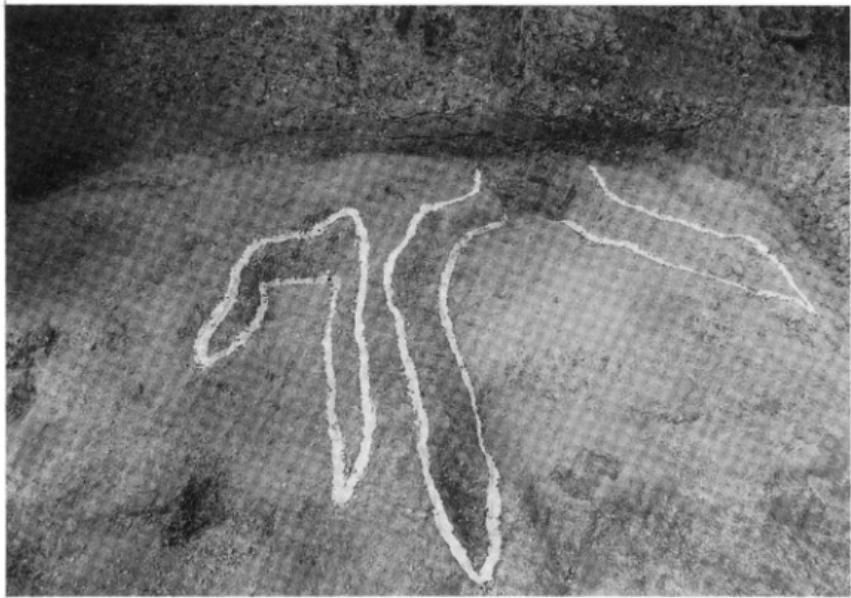
a. 灰原堆積以前の地形(東から)



b. 灰原堆積以前の地形(南東から)



a. 灰原堆積以前の地形(北東から)



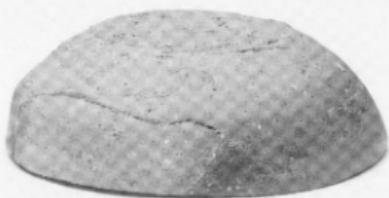
b. 溝1・溝2



図版 8
ひつ池西窯上部下層灰原〔HTW-A1〕出土遺物(1)



10



11



12



13



14



15



16



17



18



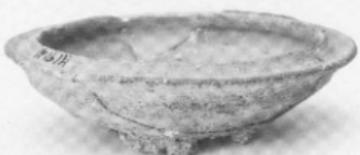
19



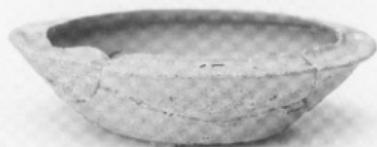
20



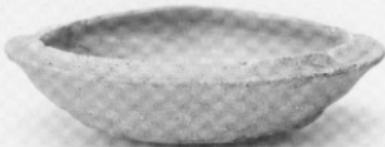
21



22



23



24



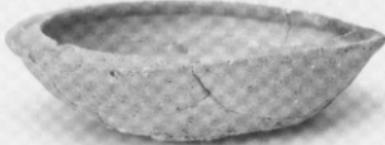
25



26



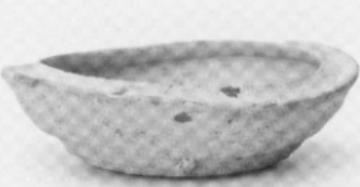
27



28



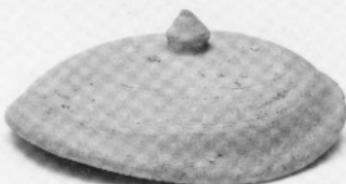
29



30



31



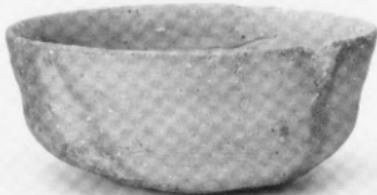
32



33



34



35



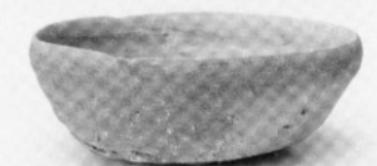
36



37



38



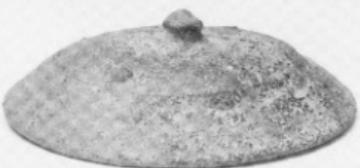
39



40



41



42



43



44



45



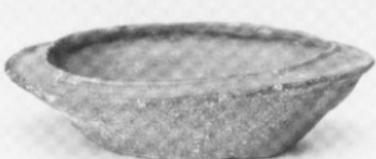
46



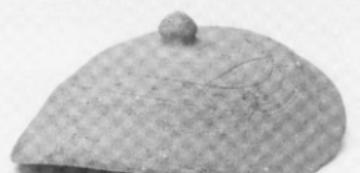
47



48



49



50

(41・42：下部上層灰原〔HTW-B2〕、43～50：下部下層灰原〔HTW-B1〕)



51



52



53



54



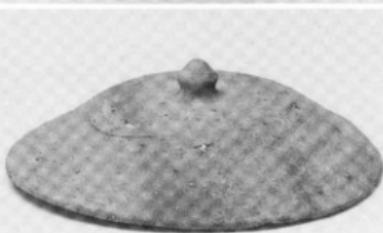
55



56



57



58



59



60

大阪狭山市文化財報告書10

ひつ池西窯

—陶邑窯跡群の調査—

平成5年（1993年）3月31日

編集・発行 大阪狭山市教育委員会
大阪府大阪狭山市狭山一丁目2384番地1号

印 刷 橋本印刷株式会社
奈良県北葛城郡當麻町竹内365番地1号

(橋田増刷分)

